



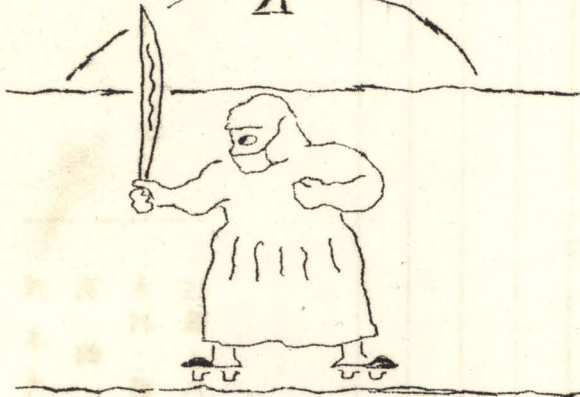
FORM



KLIO  
GLADISORNA

TOORIM

7



1932

KEIO

GEKADÔSÔKAI

刀林 第七号 目次

祝賀

歡迎

送別

同窓會

診療餘談

會員近況

同窓會報告

十週年記念号

御禮

學術

茂木先生像

別館全景

木村・前田両先生像

佐藤・大養両先生像

( 一 )

( 一〇 )

( 二七 )

( 二九 )

( 三〇 )

外科  
整形外科

(三一)  
(四一)

医  
局

茂木先生

(四九)

茂木先生謝恩會

(六二)

外来診察室

(五〇)

新入局員歡迎旅行の記

(六五)

診療近況

(五一)

浦安舟遊びの記

(六九)

外科医局發展近況

(五一)

新入局員紹介

(七五)

学生手術実習

(五四)

七十五週年記念

(八七)

職員食堂

(五五)

六ちやんの事ごと

(八八)

續圖書室の塵

(五六)

婦長從軍感想記

(九五)

文  
藝

その後に来るとの

汀往

生 (九七)

柔き觸感

春

宵 (一〇一)

墜ちた仙人 ..... 無名氏 (一〇七)

病院事件 ..... 甲傘武郎 (一一二)

無帽主義者の災難 ..... 無帽生 (一一〇)

夏四題 ..... ハイマート生 (一一八)

三絃 ..... 大島紀行 ..... 弥次喜太三遊子 (一二〇)

世智辛い事です ..... 外苑にて ..... はしとと (一二四)

秋 ..... 治生 ..... 駄句 ..... はしとと (一二五)

雨 ..... はしとと (一二六)

スポーツと救護

医局スポーツ ..... 救護一束 ..... (一二七)

青山外科對抗競技 ..... 富士救護の憶出 ..... (一四三)

医局便り ..... (一六七)

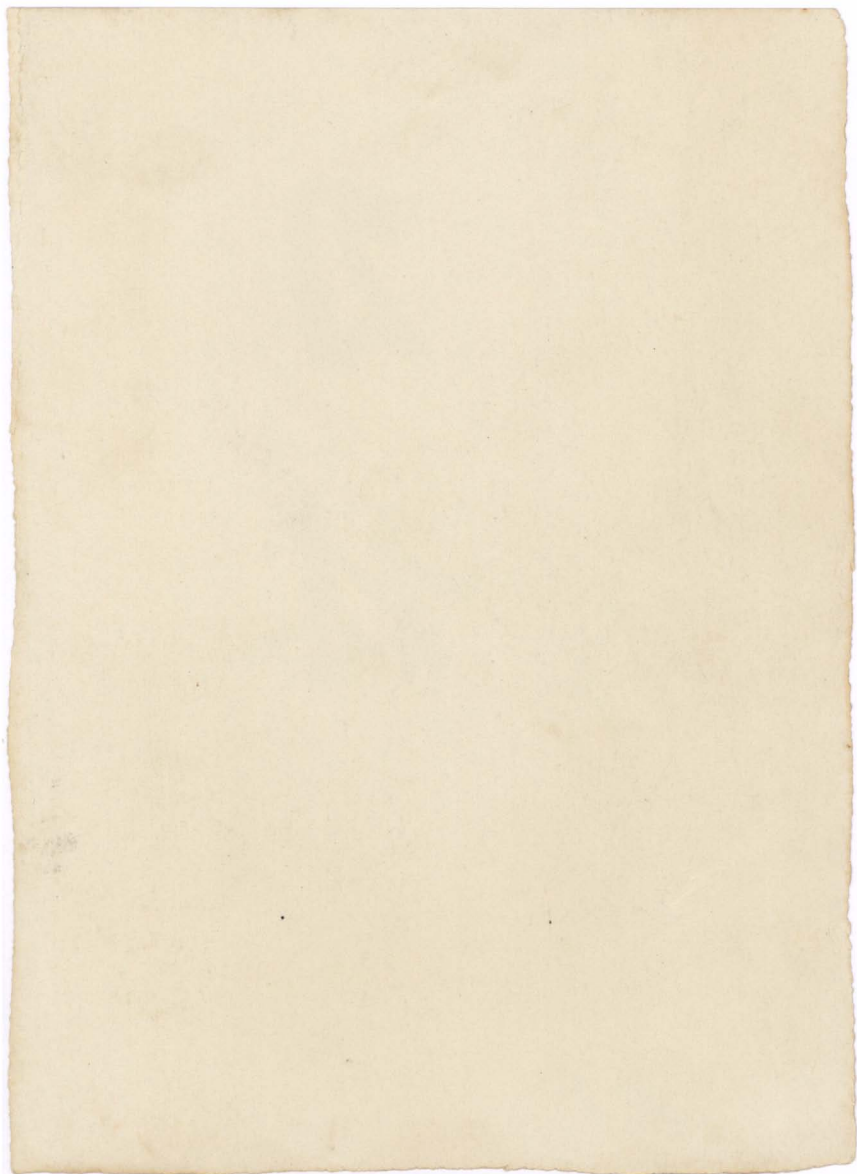
名簿 ..... (一八五)

編輯後記 ..... (一九四)

刀

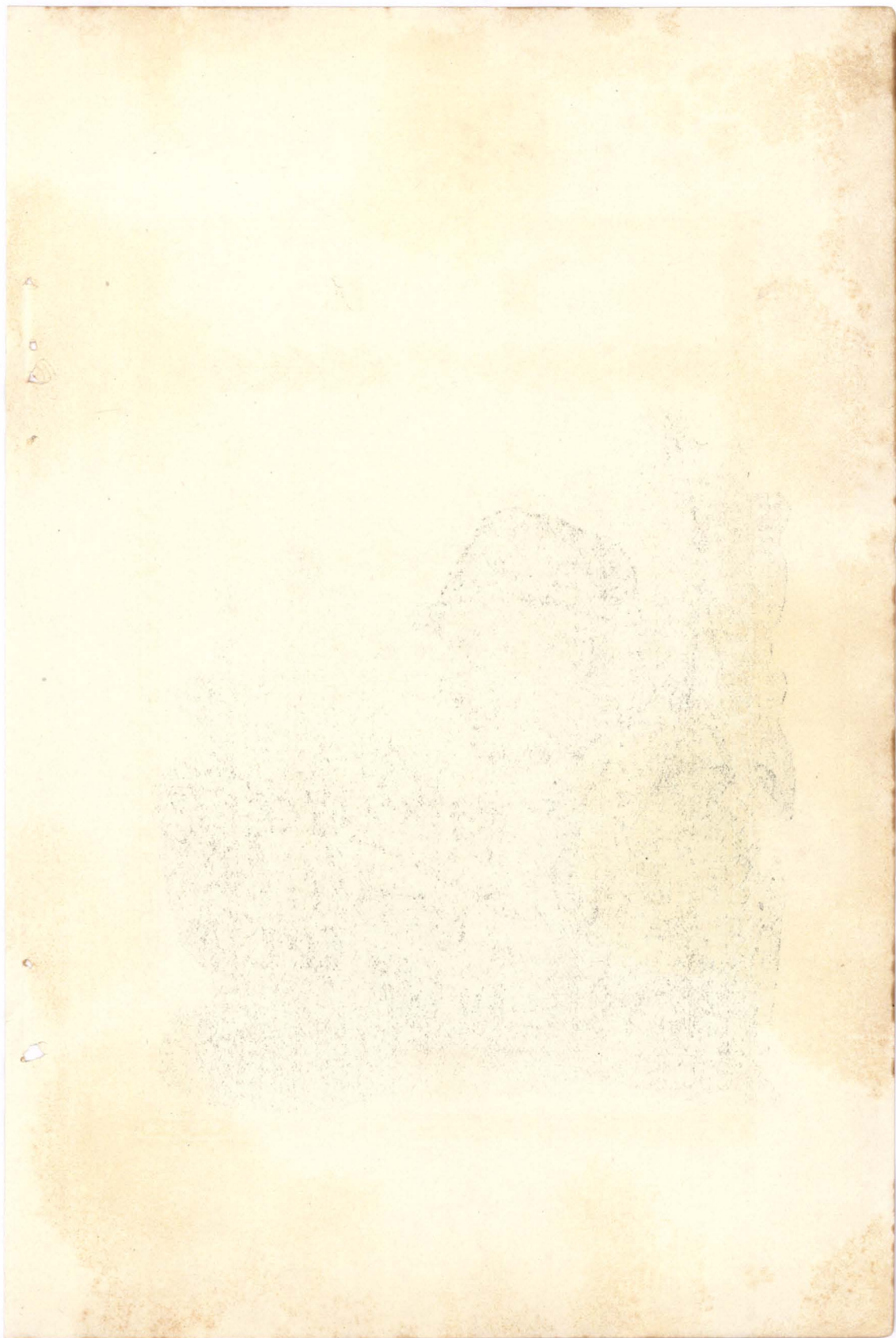
林

刀林  
卷之二

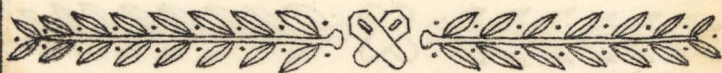








祝 賀



論文通過

篠原靜夫君

昭和七年三月

照井侃君

全 四月

大槻正路君

全 九月

(東大)

原廣治君

全 十月

村上晋君

全 十一月

講師へ昇格

神山敏雄君

昭和七年四月

原廣治君

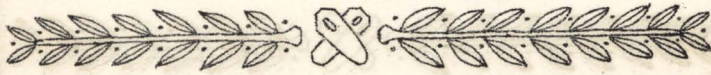
全 右

川田正雄君

全 十一月



迎 歡



歸 局

中 村 次 郎 君

田 中 周 吉 君

島 田 信 勝 君

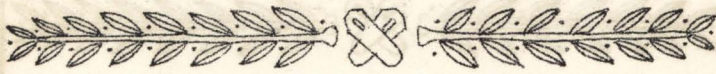
昭和七年四月  
(生理学教室ヨリ)

昭和七年九月  
(海軍二年現役ヨリ)

昭和七年十一月  
(近衛三聯隊ヨリ)



迎 歡



新 入 局

井出行乎君

昭和七年一月入局

(九回卒業 内科ヨリ)

伊藤國男君

全 四月

(十回卒業)

板橋 剛君

以下同ジ

以下同ジ

畠中卓助君

門橋 勇君

龍野一雄君

中村 寛君

野崎寛三君

古山 実君

小平 正君

齋藤修二君

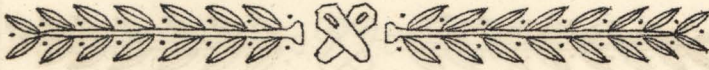
宮尾 啓君

全

十二月

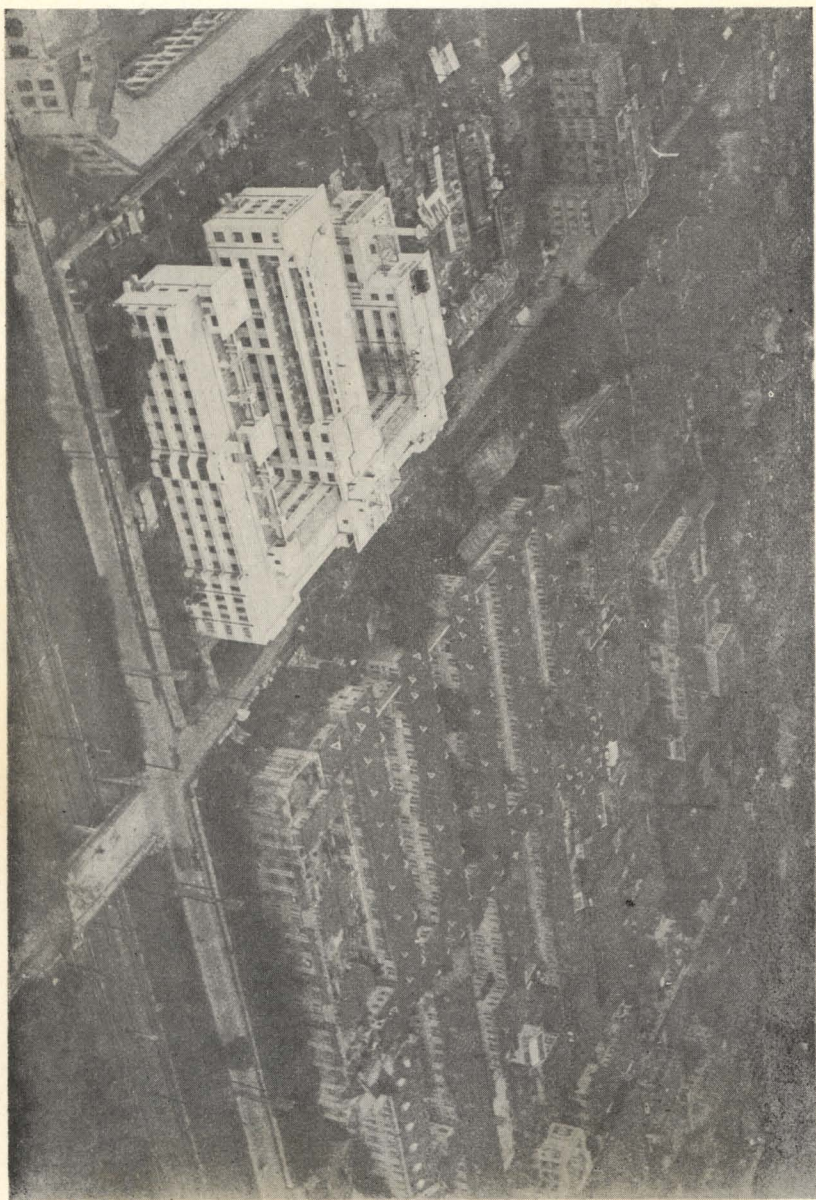


# 送 別



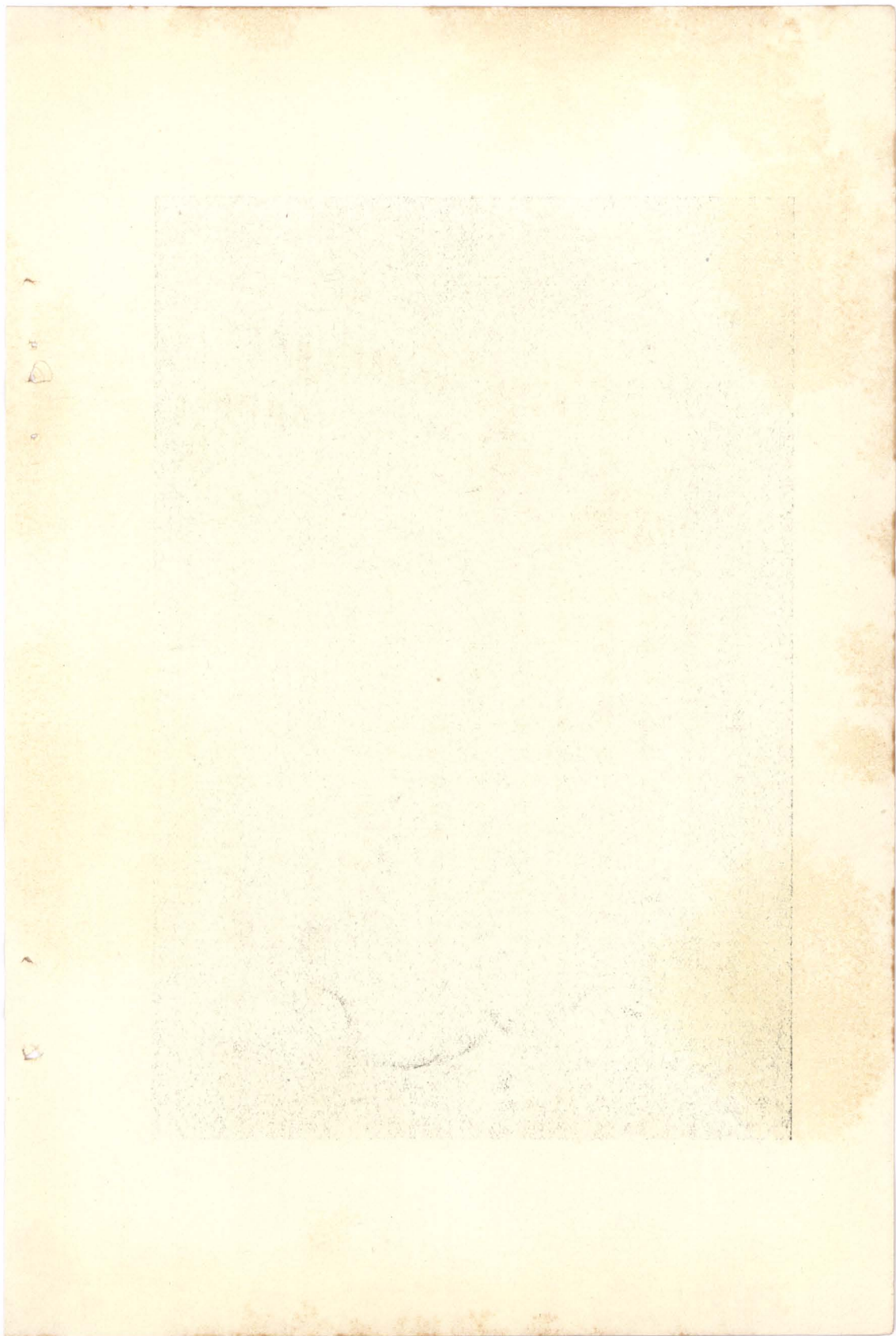
辻岡 元君	昭和六年十二月	(自宅開業)
古川 明君	昭和七年一月	(芝濟生會)
島田信勝君	二月	(近衛三聯隊)
小方則太郎君	四月	(青森)
寺田泰三君	右	(文部省練習船海王丸)
森 豊明君	右	(横洪山下病院)
加藤銀治郎君	五月	(大連滿鉄療養所)
吉野史郎君	六月	(郷里ニテ開業)
原 廣治君	十月	(横洪濟生會)
富田勝郎君	右	(三重縣津)
中村廣人君	十一月	(土肥慶應堂病院)
相見三郎君	右	(信州下伊那郡中島分院)
神山地真氣君	十二月	(修善寺中豆病院)



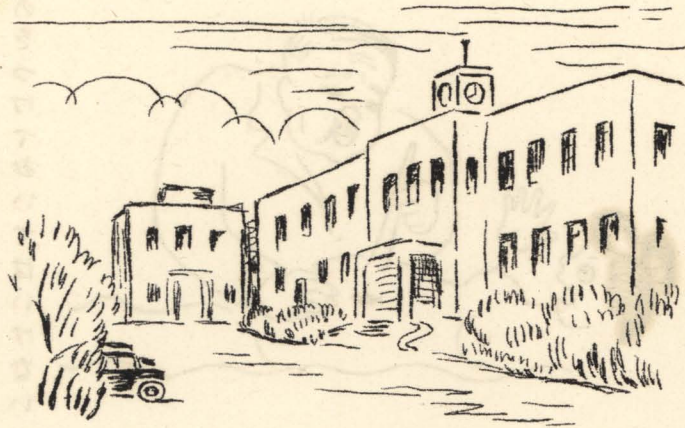


100

100







同窓會

◆ 診療餘談 ◆

三光町住人

(一) お臍の垢は取るべからず

昔からお臍の垢は取るものではない、取ると腹が痛くなる」と曰つて居る。けれどもそれは迷信だと考へてゐた私は、或時友人から紹介せられた一人の患者を診察した。年は二十歳で美人、虫様突起炎で最早や一週間を経過してゐるが手術の可否を問はれたのである。診察すると右下腹部に「ツモール」があり熱はない。今は手術をせないが良いと云つた。其処迄は無難であつ

だが、診察の際にお臍を見ると大豆大よりと大きな黒い臍石がある。此んなどのをつけておいてはいけなから取って仕舞ったが良いと云つて、「ピンセット」



居てきのふ附いて来た母親が一生懸命に温湿布を取りかへて居る。どういふ訳

で取らうとしたが堅くくつついて居て容易に取れなかつたが取れる事は取れた。其跡へ沃度丁箒を塗つて返した。所が翌日の夕方、其婦人の夫なるまだ若いハズが血色ばんでやつて来て、「昨日臍の垢を取ったから夕方から大変お腹が痛くなつて困つて居る。どうしたらよいか」と嚴談に及んで来た。そんなに腹痛があるといふ争はおかしいが、然し臍瘻があつたので臍石を無理に取った所から細菌の感染を起して腹膜炎が初まつたのではないだらうかといふ心配も伴つたので、恰度往診を出かける処だつたのを幸に其のハズと一緒に患家に行つた。患者は寢て

で温湿布をして居るのかと尋ねたら、内科の先生が盲腸炎の塊りがあるからよく温湿布をしなければいけないと云ったから十分間毎に温湿布を取りかへて居るのだとの事である。そして腹痛といふのは臍より右下方にあると云ふ。其部に圧痛は少しはあるがたいしたものではない。臍其ものには何の変化も認めず、圧痛もない。であるから心配はいらない。安心してよいと云つて聞かせてと、母親は臍の垢を取ったから腹が痛くなつたのだ、取らないがい、と云つたのを強いて取つたものだから、こんな事になつたのだとなか／＼承知しない。然しよく説明したらどうか得心したので帰つて来た。其後紹介してくれた友人の内科医の処へと文句を云つたさうだ。が兎に角其のまゝ、痛みは収まつたので辛なきを得た。

(二) 一五%のカルボールを「ウレトラ」に注入した話

淋毒性尿道炎の患者があつた。急性症状も去つて餘程快くなつたと思つて居たら暫く來なかつたのが、又やつて來て旅行に行つたと云つて居た。尿道に「プロタルゴール」を注入するとしみるといふ。斯様な時には一%コカイン溶液と等

分に於て注入すると無痛に治療が出来るので何時とさうして居る。

又急性膿瘍殊に化膿性乳腺炎には小切開を加へ、原氏法によつて三%カルボ  
ール溶液とを入れた瓶が同様の瓶で然かとレツテルと同一のものを張つてあつ  
た。問題が起つたのは此処からである。

其患者の尿道に蒸液(プロタルゴール)を注入すると痛むといふので、「コカイ  
ン」と等分にしてくれと看護婦に命じた。そして等分にした液を出してくれなか  
ら尿道に注入した。此の様にすると大体すぐ痛みがなくなるのにまだ痛いとい  
ふ。そんな筈はないと云つて居たら我慢が出来ると云ふから、それで氣にと止  
めなかつた。十分間経つて尿道から蒸液を出して患者は歸つた。直ぐ次に又同  
様の患者があつたので、「コカイン」と等分にしてくれと命じ、挿へた液を尿道に注  
入したら、今度の患者はとて痛くてたまらぬと云ふ。そんな筈はないと云つ  
て又注入するととて痛くてたまらぬと云ふから、おかしいと思つて、看護婦  
に蒸は間違ひはないかと調べさせたら、「コカイン」と思つたのは三%の「カルボ  
ール」液だつたといふので大に驚いた。で第二の患者はそのまま「カルボール」は使用  
せなかつたが、第一の患者の「カルボール」だつたと更に報告して來たので、道



理で先きに「コカイン」を使用した筈のにも係らず痛いと言つてゐたが、後には「カルボールの麻痺作用で餘り感じなくなつたのであらうと思つた。だが其後どうなつたかと心窺かに心配でたまらなくなつた。三%を當分に薄めたのだから一五%にはなつて居るが、尿道粘膜が腫脹して排尿が出来なくはなりはせないだらうか、或は潰瘍となり癒痕を生じて後日尿道閉塞を起しはせないだらうか、など、思ふと心配でたまらなくなつた。然し又一面には三一五%の「カルボル」で膿瘍腔を洗滌しても、其爲めに局所の腫脹も來なければ、特に癒痕が出來たとも思へない点を顧るとさう心配もいらなと思つた。夕方にでもなつたら、患者が何か訴へて來はしないかと思つて居たが、夕方にも翌朝にも來なかつた。翌晩になつて例の患者はやつて來た。然し別に氣色はんだ顔付でもないので稍、安心したとの、果してどうであつたかと内心氣

六  
になつた。患者は尿をコップに取つて来てから「きのふ尿道を洗滌して後は尿道がとてどいたくてたまらなかつた。そして夕方には大變腫れて来てどうなるかと思つた。こんなことなら一層死んだがましだと考へた。が今晚はどう何でもなくなつた」と曰つたので初めて安心した。

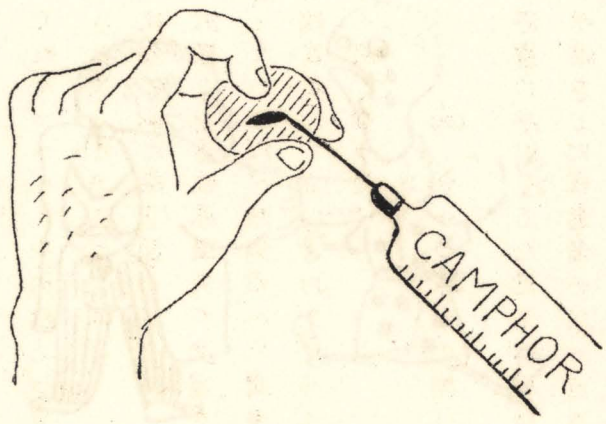
それで「カルボールの瓶」と「コカインの瓶」とは別々の色と形のものとして、「レツテル」も異つたものにした。

此れに似た話を聞いた。

矢張り淋毒性尿道炎の洗濯をするのに先づ微温湯で行ふのを誤つて熱湯で洗滌したさうだ。熱湯だから患者は非常に熱くてたまらない。「せがれに、え湯を飲ませた。どうとけしからん」と云つたさうだ。然し其後に尿の濁りはスツカリ無くなつた。

(三) 今一つ尿道の話

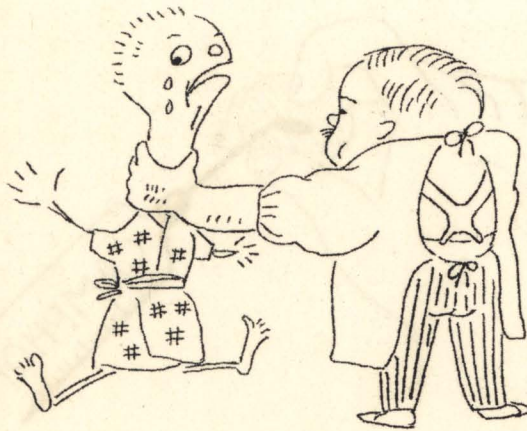
痔瘻の手術をした患者が術後尿の出ない事は頗る多い、此の例に洩れず痔核の手術をした或患者が尿が出ない、既に二十四時間を経過して膀胱部が非常に



腫つて苦しうて堪まらぬといふ。ネラトロンも尿道も消毒して導尿の準備は出来たので、消毒した油をネラトロンに塗つて尿道に挿入した。尿はすぐ出たが、患者は尿道が痛い、熱い、焼けるやうな感じがするといふので、消毒油の瓶をよく見たら20%カンフルオレーフ油の札がついて居た。

(四) 人工的包莖嵌頓術

中等度の包莖患者があつた。包皮の内面にニシケの尖圭コンヂロームがあつた。医師に診察を受けた。其医師は治療の目的で内面を乾燥させておく必要があるとの事だ。包皮をヒツクリかへした。従つて包皮尖端の狭い部分はペニスシャフトを緊扼することになつた。一兩日間は其治療を初めた医師の考へるやうに、ズルクスコロナーリスと表はれ、包皮内面と乾いた事は事實である。所が二日目の晩か



らは包皮は水腫状を呈するやうになり、三日目からは甚だしくなつて痛みも覚えるやうになつた。毎日其アルツトを訪問しては手當を受けて居た。そして包皮腫脹を退消さす目的で色々と付け薬を呉れるけれども一向に効き目がない。五日目から六日目にかけては、包皮尖端に相當する強く絞扼してゐる包皮の一部は壞疽に傾く状態を呈するに至つた。七日目の晩に別のアルツトの紹介で私が甫めて

診た。

ペニスは全体浮腫状に強く腫脹して居るが前三分の一は特に強く腫れて居り、包皮尖端部に相當する強く絞扼して居る包皮は巾一センチペニス全周の三分の二位に壞疽性の潰瘍を作つて居る。即ち包皮の該頃から起つた結果である。経過を聞いたら以上のやうな事だ。まだ結婚として居ない青年だ。ペニス全体がネクローゼにでも陥つたら大変な事だ。初め治



療したのは内科の先生ださうだ。それで患者が「こんなになる迄放つて置いた先生がどうかして居ますね」と云つたから、「此の部分の病氣を内科の先生に治療を受けたあなたとどうかして居ますね」と答へたら、患者と笑つて、それからは初めの内科の先生の事は曰はなくなつた。

該頓を整備しようとしたが既に炎症性癒着が強いので如何様にしてと整備は出来ないので、包皮の狭い部に縦に切開を加へて横に廣げて絞扼を緩和し、夫れくゝに治療したら、幸にネクローゼは其れで止まつて跡は癒着で治つた。然し癒着部の包皮はシャフトの部分に強く癒着して、包皮の円轉滑脱ダウたる運動は最早や嘗まれなくなつた。



生花にしたいが  
どこやら  
氣がとがめ

☆☆☆



## 會 員 近 況

○

旅行中で返事がおくれました。

小生相変わらず同じ仕事をやって居ます。今年の春、外科学會の宿題をやらしてもらひましたので、一寸仕事と一段落ですが、続いてボツ／＼やつてます。

九月から十月にかけて満鮮を一ヶ月ほど旅行して、少し認識がたしかになつた様な気がいたします。

皆様の御健勝を祈ります。

○

大庭 國 紀

皆様マスマス 御健勝ナニヨリト 存ジ上ゲマス。

私モ御カゲデ 兎ヤ角ト大過ナク、診療ニ従事シテ居マス。

皆様ノ御健闘ヲ祈リマス。

柳 宗 一

謹啓

○  
医局各位益々御健刀御健筆の段奉賀候

刀林とはや第七巻御発行の由ちやうど小生の富士見に於ける年齒と全じく格別の愛着を感じ申候

富士見に於ける日常は平凡と申すより他之なく、未だに暗夜をさまよふ氣味あり御恥かしき次第に存候

各位の益々御奮闘せられんことを祈上候

○  
山 本 順

近況ト致シテハ遊ビ第一へ先生ニハ甚ダ申訳無之キ次第ニ候ガ、勉强零ニ候當地ハ又遊ブ（酒トハ関係ナキ意味ノモノニ候間此レヲ御取リチガヒナク）事ニハ事缺カズ候、冬ハ「スキ」、雪ガ消エレバ「ゴルフ」、又夏ニハ其ノ上海水浴又釣等ト四季ヲ通ジテ遊ビ事有之小生如キモノニハ好適ノ地ニ候、壯快ナル「スキ

「優雅ナル」ゴルフ」此レ等ニ付キテハ更メテ井上君カラ報告有之候筈ニ候、  
以上ガ小生ノ近況、此レデ市會議員等云フ姑ガ居ナケレバ日本一ノ樂園ニ有之  
候

○

今 井 金 治

拜呈近くに居りながら御無沙汰勝で申訳ありません。其後外科同窓會と幹事  
諸兄の熱心な御盡力にて益々御発展の事と存じます。

私と御蔭で無事東電病院に勤めて居ります。

○

牛 久 昇 治

益々御清栄の段奉賀候 陳者小生儀御蔭様にて毎日無事診療に従事致し居り  
候間御安心被下度候

聖愛病院はクリスチヤンの博愛主義を看板として悩める者を救助し貧困にて  
医療を充分に受け得ざる者を実費又は施療にて診療するのが目的になり二十五  
年の歴史を有し初めは大連慈善病院と称され経営と相當困難せると此の頃二三

年前より内容と立派になり利益とある様に成りたるものに御座候。建物は本館と病室と看護婦寄宿舎分棟（結核病室）等あり、レンガ造りの三階建にて堂々たるものに御座候。ベツトは全部にて百五六十あり内結核病室や精神科病室を別にすれば百室位に御座候。外科のベツトは三十位あり入院患者の都合により他の病室と使用される様に相成り居り候。外來患者は総數にて平均二百五十名位、外科の患者が一日平均五六十名に御座候。外科の入院患者は現在十八名あり、朝の九時から午後の四時迄の勤務に御座候へ共、外來と病室と手術と全部小生一人にて助手はなく可成りの労働に御座候。

然し手術と時々有之候間毎日愉快に働き居り候。忙しい最中は看護婦と静脈注射位手傳ひさせ三人の看護婦と午後の四時迄働き続け候。時々入院患者の処置を忘れて帰る事と有之候。小生の觀る所では丁度済生會病院と実費診療所とを合せた様な病院に御座候。

看護婦は四十名なると予算が無き為め増員する訳に行かず可成り苦しい勤務をしておる様に御座候。

毎日診療開始前に廿分間礼拝の時間あり、讚美歌を唱へお祈りして、聖書の

講義まで聞かされ此の頃は大部小生と神に近づき申候

中略

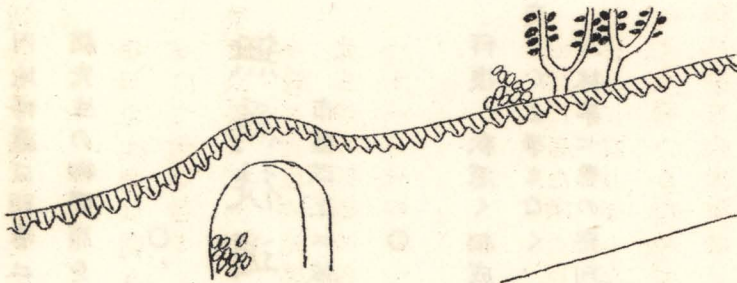
毎日の仕事は割合に気持よく出来申候間御安神被下度候 試験室も今迄は名  
のみにて睨卵番と「シクロトーム」と塵が積つて使用する者無き有様なれど此度  
整理改善して利用する様相成り申候

今後共宜敷御指導被下度

先生始め医局の各位によりしく御傳言被下度候先は不敢取御一報申上候  
(十一月廿四日)

○  
大曾根 幾次郎

函館に居た頃から比較すると東京へ帰つて来てからの方が寧ろ刀林に御無沙  
汰勝ちになりました。医局同人諸君の近くに居ると云ふ事が一種の心強さと安  
心とを興へるためでせう。仕事の上から云ふと、言はば横道に入り込んで居る  
私の毎日の生活は、以前に想像して居た程愉快などではありません。格別病  
気とせず学校へ通つて居られるのが幸福だと云へば云へぬ事とないでせうが。



○ 林 利 治

謹啓 其の後御無沙汰致しました。時正に天高き頃、外苑に銀座に御活動の事と存じます。小生御蔭を以て無事消光致り居り、何卒御放念下さい。

八月中旬以來不通だった、吉敦鉄道と一兩日前より漸く復旧して、遅ればせながら新聞と手に入ります。

満洲はとう冬です。朝の気温は一度氷と毎日張ります。オンドルとストーブで未だ慣れぬ寒さに堪えて居ます。

匪賊と冬の声を聞いてから、活動鈍く當地附近一帯に平穩です。

内地帰還は明春二月と四月とも言はれますが冬越しをするだけは確かです。  
諸先生の御健康を祈つてます。

○  
近藤 宗彦

# 無為徒道

ノ裡ニ新市民トナル。

市區改正ニ依ツテ匿名及小字名アザガ左ノ通りニ変更仕ル。(略)

○  
豊田 秀徳

拜復 秋深く相成り候、貴局諸先生益々御清祥賀奉候、小生無事、之と云ふ  
変りたる事もなく、生理教室にて過し居り候

刀林第七巻の発刊を待望申上候 匆々



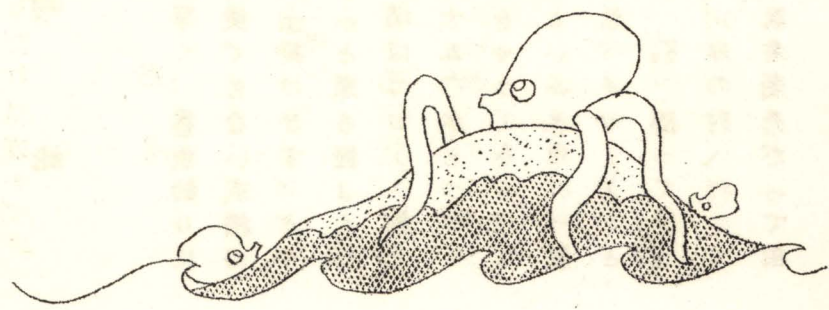


○ 渡辺 治生

春夏秋冬一巡り、房州の風物にも慣れま  
した。

今年の春、田雨の中に捨てられてゐた、  
小犬を拾つて来て育てましたが、今は一人  
前になつて敵歩の相手をして呉れます。ブ  
ンク、飛び廻る海軍の飛行機と余り耳につ  
かなくなりました。

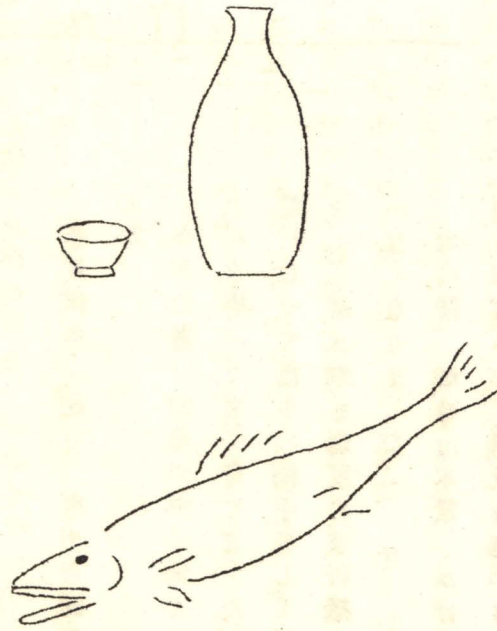
酒は禁、烟草は不禁、刃げをはやさず、  
髪を伸ばさず、着変を認めません。



○  
吉崎 純

近況御報告申し上げます。

元氣はとてとすばらしく、毎日遊ばうけて居ります。朝早く、香魚釣りに



出かけて、万更でもない成績だと夕方から又出掛けます。どつちが本職ですかと来る程よく行きます。此の頃はコロく釣と云つて釣針を十五六本とつけて引つ掛ける奴をやつてをります。五六寸七八寸といふ香魚が一度に二つと三つとバチャ〜と水音をたてて、引つ掛つて来る事の愉快さ、川岸の村へ行つて

釣を本職に医者をも副業に、と考へる事すらあります。然し、医者商売だつて相

當なとんです。飯喰つて酒呑んで呑氣にやつて行けるんですから。残念な事に氣の合つた飲み友達が禁酒しやがつたんで此の頃チト、ペシヤンコです。家庭の事では昨年末小兒達に新しい才袋をとらつやりました。以上

○

四條 龍作

謹啓 時下秋冷の候に御座候処各位益々御清栄の段奉賀候

陳者過日刀林第七巻御發行の御通知に接し、何か失敗談にてと投稿致し度く思ひ居り候処遂々雜用に追はれ残念乍ら、その意を得ず候へ共、次回には何んとか、埋合せ致し度く考へ居り候間、悪しからず御了承被下度候

尚小生の近況に就ては、御報告申上ぐる程の事もなく、全く平々凡々にて、時々へボ暮を囲み居り候、連中皆ザル党にて、一向上達仕らず、無暗に口合戦のみ上達いたし居り候

家族とては老母一人小供二人中学在学中の書生一人計六名に御座候

右簡單ながら御返事申上候

敬具

小内昇

○  
謹啓

貴局益々御清様の段奉賀候

御書面の返信つい失念仕り申訳無之候

小生刀林會費未納致し居る様に思はれ候へ共、その詳細は多忙のため相わか  
らず甚だ御手数数下ら御報せ下され候へば早速完納仕るべく候

久しく医局を離れ候へば妻と別れ居る様な淋しさを感じ医局恋しの心日々に  
新なるを覚え候

○  
佐藤盛二

前略秋色も深くなつて來ました折から、医局皆々様益々御健康にて御精勵の  
趣大慶に存じます。當方其後健在平凡な日を送つて居ります。変りました点は  
御蔭様にて開業なれにして來た点と、本年六月十一日から横浜市伊勢崎町入口  
に出張診療所を増設した事です。今では此処の方が忙しいので大抵は此処に居

ります。狭くて見すばらしい所ですが、御來浜の折は御立寄下さい。

吉野 史朗



謹啓 時下秋冷の候諸兄益々御健勝奉賀候 下つて小生

其の後無事消光罷在候間御安心被下度候

七月十一日開業致し、奮闘致居候 今迄と度々御通信申

上ぐべき処今日迄延引申候段不悪御了承被下度候

何分當地は田舎の事故格別御通知申上ぐべき事もなく面白き事と更に無之候  
東京の事が毎日頭に浮び申候 野球とラヂオを以て満足致居候 独身者の居る  
べき所にては無之つくぐ、東京が恋しく御座候 医者の方と御蔭を以てぼっぱ  
つやり居り候 現今入院七名外來十五名内外に御座候 患者が一般に穢くシヤ  
シと種切れに御座候

諸兄の御健康を祈申上候

刀林の発行を聞き何か通信致したきとのと存居候 啓具

松井 八郎

拜啓 秋冷の候皆々様益々御清栄の段奉賀候

野球でござかし御忙しき事と存じ候、小生始めての海外勤務出発の際は何かと淋しく感じ居り候処、着任以來殆ど外科主任として多忙を極め久しぶりに外科医らしき心持致し居り候、未だ京城の町をも知らず、妓生とやらには未だ拜顔の栄を得ず、病院にのみ暮し居り候、官舎近き事とて、晝夜日曜等の別なき次第、都合よきやら、却つて不都合なるや不明に御座候  
今月に入りて未だ十日、既に七名のアツペ手術仕り候  
先は、近況御報せまで

中村 廣人

拜啓 前文御ゆるし下され度候

去る十日不肖私儀伊豆土肥へ赴任の節は御多忙中にも拘らずわざわざ御見送り辱ふし有難く御礼申上げ候

病院は未だ盛に工事中にて、廿九日の開院式迄竣工致すや疑問に御座候  
住居は海浜にて出船入船を眺め波の音を聞き、全々都の生活とは別世界にて  
医局の皆々様の御清遊には好適かと存ぜられ候  
年末の休暇には是非御出で下さる様御待ち申居候

○  
弓削 中

其後長い間御無沙汰致して居ります。茂木先生始め、諸先生には益々御勇健  
にて医局益々御隆盛の事と乍蔭衷心欣喜に堪へない次第です。下つて小生と具  
後相変わらず壮健にて、宮崎縣立病院に勤務致し居ります。末春三月縣下マダロ  
の港油津町に町立病院が立つ事になり目下盛に建築中ですが、内科部長に第一  
回卒業生河野秀次博士、外科部長に小生就任致し居る事になつて居ります。慶  
應医学の爲めに大いに熱誠を以て邁進する覚悟で居ます。

九州の一角小さな町に小さな規模の下ではあります。今までの経験を基礎  
に大いに勇躍する心算です。

筆不調法な小生にはどうも善い智慧と浮ぶさうにありません。終に刀林誌の

御隆盛を祈り併せて諸先生方の御健康を祈つて止まない次第です。

○ 富田 勝郎

(前略)

病院所在地は津市より約二里電車にて十五分にあります。田舎にて土地の人の訛、アクセントは半分はわからず僅かにF君のアクセントと共通点を見出し氣を慰めて居ります。

西井氏は内科、小兒科、理学科を看板に仲々流行つて居ります。外來少き時と三四十多きは八九十にも由ぶ由、目下病室の方と修理中にてベッドは約十個と思ひます。外科の方は目下設備中にて尚一週間や十日はかゝると思ひます。先は乱筆にて近況御通知まで。草々

○ 辻岡 元

早速御返事を出す筈でしたが去年十一月医局を去りましてと見学と云ふ格で一週に一度乃至二度と皆さんとお會ひとしお話として居るので、改めて近況を



御報告致す事とありません。目下は亡父の後を継いで医師四人兼剖師一人兼局生三人看護婦三人で毎日働かされて居ります。尤も小生宅では、内科と婦人科です。従弟のネーベンとしてやつと医局で一本立ちとなつた喜びから又ネーベン生活に入りました。医局に居ると異つて、吉原遊廓内の医者は短時間で大勢の患者と見亦慰安をしてやらねばならぬので、骨の折れる事一通りでなく、殊に彼女等は四囲の情况から医者が唯一の慰安して呉れる人と思ふて居るので普通の開業医より二重の手間が要り晝と夜と間違つた生活をして居る人達とて夜半に起す事を平氣でやられるので一番閉口です。今に手際よくなつたら苦報をお報せします。

當地にお出での節は御立寄りの程を。

尚末筆ながら、茂木先生初め皆々様の御壯健なる事を祈ります。

○  
相見 三郎

拜啓 御一同御健勝の段奉賀候

小生出発の際はお揃ひにて御見送り被下深く感謝罷在候有難く御礼申上候

病院は未だ落成仕らず、萬端の設備はこれより取懸る手筈にて来月上旬には  
 仕事と緒につく番と存じ候、何分山間僻地の事故偏に皆様の御復援に俟つ他は  
 無之候

當地は風光絶佳にて近く天龍の峡谷に臨み、遠く赤石の秀峰に対し万山の紅  
 葉眩きばかりに候、敢て提灯を持つにはあらねど是非諸兄の御遊訪を御願ひ申  
 上候

乍末筆皆様の御自愛御発展を祈り上候 匆々頓首



○昭和八年度同窓會役員

會長 茂木藏之助先生

評議員 犬養六郎君 (いろは順)

大庭國紀君

大曾根幾次郎君

上石英造君

竹下貫一君

梅村六郎君

柳莊一君

山本順君

前田和二郎君

木村博君

幹事 町田謙二君 (昭和七年十一月改選)

川田正雄君 (會計)

百溪定七郎君

田村信介君  
 笹島彦次郎君  
 伊藤國男君

○昭和七年度會計報告

收入の部

昭和六年度繰入金 三二八七・三四  
 〃 七年度一般收入 五二五・〇〇  
 計 三八一・三四

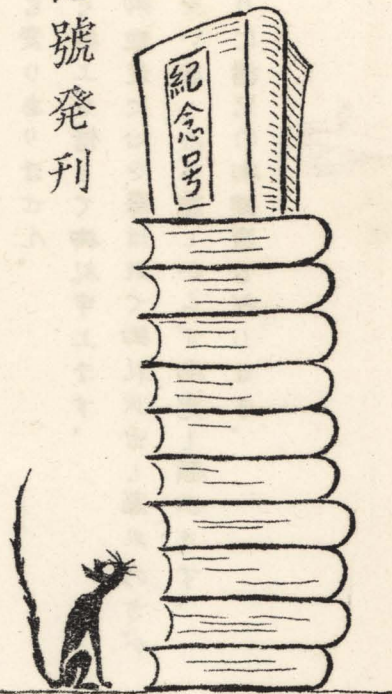
支出の部

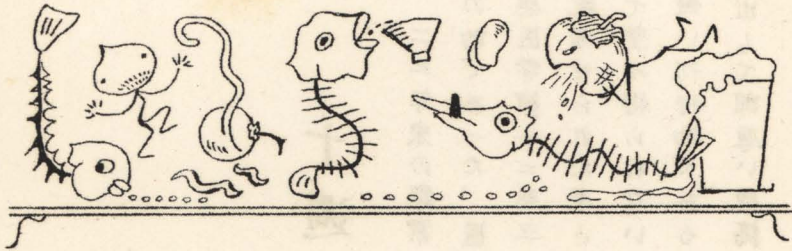
一 般 支 出 九二・二五  
 外科教室十週年紀念号 一二四七・七四  
 出版並送費 一三三九・九九  
 計 二四七二・三五  
 差引残高

尚今年度より同窓會費を一年金三円に改正致しました。

## 十週年紀念號發刊

二三年來の懸案であり全同窓會員各位否全外科学會特望の的であつた、医局十週年紀念号は愈本年三月印刷發行せられました。慶應医学第十卷三号の附録として又單行刷りとして同窓會各員の御手許に配布せられた事と存じます。色々の方面の囀を耳にしますが、望むべくして望み得られない得難い努力であるとして珍重せられて居ます。全く類の無い刊行物である事は申す迄とありません。炎暑の頃庭の木陰に藤椅子を出して部厚い原稿を整理せられた茂木先生の御奮闘が目に寫ります。





## 禮 御

各地に御健闘致さる、諸先輩には、医局に於ける我々後進をお忘れ無く、毎度季節の名産を御送り下さいまして有難う御座います。

忽ちのうちに酒は樽々、魚は骨々、果物は皮にして一同珍重玩味致して居ります。此点昔と少しと変りありません。

厚く紙工を借りて御礼申上ます。

猶御馳走に心を奪はれて御礼状出し漏れの方が御座いましたら悪しからず御免し願ひます。

終りに諸兄の御健康を祈ります。







# 術 學



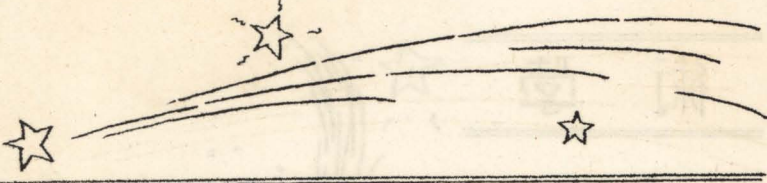
## 外科

◎日本外科学會總會 (第三三回)

我国外科学の尖端を物語る日本外科学會總會は春尚寒き四月一、二、三の三日間東大工学部新講堂で開かれました。

當教室よりの演題は

- 一、日光紫外線量ノ時間的並ビニ季節的変動ニ就テ 志田君
- 一、火傷ノ單寧酸療法 百溪君



一、急性化膿性疾患ノ石炭酸洗滌療法ニ就テ(續報)

原 君

尚第一日(四月一日)當教室先輩柳莊一教授は宿題報告者として「氣管支喘息ノ外科(特ニキウンメル氏頸部交感神経切除術ニ就テ)」に就き多年の蘊蓄を傾け約二時間に亘り講演せられ多大の感激を興へられました。

◎外科集談會 (於神田一ツ橋學士會館)

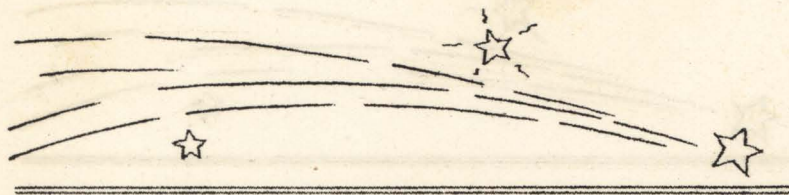
第三一二回(九月廿二日)當外科教室當番

當教室より鍋島、小野田両君の演題がありました。が塩田教授帰朝歓迎會を兼ねた為時間の都合で全教授の「歐米外科見聞談」のみとなり、教室両君の演題は次回と致しました。

第三一三回(十月廿八日)東京鉄道病院當番

一、結節性精系動脈周囲炎ノ一例 小野田 君

一、肺臟チストマ卵ニヨル陰囊内腫瘍ノ一例 鍋 島 君



一、大腿内側筋肉ヘルニアノ一例  
成内君

一、小児ニ發生セル瘰癧ノ一例  
土方君

◎慶應医学會總會 (昭和七年十一月東校舎講堂)

一、開腹術ニ於ケル血圧ノ変化  
瀬尾君

◎抄讀會 (昭和六年十一月—七年十月)

第七〇回 (十一月廿六日)

一、慢性骨髓炎ノ肉蠅幼虫ニヨル治療  
笹島君

一、膝關節結核ノ診斷ト治療並ニ關節鏡ニ就テ  
小沢君

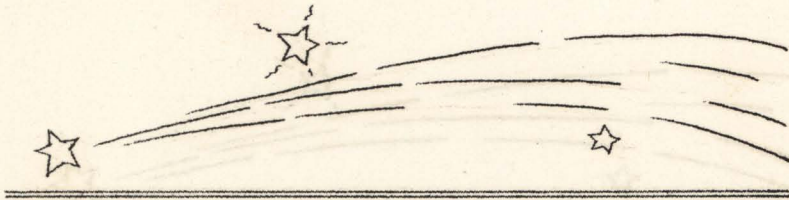
一、包莖ノ一新手術式  
森文君

第七一回 (十二月廿二日)

一、植皮法ニ就テノ一新法  
明察君

一、ヒヨルドトミー  
島田君

一、手術ニ對スル患者抵抗カノ測定  
相見君



一、「ヒパルビタミノージス」D 志田君

第七二回（一月廿八日）

二、「アクスハウゼン」氏ノ骨前移植ニ就テ 武藤君

一、新脾臓内分泌物「カリクレン」並ニソノ治療的應用 布留君

一、「ペリヅラーレゼグメンテレアネステジ」 田村君

第七三回（二月廿五日）

一、「ヘモチトラート」ニテ惹起セル造血器ノ組織学的変化ニ就

テ 粟本君

一、静脈留ノ注射療法 酒井君

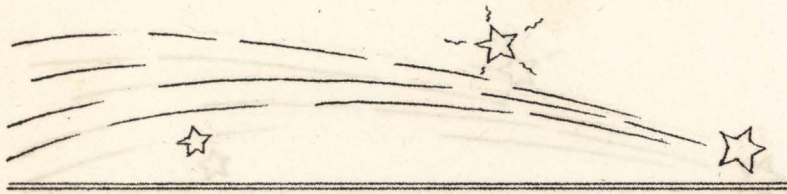
一、「イレウス」ニ於テ惹起セル自家中毒 橋本君

一、外科的骨疾患殊ニ骨髓炎ニ於ケル肝油療法 高橋君

一、化膿性腹膜炎ノ血清療法及原因並ニ経験 中村君

第七四回（三月二十八日）は學會予演

三月末医局茶話會にて抄読會を月二回とすることに決し茂木



先生の御裁可を経て昭和七年度より第一、第三木曜の二回となり  
ました。

昭和七年度

四月は都合により中止し五月第一と合併しました。

第七五回（五月五日）

一、実験的局所化膿竈ニ於ケル殺菌劑効力ノ比較研究

浜名君

一、麻酔時及麻酔後ニ於ケル炭酸瓦斯吸入ノ應用

若林君

一、腹膜癒着ト消化酵素適用ニヨル其予防

伊藤君

一、多発性脂肪嚢腫（乳癌仮性再発）

土方君

一、全耳殻補充ニ就テ

君塚君

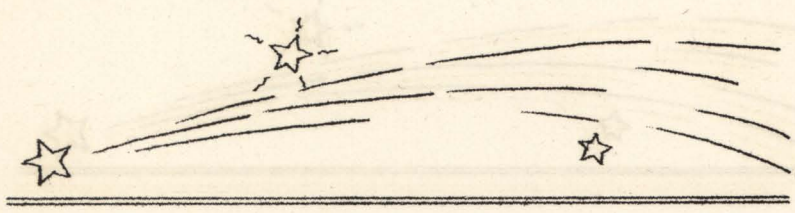
第七六回（五月十七日）

一、血液成分測定器官トシテノ副腎

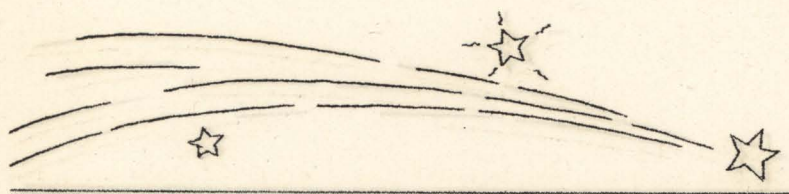
百溪君

一、小児ノ臍胸ニ就テ

伊藤君



- 一、食道胃吻合術ニ就テ  
板橋君
- 一、螺旋平板縫合ニヨル腹壁ヘルニア手術  
畠中君
- 一、四肢膿毒症及進行性栓塞性靜脈炎ニ於ケル靜脈結紮  
神山地君
- 一、小腸瘻閉塞ノ適應及技術ニ就テ  
小野田君
- 一、手術後進行性皮膚潰瘍  
瀬尾君
- 一、第七七回（六月十四日）  
ソヂウムアミタール（百七十二例ノ外科的手術ニ於ケル靜脈内利用ニ就テノ要略）  
門橋君
- 一、腰椎麻痺ノ經驗ニ就テ  
成内君
- 一、骨盤骨折ノ牽引療法  
堀田君
- 一、「ロイマチスムス」ノ定義及療法  
鍋島君
- 一、甲狀腺腫ノ手術方法ニ就テ  
藤原君
- 一、第七八回（六月廿八日）  
イ、指牽縮及聯指ノ鋸齒狀成形



口流注膿瘍ノ藥物療法（但シ漢法）

竜野君

一、腹膜炎ノ迅速ナル豫防法

富田君

一、麻酔中ノ皮膚温測定ト予後ニ対スルソノ意義

川田君

第七九回（十月十一日）

一、火傷療法ニ於ケル過誤危険及ビ予期セザル合併症ニ就テ

明樂君

一、先天性直腸閉鎖児ノ生存ニ就テ

笹島君

一、人工肛門ノ造設術ノ一新法

栗本君

一、腹腔内注入麻酔

小沢君

一、陰囊水腫ノ一新手術法

森文君

第八〇回（十月廿五日）

一、虫様突起炎手術ニ関スル血液像ノ價值

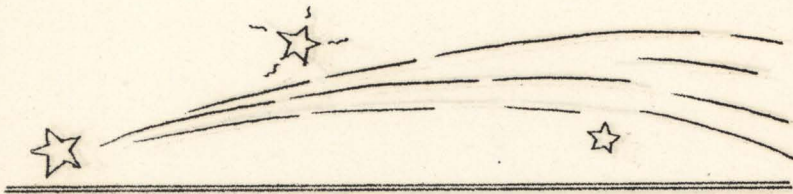
中村寛君

一、脊椎弯曲ニ於ケル脊髓ノ圧迫性麻痺

野崎君

一、尿閉トソノ酸療法

武藤君



一、乳腺腫瘍ノX線診断  
相見君  
一、肋間筋ノ断裂  
志田君

◎吾教室よりの文献

昭和六年十二月

一、「アクチノミコーゼ」(診断と治療六十二)  
町田講師

昭和七年一月

一、創傷療法ニ就テ(臨講七・一)  
町田講師

二月

一、腸管囊腫ノ一例(東京医事新誌七・二)  
桑野君

三月

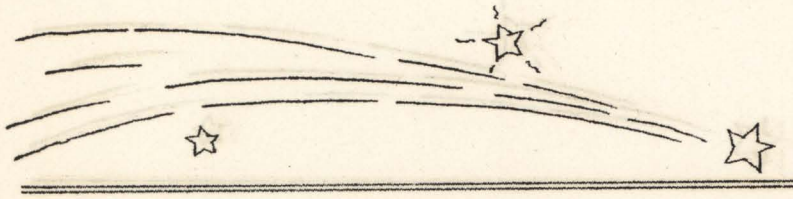
一、急性脾臓壊死ノ診断及其外科的処置(臨床医学七・三)

町田講師

四月

一、直腸癌ノ早期診断ニ就テ(臨床医学七・四)  
木村教授





十ノ内

五月

一、異物ニヨル穿孔性腹膜炎（臨講七・五）

木村 教授  
笹 島 君

八月

一、ホヂキン氏病（臨講七・八）

佐藤 助 教授

二、骨折ノ療法（全）

町田 講師

三、虫様突起内ニ於ケル異物ニ就テ（診断ト治療七・八）

森 豊 君

九月

一、急性化膿性疾患ノ石灰酸療法ニ就テ（日本外科学會雜誌七・九）

原 謙 師

二、膿胸（「グレンツゲビート」七・九）

沢 江 君

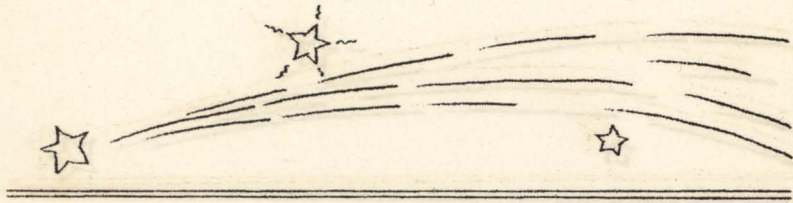
三、眞性肝臓膿腫ノニ例ニ就テ（全）

豊 田 君

四、脾臓膿腫ノ一治験例（全）

照 井 君

十月



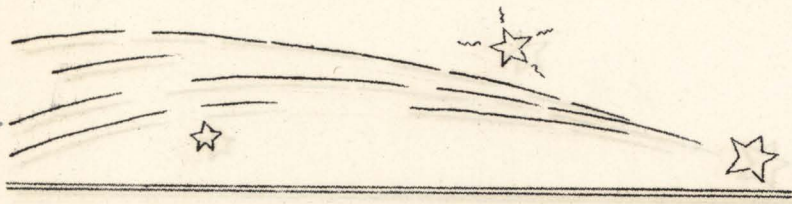
一、顔面アクチノミコーゼ（臨床講義）（実験医報七・十）

茂木敏授

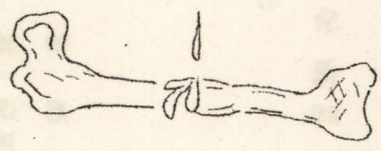
十一月

一、血液型 医学輯覽 臨時増刊、体液診断号、医学輯覽社發行  
町田講師

婦人之乳有數種	高腫爲癰堅硬疽
還有乳岩眞惡症	腫如頑石破如墟
鈕和之風生頸項	裙帶風瘡腳下需
又有溼腫瘡等疾	總生下腿工安居



# 整形外科



◎ 整形外科学會總會

昭和七年四月二日、三日於東京帝國大學工學部三階第一号講

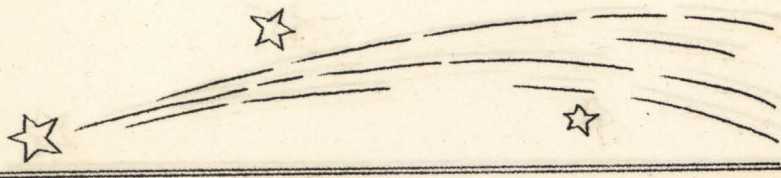
堂開催、吾教室ヨリノ発表演題及講演者左ノ如シ

二 日

「ミクログラフイ」ト脊椎及脊髓内手術例追加 岩原講師

三 日

赤血球沈降速度測定ニ影響スル外科條件ノ二、三ニ就テ



岩原講師

赤血球沈降反應ニ於ケル赤血球容量、赤血球數及血色素量ノ意

義 伊藤由君

骨關節結核ニ於ケル「グフタディアフォート」ト赤血球沈降反

應 布留君

先天性筋性斜頸ノ哺乳児期ニ於ケル保存的療法（「マツサーヂ」

療法）成績 島田君

ゲルソン、ヘルマンズドルフェル、ザウエルブルツフ氏無食塩

食餌療法ヲ施セル骨關節結核患者ノ治愈経過ニ就テ、其二退院

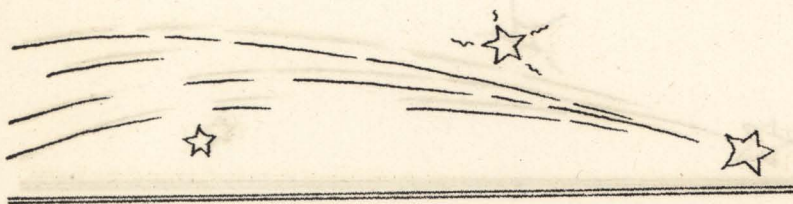
食餌療法中止後ノ経過 堀田君

◎整形外科集談會

第五九回（昭和六年十月）於横浜「ガーデン」

「ミエログラフィ」ト興味マル脊椎内手術例（其一）

岩原講師



第六一回（昭和六年十二月）於東京醫師會館

「ミエログラフィー」ト興味アル脊椎内手術例（其二）

岩原講師

大腿骨上端部ニ於ケル局限性纖維性骨炎ノ標本供覽

前田教授

第六二回（昭和七年二月）於日本赤十字社病院

剖檢セル頸椎骨折ノ一例

森 豊 君

第六三回（昭和七年五月）於慈惠會醫院講堂

「ミエログラフィー」ト興味アル脊椎内手術例（其三）

岩原講師

第六四回（昭和七年六月）於深川清澄庭園内涼亭

Margall 氏法ニヨル先天性膀胱破裂ノ一治驗例

神 山 地 君

附・膀胱粘膜炎ノ知覚ニ就テ

第六五回（昭和七年一〇月）於東大整形外科教室

堀 田 君



「ミエログラフィ」ト興味アル脊椎内手術例（其四、馬尾神経部  
「アテローム」様腫瘍）  
岩原講師

◎日本医科機械学会

日本医科器械学会十月例会於東京医師會館  
後頭下穿刺法ト自家改良穿刺針ニ就テ  
岩原講師

◎慶應医学会總會

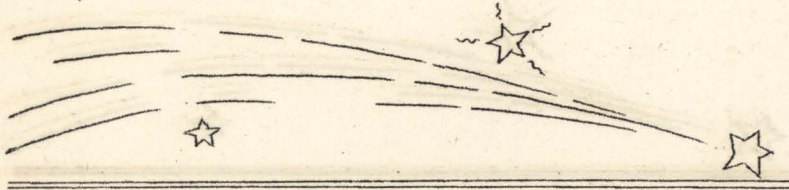
昭和七年一一月於東校舎講堂

後頭下穿刺ヘチステルネン・プリンチオンノ臨床經驗

岩原講師

◎吾教室ヨリ発表セシ文献

寒性膿瘍ノ診断ト治療  
（実験医報第一八年第二〇九号昭七、三）  
前田教授  
岩原講師



關節結核ノ诊断及保存的療法

岩原講師

(臨床医学第二〇年第三号昭七、三)

赤血球沈降速度ニ關係アル外的條件ノ二三ニ就テ

其二 放置時間

岩原講師

(慶應医学第一二卷第三号昭七、三)

赤血球沈降速度測定法トシテノ *Sedigraphic* トウエスタール  
ン氏法トノ比較

附 *Sedigrann* ニ於ケル一新知見 小方君

(日本整形外科学會雜誌第六卷第六号昭七、三)

「シエログラフィ」ト脊椎及脊椎内手術追加 岩原講師

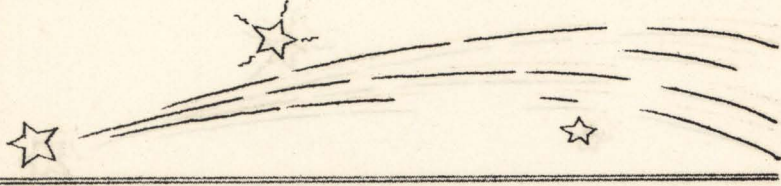
(医事公論第一〇三二号昭七、四)

赤血球沈降速度ニ關係アル外的條件ノ二三ニ就テ

其三 測定管腔ノ大小 岩原講師

(慶應医学第一二卷第五号昭七、五)

赤血球沈降反應ト *Wassermann* 氏反應トノ相互關係ニ就テノ



考察

若林君

(慶應医学第一二巻第五号昭七、五)

先天性筋性斜頸の哺乳児期に於ける保存的療法(「マツサーヂ」療法)の成績

島田君

(ダレンツゲビート第六年第七号昭七、七)

骨關節結核患者ニ施行セルゲルソン、ヘルマンズドルフェル、ザウエルブルツフ氏無食塩食餌療法ノ成績

堀田君

其一、入院食餌療法施行中ノ経過

(日本整形外科学會雜誌第七巻第二号昭七、七)

「ミエログラフィ」ト脊椎及脊髓外科知見補遺

岩原講師

脊髓硬膜外腫瘍ニ就テ

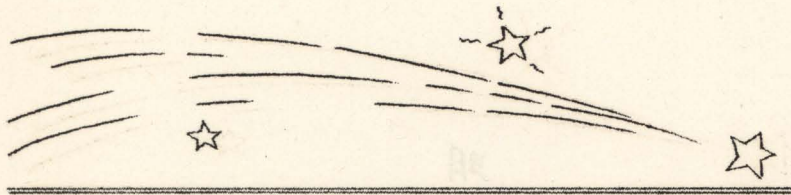
(日本整形外科学會雜誌第七巻第三号昭七、八)

骨關節結核疾患ニ於ケル「グツタディアフォート」ト赤血球沈降反應

布留君

(慶應医学第一二巻第九号昭七、九)





拘樓病ト紫外線療法

(グレンツゲビート第六年第一〇号昭七、一〇)

志田君

◎本年ノ京都ニ於ケル整形外科学會宿題ニ於テ本教室前田教授

ガ一部分分擔セラレマス

演題ハ「脊椎カリエスノ診断ニ就テ」デス

大方ノ御援助ヲ願ヒマス。



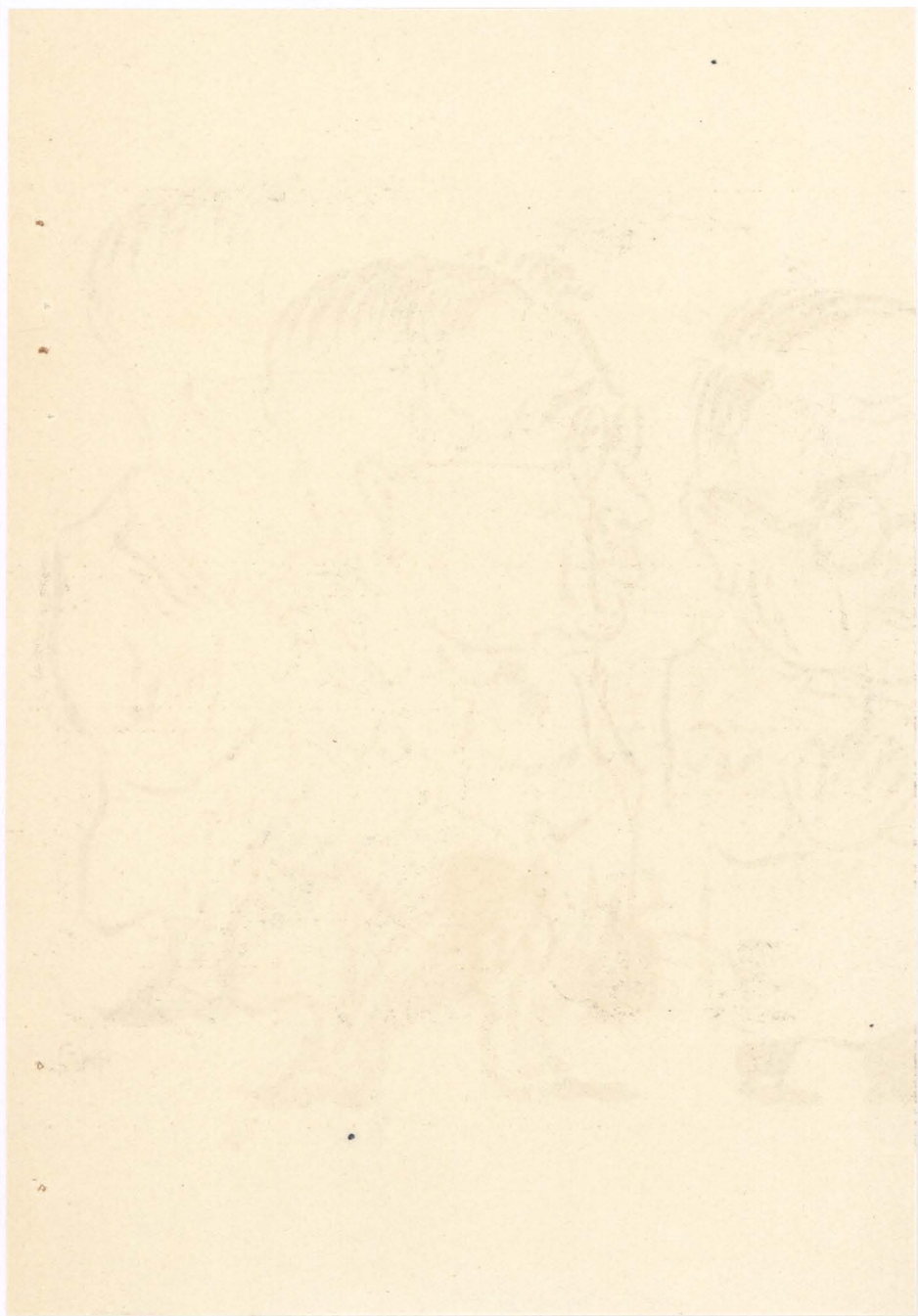
明  
番は

猫の踊りが

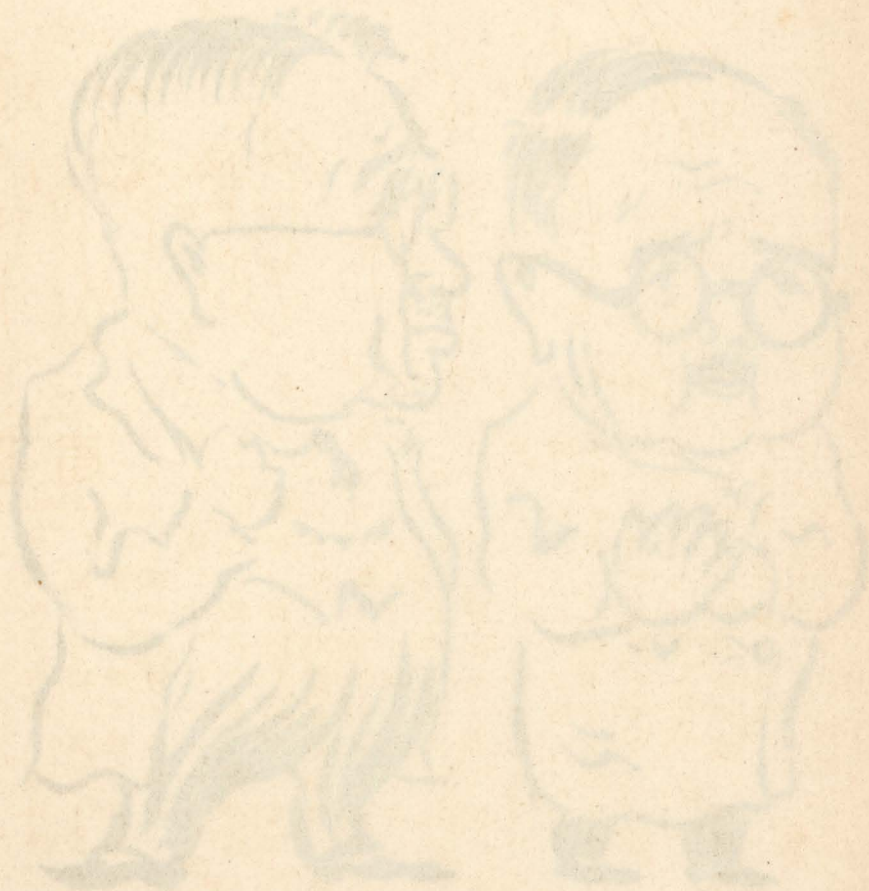
氣にかゝり













## 局 医

### 茂木先生

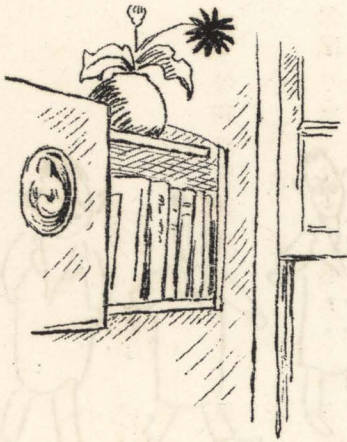
先生には益、御壯健で毎日外來診察、手術、講義、医局員の御指導等と寸暇も無く御活動致されます。誰かが何かの時に、外來診察と手術を一日でやつたらタタ／＼に疲れて恐しく忙しくて疲れるものだと感心して居ました。先生には此の忙しい寸暇を偷んで勉強せられます。十週年紀念号の執筆、外科類症鑑別診断の出版が此の御努力の一部として斯界を湿ほす事になりました。

猶医局に童顔を現はされる時は何時も快活で、時に野球のラヂオ放送を聞入られる事もあります。日光浴兼用の魚釣り野球見物と不相変続けて居られます。先日三田四谷野球戦には自らカツプを授英せられました。お酒と老酒をコツプでガブ／＼召上る事昔の通りです。

医局員一同先生の益々御健勝なる事を心から喜んで居ります。

# 外來診察室

外科の第一診察室は、相変わらず午前  
十時から茂木、木村、佐藤先生が診察  
せられます。依頼票に依る診察は十一  
時半迄です。フライの診察は今迄午後  
であつたのが午前中になり、処置室を



## 第三診察室と

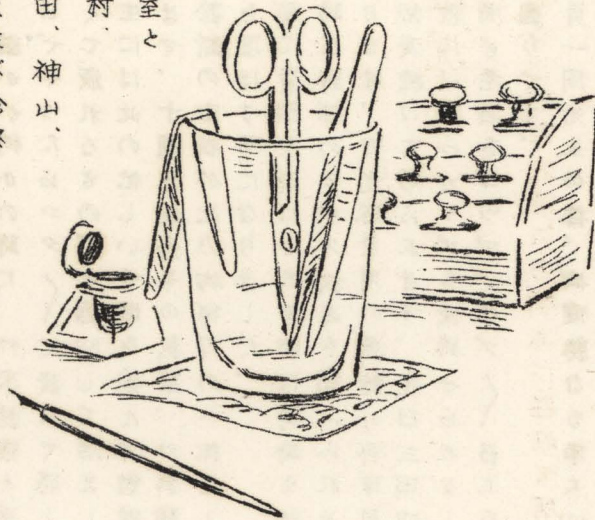
して、木村

佐藤、町田、神山、

川田、森先生が診察

せられます。

整形外科第一は前田、岩原先生が  
隔日に診察して居ます。





## 診療近況

外科外来患者 百五十名

入院患者 百名

矢張りアツペが一番多く本年既に四百五十名です

整形外来患者 百名

入院患者 五十名

脊椎カリエス、骨折、股脱が主です

西病舎が出来ると総べてがこの倍になります

## 外科医局発展近況

近年外科医局の発展は目醒ましいものがある。内部の事は全紙上に溢れて居るから外部の膨脹を摘記して見る。

近い所では西病舎が建て更つて別館になつた。白壁四層の広大なもので、外科は勿論内科、婦人科、精神科、結核の病室を備へ、講堂、手術室、レントゲン室を抱擁し堂々たる一城廓の觀を具へた偉風は、又四谷の威を加へた。十二月から開院の予定で、ベツトの配置は未定乍ら二三等室に當てらるゝ由で、何れ本館とは地下道で継ぐさうである。更に予防医学との間には七〇米と八〇米の運動場が出来る筈である。

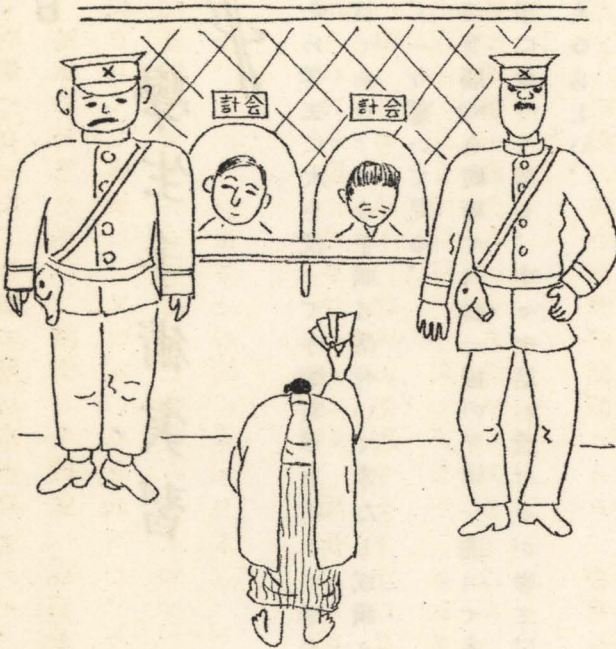
静岡市に日本赤十字病院が新設され只今盛に建築中であるが、院長には我佐藤助教自ら馬を陣頭に進め、川田、志田、栗本の諸氏が活躍する予定になつて居て今から準備に忙しい。何れ來年の五月頃開院の予定であるが、各科共我病院の腕利き揃ひであるので、富士南麓一般の人が待ち詭びてゐるとは左こそと思はれる。

猶伊豆の土肥、修善寺にはそれぐゞ町村の組合病院が新設せられ、慶應から是非との話で、土肥には中村君が赴任し、修善寺には既に候補者が定まつて居る。

その他最近、原講師は横浜の済生會病院長に赴任せらゝ等、書き出せば限り

の無い御目出度い話続きで、一寸公立病院の分だけを摘記して見たわけである。

大森のギャングが  
慶應病院を狙って  
ゐたと新聞に出て  
からは病棟會計の  
前は此の通りの有  
様であるのであり  
ます。





## 學生手術實習

昭和五年から學生に犬を使つて手術實習を行つて居る。今年で三回目である。大分手順と落付いて來たし成績と分つて來たので一寸書いて見る。

行ふ事は小は糸結びから、大は胃腸吻合術等で外科一般の手術一通りである。一組四名で十回で一課程が終る事になつて居る。中々世話が焼けるが學生は初めて持つメスに色々な感興を覚えるらしい。

卒業して外科をやる人は少数であるから大部分の人には無役の様に思はれたが卒業生の評判を聞いて見ると中々役に立つ相だ。例へば内科的方面の人が小手術をどうしてとやらねばならぬ時に落付いた氣分で居られると言ふ。基礎に行つた人は早速動物試験でマゴ付かずに済むと言つて居る。陸軍々医学校で手

術實習を再び行る者は未だ日本の何処の大学でとやつて居ないので同僚の間で大に先輩振つてやれる相だ。入局したての時手術場の評判では消毒其他の外科的訓練が行届いて居るので世話が焼けないと言つて居る。

猶学生自身の感想に據ると、何ぞと手術が出来るといふ自信を得ると言ふよりは、大手術は勿論如何なる小手術と雖も傍で見えて想像して居る程案に行くとのでない事を知つたと言つて居る。手術と自己の腕に対する正しい認識、是こそ此實習を行ふ眼目であつて、無謀に因る失敗を未然に防ぐものであり、今後の發達の一步を踏み出したのと言へる。今は食研の地下室の狭い部屋でやつて居るが、行く行くは立派な設備にしたいものだ。

山	かけ	カレシム	カレシム	カレシム
オムレツ	カツレツ	ポテト	ポテト	ポテト
メンチ	メンチ	メンチ	メンチ	メンチ
エビ	フライ	エビ	フライ	エビ

## 職員食堂

今まで一品一天張りであつた職員食堂は和食の外にカツレツ、メンチボール、等の洋食が五種類程出来る事に成り、其の日のコンデションでどうにでも食慾を調節し得る様になりました。代價は矢張一品金二十銭です。



# △ 續・圖書室の

塵  
▽  
▽



敲書生

## 一、圖書館

昨年は不完全な圖書を買入れるので大分骨を折った。どうやら大体片附いたので今年は慢然と増えるにまかせた形である。それでも去年の十一月からでは一七〇冊増加した。合計藏書數七百冊になつたわけだ。其中九十冊許りが瀬尾君寄贈の「ドイッテエ、ヒルルギー」である。一八〇〇年の末期から一九〇〇年の初めにかけて出版せられた広大な連続物である。出版から見ても歴史的に尊いだけのものと思つて居たが、いざ来て見ると中々便利で需用と相當ある。殊に臨床例の旧いものを探すには無くてならぬ。大いに感謝すべきである。其他新しい事では新しいにと未來の事だが、圖書費の寄附金が値打ちのある本の出ぬのを恨しく待つてゐる事だ。

## 二、雜誌の話

昨月で邦文雜誌の欠本を探すのは打切った。本屋も疲れたし、図書館も疲れたからだ。併し今一息と云ふので今度は丸善其の他に洋雜誌の欠本や「バックナンバー」の補充を注文した。可成り大部であったが四月頃からぼち／＼着荷し始め、着荷すると製本して七月には大体片付いて了った。流石書籍商の発達した独乙だと思つた。日本と違ふ。英佛のものは日本と同じく少ししかないのに未だに來ない。愉快だつたのは三四會の書籍部に五冊許り「バックナンバー」の端くれがあつて本屋が何の本か判らんでマゴ／＼して居る間に安く買取つて了つた。

是で洋雜誌の王座を占めて居る独乙書は大概揃つた。主なものは「ブルン」「ドイツチエツ・ツァイトシユリフト」「ツエントラル・オルガン」等で、最近犬養先生の寄附金で「ツエントラル・ブラットルグレンツゲビート」をそつくり買入れた。今迄は大部不揃の点があつて御迷惑をかけましたが、是からは「ナンバーワン」から何処を圧してと先づ一頁と落ちて居ない事受合だ。併し乍ら頭痛

の種は為替相場といふ厄介なもの、為に予算が足を出した事だ。

此の四月に雑誌と揃ったので雑誌目録を出版して各位の便宜を計つて見た。その際の記録では洋雑誌二十三、邦文雑誌六十種といふ事になつて居る。圖書の目録をついでに作つてくれと云ふ方がある。その方は大分大変な仕事になるので何かの機會に譲る事にした。

### 三、本の紛失する話



年に一回宛中央図書から人が来て図書調べをする。去年は休んだが今年は五月頃やつて来た。新しく紛失したものが一冊有つた外は、却つて一昨年無い事になつてゐた本が段々妙な所から出て来た。成績甚だ良好である。今年は昔から紛失になつて居る本六七冊、毎年事なので新しく買つて弁償して了つた。是で圖書の紛失は一冊も無い事になるのでさつぱりした。雑誌の方も今度の買入れで紛失したものと何となしに補充したのでから全く薩張りした。こんなさつぱりした事はない。



およそ本を紛失する人の事を考へるに、多くチビチビ惜りて惜溜めをする人である。後になつてどれを惜りたのか忘れて居る。最近貸出簿が盛に利用されるので薄い雑誌でも大概返つて来る様だ。甚だ結構な事だ。本年になつて全然出て来ない本はたつた二冊である。惜りた証據がない上に、此の本は一寸あつていゝものだし、掲示を出して何の反響もない所から推して或は盗難かと思われん。図書室には無雑作に揃べてはあるが、其実可成り貴重な本が置いてあるのだから、我々が紛失させぬのは勿論、見知らぬ外來者等には軽く注意をくばつて戴きたいものだ。敵書氏に言はせると図書の背を敲いてきちんとして置くのは紛失を早く知る手段なのだ。是非各位から御援助を仰ぎたい。

紛失では妙な話がある。今年の図書調べで、今は取つて居ない「アメリカ」の雑誌が五冊許り行方不明になつた。是はラヂウムと異つて大判の厚い本だから誰にと目に附く筈だが、図書係は勿論誰とそんな本の有つた事すら知つて居る人が無い。中央図書の帳簿には一昨年有つたとちやんと判がついてあるから全く不思議だ。何処を探しても全然無い。如何なる経路で是が発見されるか一寸察しみな様な氣がする。



#### 四、鼠の出る話

紙魚と言へば本にはつきとの、風流な虫である。処で無風流乍ら図書室には一疋も居ない。洋紙は食はぬものと見える。其の代り鼠が出る。やつと製本が出来上つて来た新しい雑誌の縁を奇麗に食ふ。おまけに糞等をして何喰はぬ顔を

して帰つてしまふ。

初めは一寸した悪戯だらうと思つて居たが、余程お氣に召すと見えて度々出て来る。最近又矢鱈に噛り出す様になつた。何足居るか知らんがたまらん話である。所で怪体な事にはどの本にも喰ひつくわけでない。必ず黒い「クロース」の本を喰ふ。それと中味には興味が無いと見えて表紙だけを喰ふ。表紙とボール紙よりは「クロース」を喰ふ。普段は「シャボン」を喰つたり本箱を噛る癖に図書となると一かど注文があるのは片腹痛い。

兎に角図書室の一大事であるが別に腹いせの仕様がなない。筋は違ふかど知ら

んが先づ製本屋を脅かして見た。彼の言ふには、黒の「クロース」の油が兎の嗜好に適するのだ、と説明するだけでケロリとしてゐる。こうなれば仕方がない。何とか退治法を講じなければならぬ。別に當ても無かつたが「リゾール」で本の縁を拭いて一番兎の出る処に置いて見た。今の処喰はぬ様である。

およそ円タクや人の集りで医者なる事を言ひ当てられて癪に触るのは「リゾール」の臭みである。若し兎公兎を喰へばいざ、か腹癒せになる。若し是を喰はずば日頃の罪一等を減ずると可なりである。一挙兩得とは是に近きものを言ふのであらうか。

兎公兎の嗜好



茂木先生謝恩會

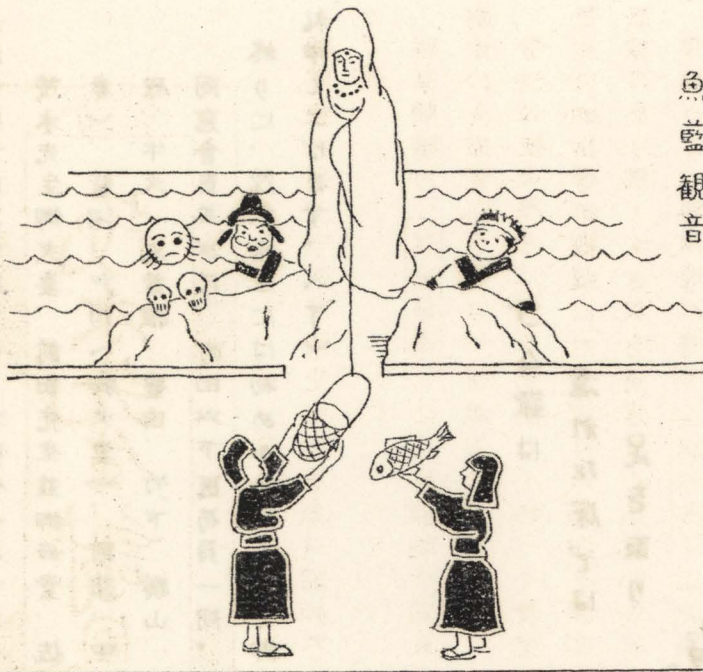
同窓會主催、吉例茂木先生謝恩會は昭和六年十二月十七日東京劇場で行はれた。

時争問題の満洲事変には時節柄一同大いに血を湧かした。つい思はず、劇中の支那軍人を罵り、憤激した。

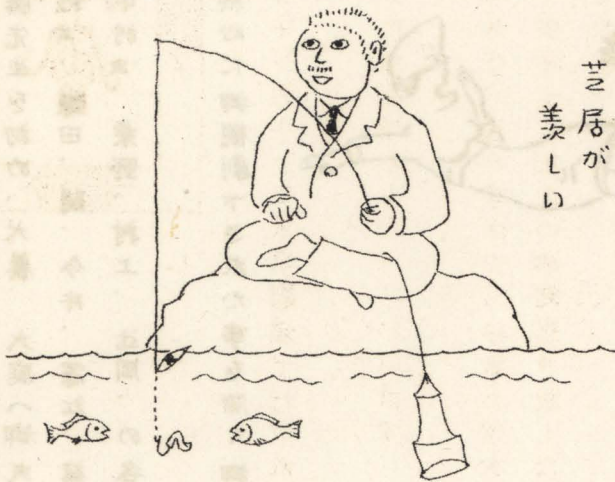
芳沢公使の熱弁に快を覚えた。終つて食堂に入り、盃を挙げて、平素の茂木先生の御指導御鞭撻に対し深甚の感謝を捧げ、併せて、先生の御健康を祝した。熱誠の余り祝しすぎ次を見落した先生方もあったとやら。

宴終つて、再び席に帰り、猪八戒に抱腹し、最後の小栗栖の長兵衛に義憤滑稽を交々感じ、歡を盡して、霧々の和氣の裡に散會した。當日出席せら

通天河の  
魚籃観音



昨日の  
芝居が  
美しい



れた先生方は次の通りで、大盛會であつた。

茂木先生御夫妻、前田先生並御母堂、佐藤先生を初め、大養、大庭（御夫妻）、柴沼、戸田（御夫妻）、阿部、中村武、鎌田、関、今井、澤江、篠原、牛久、大曾根、豊田、竹下、横山、中村、桑野、村上、辻岡、の各同窓會員並びに、町田以下医局員一同。

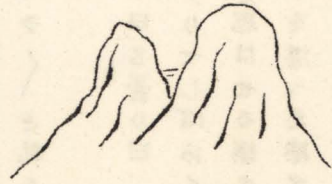
終りに、茂木先生には初めから終りまで御熱心に御觀劇下された事を深く御礼申し上げます。（了）

ゴム靴は

濡れた床では

足を取り





# 新人局員歓迎 旅行の記



比較的長い車内の上手なサービスに一同はやゝ疲れを  
見せて湓川駅に着いた。早速用意の自動車で伊香保へ。

曇り日の寒空にひどい塵芥を浴びた車も人も、恐ろしい急勾配を登つて仁泉  
亭に入つたかと思ふと、もう早くも旅装を捨て、忙しい。

二階の窓から薄暮れ行く上越境の山々が未だ雪を戴いて遠く微かに、又近く  
は小野子、子持、赤城の峯々が日を背にして黒ずんでゐるのは不如帰の浪子に  
非らぬ若者三人四人眺めつゝ、しばし旅情にひたつてゐる。

かと思ふと湯を探しに行く人々忙しく町を見物に行く人々、こゝ、一時間余り  
は各々その趣味探索に活動して居る。

日落ちて間もなく美妓十数名を待らして大宴會が開かれた。何にしろ強者ぞろひ、酒によし歌によし、新入局員の臆だめしに相應しく、乾盃又乾盃、應酬に席乱れて行き交ふ姿は、三絃の響あでやかな踊の艶に織を交へて、湯の町の賑ひと華やかさが此の大廣間に集り盡きるかと思はれる位だ。約二時間の此の和氣藹々たる歓迎の宴やうやく静まり返へれば、後は壯者の喜悅と満足に夜は更けて行つた。

明け初めたこの山国の初春のすがくしい空氣と朝湯で昨夜の疲労と嫌念はすつかり落した一同は、今日一日の行程がや、忙しいので、朝食とあはたゞしくケーブルカー停車場へと下りた。こゝで文字通り送り抜きの美妓数名を加へてカラ／＼と軋るケーブルの響きに展開する景色を眺めつゝ上へ上へと導かれた。

今日も曇り日、春若きこの山は吹く風と冬の名残りを込めて寒い。ケーブルを下りてしばらく高原に遊んだ。こゝらあたりはスキ一の好適地、よいスロープを思はせる榛名諸峯の裾は未だ狐色に焦げてゐる。湖畔亭までの沿道は満々と水を湛へた榛名湖は若草の薄い榛名富士、烏帽子岳、硯岩を寫して鏡の様に



澄んでゐるいゝ眺めだ。

先着の連中はすでに妓と共に汀に遊ぶ、一情又濃やかなりだ。再び初まった宴會は三人の愉快な鬨志の話題に芽を出し、重なる酒盃と名物のテンプラに調子を付けてはては情緒濃やかなる対面の三組を強いて喜び、談笑放歌乱舞の花咲き乱れ、伊香保小唄に空をうはつてしばし春花爛漫の中に遊ぶが如く陶然として歡喜に酔つた。そしてはり切つた一同の應援歌合唱にこの愉快な宴の實を

結んだ。

再び自動車にゆられつゝ、榛名の町へ、爪先上りを約一丁、樓間をくゞれば天地一変老杉巨櫓鬱々たる寂境裡に九々折の岩道を徘徊しつゝ、奇岩をめぐり、榛名神社に詣でた。社殿の古色、四壁の風光、神氣に満ち。額づききてこの旅行の恙なかりしを謝

伊香保の

山の

わらび

狩り

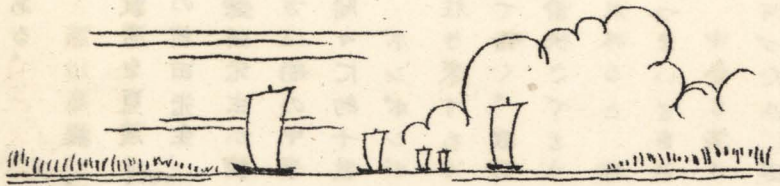


し、且つ又医局の前途の祝福を祈る。更に寂光の裡蕭々とひびく笙の音に静々と舞ふ巫女の舞に心氣を清め新たにした後、一同は一途高崎停車場へ。こゝで此の愉快だった旅行に別れを告げた。

或男数回の後、と一度と思ひて匍ひ上る。

女「又ですか」 男少しテレたので

男「何向ふ側へ越すのさ。」



## 浦安船遊之記

『来る十四日午後千葉縣浦安に於て、茂木先生御招待の船遊  
びあり。深川高橋正午出帆（本院十一時半出發）、雨天の際は  
十五日に延期。』

斯うした記事が黑板に掲示せられると、医局は急に喜びに満  
ちて、昨年の御宿、一昨年の小田原等々、と愉快な記憶が続々  
と喚び起されて、現医局員は勿論各地で奮闘せられて居る先輩  
諸先生の行跡を思ひ出して豊なる友情を覚え、新なる此の歡喜  
に胸を踊らせた。

九月十四日。天氣予報に違はず、降りては霽れ、晴れては時  
雨る、悪天候である。そして其の時々に医局員の顔はマーニツ  
シユにデプレッシートヴになる。然し十一時半の病院出發頃には  
どうやら晴れさうになる。一同の有難度がる事は非常なもので

ある。

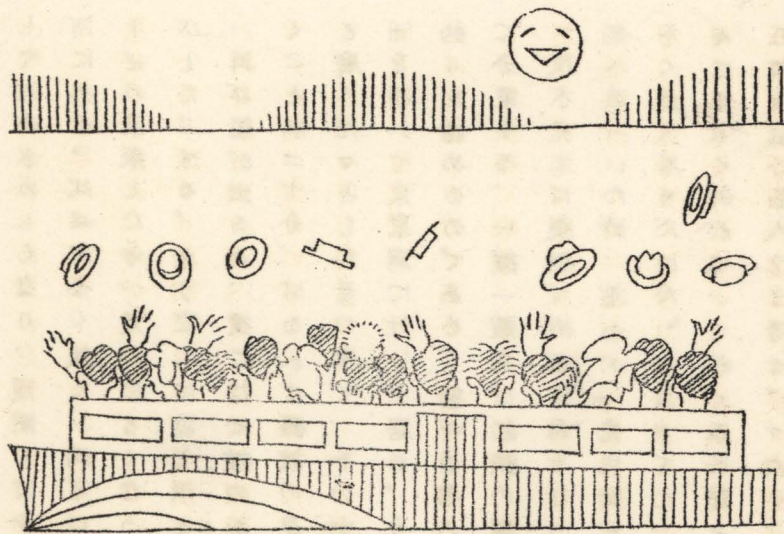
深川高橋・棧橋には既に特別仕立の一銭蒸汽が横付けされて居る。前方の座敷席を見渡すと、真中に茂木先生の温顔が見え、続いてスマートなスポーツ姿の前田先生、浴衣がけの佐藤先生、それから町田医局長、岩原講師、済生會の鎌田先生が控へて居られる。残りの医局員、グルンドの諸先輩、済生會の先生方は船の中央のベンチ席から後方の座敷席、バルコニーに亘つて雑居し、その間々に約十数名よりなる四谷花むさしの姉妹の一團がアインカイレンしてゐる。ポンポンポンと一銭蒸汽が出かけると、とう乗客一同は口を動かしてゐる。

往き來する冷酒のコップは丸で蒸汽船のガソリンの様に次々と笑ひを爆発させて行く。数日來、今日の當直にあたって悲觀して居られた高〇先生はあまりの愉快さでとう酔つて居られる。枝豆の屑がうず高く重なり、焼きいかが頬張られ終ると、御糸當ののり巻を喰べる。そして花むさしの御婦人連は御上品にさつまいとを召し上げる。

中食と済んで、バルコニーへ出て見ると、一銭蒸汽は深川から東へ東へと運河づたみに進んで居る。高橋附近の濁水から荒川の放水路に出ると急に廣々と

して河の水らしくなり、周囲には少しの磯の香を漂はすが、亦すぐに第二の運河に入る。此処は全く狭く、兩岸は田舎らしくなる。一時半浦安に着す。プラトゼの緊張した方、足のだるくなつた方は下船してウリニレシしたり、春延びしたりする。とう空には雲も消えて、六根は清浄、浦安は晴天である。

再び船が出ると、後には七艘のお供舟が真赤な旗を立て、引かれて居る。往くこと約二十分、はるかに磯波の見える大きな流の中に船は停る。何方を見てと廣く茫々とした葦の原で、その中を悠々として、江戸川の流れが大きな三角洲を描いて東京湾に注いで居る。今我々はセツの小舟に分れて此の流れにはせ釣りを始めるのである。船が葦原の岸に横付けされて、一同は七八名づゝ小舟に分乗する。一艘一艘舟は船頭の楫と共に動いて、親舟を中心につりを垂れる。茂木先生は親船で御留守番をなされ、竿の無い長い糸で釣つて居られる。親船へ近づいた時、誰か「先生釣れますか？」と聞きますと、先生は「なに餌をくれて居るだけだ」と云つてにこ／＼して居られる。はせば全くの素人の我々にとよく釣れて、これで五匹等と云ふのは下手の部で、一時間足らずに二十匹位と云ふ名人？と居る。十六ミりに余念のない瀬の先生はしきりと糸をたれ



ながどうにも釣れない。やいめんどう  
 なりと竿で水中をかき廻したら、はぜ  
 の方やか、つて来て、それから復か  
 ら後から釣れて急に名人になれる。  
 隣席の百〇先生は細いうなぎを釣つて  
 「君達にはうなぎはつれまい」大へん  
 御自慢だがどうとはぜの数は少いらし  
 い。何の舟もみんな面白さうで時々静  
 けさの中に笑ひ声も聞える。

雨後の流れとて水は濁つてゐるが、  
 あたりは全く静かである。筆のもとに  
 遊ぶ子がに、水鳥の高く低く飛び交ふ  
 が彼方の水面に魚をとるさま、また七  
 つ八つとあさり舟の山と積んだのが帆  
 を張つて海の方より帰り来るなど、詩

人ならばとの、あはれを感じるであらうい、眺めである。空には雲はないが、夕方が忍びよつて、はるか北方には半分かけの虹が稲光りと夕立雲との上に見えて、それとやがて消えてしまふ。

小舟は段々と親船に近づいて来る。めいめいに流し針を上げれば、どの舟とどの舟と医局の漁人達の技術と相俟つて、はぜ、せいご、まるた、鯉などの大漁がある。舟々のとたらず珍談に此の小舟の集落はとて賑かである。唯町の先生だけははだ着にレンコートをつけて寒さうにして居られるがどうしたのでせうか。誰に聞いても分らない。あたりは既に暮色蒼然として、はるか西の方には大森岳川辺であらう電燈の輝きが見えて居る。小舟の端では船頭さんがテンプラ料理に懸命である。子供の様に嬉々として戯れる先生は時々「こりや舟うごかしちや、あぶねえつて云ふに」等と叱られる。

親船のバルコニー上の宴會は実に愉快であり、食慾そのものであつた。一度その桂味を味ふときは、天さんの御馳走とその影をひそめる位である。一同は実によく喰べた。やつとお腹の膨れた頃には、あたりは既に暗い。中秋十四日の満月が葦原の端より丁度その時、美しい姿を現はし、さやかなる月影を細波

たつ江戸の流れに浮べると、医局員五十はあらゆる歌、應援歌を、淡墨色の筆原に放送する。斯くてしばらく。

月既に中天に懸るころ、我々の一銭蒸気は愉快な疲労と満足とをのせて帰路についた。月と船とをつなぐ銀色の細波は蒸気の波に一さわ大ゆれを描いてついでくる。浦安に一休み。漁夫達の『慶應大学万々!!』の声を後にして、八時半には既に高橋着。手に手に茂木先生御心盡しのおさりの綱をさげて、『茂木先生万々!!』、『外科医局万々!!』の三唱、そして此の愉快な先生御招待の船遊びはゼエンドとなつた。

『足音せず行かん駒とが勝鹿の真間の継橋やますかよはん』と昔々万葉のロマンズの君は此の浦安の真間の江で歌つたさうである。我々は今日先生御招待の船遊びに加へられて、充分の愉快さを味つたと同時に、先生のよき助手であり、よき医局員であり、また我々の医局より第二第三の茂木先生が続々と現はれん為に、足音せずやまずその努力を続けたい事を願ふのである。



## 新入局員紹介

小春日和の麗かな陽の指す一日、十人の男が慶應病院三階のバルコニーに集つて、何やらわい／＼と話し合つてゐる。何か問題でも起つたかな、一つ行つて聞き耳を立て、みよう。

A 「又例の様に刃林に新入局員紹介で奴を書かなければならないんだ、一つ何とかしてくれよ。」

B 「何とかしろつて自分で書けよ、けれどどうまく書けよ。」

A 「それそれだから困るといふんだ。」

C 「何を書いたつてかまはんよ。」

D 「所がさうは行かないぞ。」

A 「どうも難かしいね、よしそれではかういふ事にしよう。此処で各自が自分



の紹介をやつて、意見のあるものが之に枝葉をつけて刀林の原稿とする事にしよう。誰でもいい、から、その隅からはじめてくれ。」

「よし俺からか」と云つて口を切つた男、仲々体格がいい、中肉中脊かき上げた頭髪波を打つて何となくスポーツマンらしい。

「僕は運動が好きです。陸上のものなら何でもやります。庭球部に入つて選手をやつてゐましたが、その他野球、バスケット、フットボール等ですね。唯水泳だけは駄目です。東京五中の卒業で、予科の時は蹴球部で早慶戦にも出たことがあるんです。といふと荒つぽいが、之で心にはやさしい所もあつて、人の情と知る時には知らうと思つてゐます。」と話し振りと卒直だ。やゝあつちで何か云ひ出しさうだぞ。

「おい君は性質が荒つぽさうで一方はやさしいなんてうまい事をいふが、何かい、話でもあるのかい。」

「うるせいやい、手前知りもしないで生意氣な事をいふないやい。」といふ調子、之が例の古山實君だな。

A「さあ余り荒つぽくならぬ内に次に移る事にしよう。」

次の男、眉目秀麗、頭をきれいに分けて、割合脊が高さうだ。

「私は千葉の産で、今も千葉と東京の境辺りから通つてゐます。前の古山君に比べると正反對運動は殆んどやりません。その代り麻雀など勝負事が得意です。余り詳しく言はないけどその内に分るだらうと思ひます。」

「どう分つてゐるよ、君はよく眠る男だな、何しろ一日の中十時間から十二時間は眠らなければならぬさうだな。せいぐ之から早起の習慣をつけてとらひ度いね。」

「君失礼な事をいふな」と彼口を尖らす。バルコニーに吹いて來た風が鉢植の菊の花を撫で、行つた。之が中村寛君である。

「次をやるぞ。」

恐ろしく髯の濃い男だな、眼が光つてゐるわい。

「簡單に行くぞ、俺の顔を見ると何となく恐ろしいだらうと思ふがね、之で氣は至つてやさしく内氣な方だよ。国は廣島縣、野球の一疊をよくやつたがね、上手なのだったな。何時からだかその様子が何となく監督然としてゐるといふ理で、『監督』なる名譽ある名稱を買つたんだ。」と手振り足振り宣し

く話をする所、仲々陽氣で罪のない人間らしいな。

「その鬢の調子だつたら手足のハイレは物凄いだらうな、之から行末永い事であるが手術の時には……」

「黙つてゐれば何を言ひ出すか分らない。」 やあ、怖いく。は、之が門橋勇君だなあ。

A 「さうすると偶然其処に並んだ三人が來年の二月は入營といふ事になるね。」  
といひ下ら見る外苑の向ふ四聯隊の方からラツパの音が聞えて來るやうに思はれる。

「次をやるぜ。」

といふ言葉の調子がいやに高い。愉快さうな顔をしてゐる。

「俺と野球をやつたに、併し」

「併しハイラーテンするとう余り熱がなくなるか。」

「うるさい、僕あ水戸の方が國です。予科の時に病院へ随分永く入院した事があるんだ。今考へりやアツペによる腹膜炎だね。實際生命をとられさうだつたよ。その後はやつぱり病氣前の様な頑丈な体にはならないね。」

「何だい、自己紹介だか何だか分らないぢやないか、俺がつけ加へよう。ユーモアに富んだ男で一言しゃべっては人を笑はし、二言しゃべってはその腹を抱えしむる様な所があるが、仲々口も悪いぞ、それだけに人はい、がね」  
頑丈でないとはいふもの、決して弱い体ぢやない。之があゝの圓板投の日本選手、板橋君の兄さんだな、そう言へばよく似てゐる。名は剛と言つたね。

「僕は山が好きです、夏の山と冬の山と。特にスキーがい、ぞすな。他の運動は駄目ですが、スキーならまあ人並にやります。其スキーで山を歩く程身心の為によい事はないでせうね、又やり度い人はお世話をしますよ」と仲々如才ない。君はよく予科の時から赤倉、関、燕、五色、北海道と、随分歩いた様だが。

「成る程スキーが上手になると顔まであの北欧の名人シユナイダーに似てくるね」

「まあさういふなよ、フ、フ、」とうれしさうに目じりに皺をよせる。さう言へば、これが小平正君だな。この人は天才的に繪が巧いんだ。よく授業中に漫画なんか書いてゐた。開成中学に通つてゐた時とやはり夫れで先生に叱られ

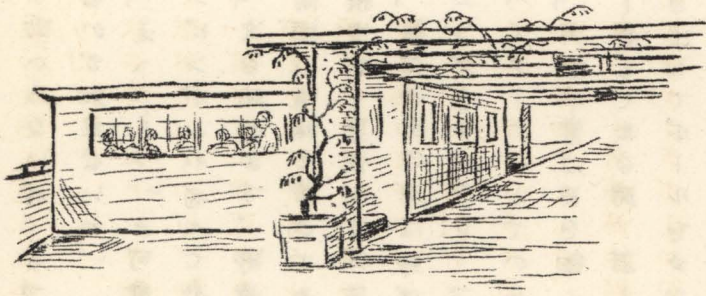
た方らしい。或は画家になつても一門の大家だね。

こうやつて見ると今迄の五人は皆一字名だね、実寛勇剛正と偉さうな名前ばかりだ。

次の男、江戸ツ子調子で意勢がいゝ、体軀小にして色浅黒く眼鏡をかけた底で眼が光つてゐる。仲々氣が強さうだ。

「僕は青山学院の卒業で、趣味は運動、野球、スキー、水泳と音楽です。野球をやれば外野をやります。又隣の小平君と同様スキーにかけては取へて人後に落ちないと言ひ度いね。兎に角相當重いリエツクサツクを背負つてモリ／＼登つてジャン／＼滑るのは愉快でたまらないよ。併し何時か五色で吹雪の林中に一時間許り待たされた時は堪へられなくて、彼に三十九度許り発熱した。どつとどつその時が僕のスキーのスタートだつたがね。とにかくスキーが一番面白いな。又冬が来るぞ。」

かういふ齊藤修二君、疲れを知らぬ様な男である。雨の降らぬ日はあつて君のキャッチボールの音が聞えない日はないか、さうでもないか。とに角この外野手にはランナーと氣をゆるせないといふものだ。彼日頃より色の黒いのを



説明して曰く、「冬はスキ、夏は水泳、春秋は野球等で色のさめる暇がないのだよ」。

「次をやります、い、ですか」といふ調子がいやに忙しい。手をとみながら話が続いてゆく。

「僕と色が黒いといつと云はれるんですがね、之が僕のはね、スキーはやらないし、夏海で泳いだり、山へ登ったりした後の日焼が一年中さめないんです。全く夏はふんどし一つで漁師のやうな生活をするんですからね」

といひ下ら尻をポンとたたく。これが野崎寛三君か。では学生の中から海外医学研究会、英語會、自動車講習會等々世話をする事が好きで、自分で自動車の運転免状を持つてゐるのだ。口の悪いのが又何とか云ひさうだ。

「君が自動車を運転する時はスタートががたくして仲々グラツトに出ないだらう。僕は乗せてもらふ時は

一生懸命何処かにしがみついてゐるよ。又途中で電柱にでも衝突されたらもう助からないね。とつとと坂へかゝれば途中で二三回は自然的にストツプするかも知れないね。

「えへへえツ」と可愛い顔をして笑ふ野崎君、横須賀中学の寄宿舎にゐた頃からピンポンの名人である。

「次を始めます。野崎君も国は四国ですが僕もさうです。」話振りが何となく南国の情緒を帯びてゐる。こゝ言ふとやさ男に聞えるがその実、背は小さいが横巾広く男性的な体軀の持主である。

「僕は学生の時は野球部に居てキャッチャーをやつて居ました。他にもランニングをやつたり、フットボールやテニスをやつたりしましたが、卒業の前ハイラーテンしてからは余り運動の方へと進出しません。」

「實際平常は目を細くして笑つたりするが、グラウンドで野球のキャッチャーをしてゐる時、若しランナーがホームへでも突進しようものなら物凄い声を出してボールをタツチするその姿、勇ましくと雄々しくまるで土佐犬が喧嘩をしてゐる様だなあ。」うるさいね。」と「う」の字に馬鹿に力を入れる。



ではこれが畠中卓助君だな。今に土佐犬の仔が出来るだらう。

「今度は私がお話します。」と色の白い美男子、細い様な太いやうな併し美しい声だ。

「私は万事純日本趣味でして、音楽と日本音楽特に尺八をやります。古への文献をしらべる事が好きでして色々読んでみますと時代々の猥文猥句等にと仲々粹なのがあります。又私は近頃漢法の研究を始めてみますと漢法と仲々面白いもので、泰西の医学と共に宜しく発達せしむべきものだと思ひます。漢法に於ては病氣の症状により薬を処方するのでしてその適応は殊にゲナウにしなければなりません。」

こりや大変だ、漢法の講義が始まったぞ。

「それはさうと、君が尺八を吹く時はまるで別人の様で、静寂の中に起つた嵐のやうな感じがするね。都山流の奥傳を持つた君の妙音を又聞きたいね。」

又口の悪いのが始つた。

「竜野君、君のハイラーテンしたのは確か去年の夏頃だつたね。君はよく林を癖があるが、どうそんなに奥さんの側にはかり居ないでとい、だらう。第

二世は十月かい。あ、之が竜野一雄君、独協の卒業ですな。

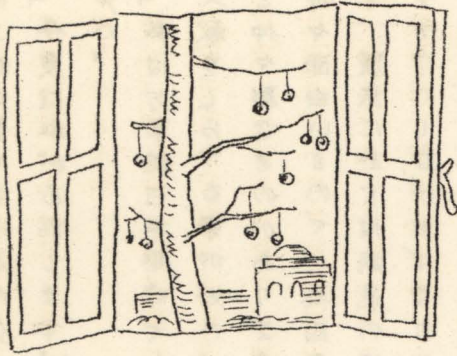
A 「そこにおる小さいの、他人のはかりを聞いてゐたが、今度は自分の番だぞ。」

「え、小さいのが始めます。けれど目方ならこの十人の内で一番下にはならない積りだがね。兵役も甲種合格だが、やはりこの小さいといふ点で国民兵になつたんだ。」 成る程この男横は少し広い。頭も横が広く奥が近くて一口

に云へば巾着頭だ。

「お前の目方は大方足にあるんだらう。」

「さうだね。之は小学校の時から太かつたんだ。歩き方の速いおやぢの後を一生懸命に歩いたとんでね。かう云ふ関係で陸上の運動は前の古山君等と一緒に何でとやつたが、とかく何でと手を出すものは一つに於て大成しないわ。併しフットボールなんかをやつてガムシヤラにドリブルでする時はたゞいゝ氣持になるとんだから。」



A 「足なんかよりは君のとリエはそれ、その眼にあると思ふがね。なんで、その可愛らしい眼に誰かがチャームされるさうだよ。左の眉の上の黒子なんかたまらんね。」

「同」 「いやはどうと嫉けることですよ。」

A 「突直さうな眼とに見とれておると、その小ちやな唇から人の悪さうな笑に乗つて御苦労様な皮肉がポツリポツリ出て来るぞ。兎に角損のない性分に生れ付いた冥途な男だわい。酒は余り行かんが酔へば仲々ハイテルになつてやがては……。」  
「とうく、勘弁して呉れ!!」

と頭を抱へて悲鳴を挙げたのは御當人の伊藤國男——国は長野縣、高師附屬中学出だ。

A 「これで一通り終つたといふ理だね。あ、とう四時半か。今の各自の話を大體書いて原稿にすることにしようね。日が大分傾いて秋らしい夕方だな。」

B 「そろく、行かうか。」

A 「一寸待った、今度宮尾君が四聯隊から出れば外科へ来るんだから、今こゝに居ないが何とか書いて置かう。宮尾君はあれは長野中学だったね、体がが

つちりして横の思ひ切つて広い男だな。額が大きくてごつい感じがするがあれで仲々内氣な所があるね。いつかの夏電燈のつく頃信濃町の駅へ歸つて行く時長野行の夜行列車を見て、何だか国に歸り度い様な氣がするよと、こんな可愛らしいことを言つてゐたよ。今頃は除隊の日を待つて喜び勇んでゐるだらうな。まあこんな様な思ひ出したことを書いてをくよ。

C 「誰だつて段々見てゐりや此の自己紹介よりとつとよ  
く我々の人物を理解してくれるだらう。」

D 「後は頼むぞ。さあ行かう。」

がた／＼と十人の男は歸つて行く。バルコニーの藤棚と葉はすっかり落ちて、梢にうすら寒い残りの日を受けた高いプラタナスの向ふに、外苑の壁画館がほんのりに見える。ゴーと一台省電が通つて行く。別館の工事場からは未だハムマーの音が絶えない。



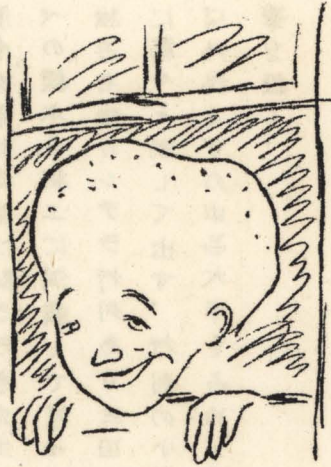


## 七十五週年

### 紀念祭の記



福翁開塾以來既に七十五年を迎ふ。五月九日より一週間大々的に紀念祭行はる。曁と秩父宮殿下には天皇陛下御名代として三田山エに行啓遊ばさる。塾員の光榮是に過ぐる者なし。塾出身の犬養首相又祝辭を述べ得意思ふべし。三田には種々の紀念展覽會を催されたるに對し当四谷に於てと全医学部を開放し道順を作りて一般觀覽者の巡覽にまかす。我外科よりは種々の珍標本を出岳しアツペの図を画きて衛生思想向上に益す。其他衛生講演會を階段講堂に開き茂木先生の輓近の外科に關する講演あり。十年間のアツペの標本を机上に滿載して見せたので聽衆三嘆久しうす。猶五月九日には塾の独占名物カンテラ行列あり三田より宮城に到り病院にて散會す。赤酒を四斗樽に滿々と滿して出す。行列の小僧仰天す。猶病院廊下に陳列せる余技展覽會には外科よりの出品大半を占め、傑作多し。中にとり君の漫画には流石の祭天氏筆を投ぐ。



## 六ちゃんのことども

K 生

「六ちゃんがアツペだよ、これからすぐ手術ださうだ。當直——、早く行けよ。」丁度二号病棟を出ると誰かに云はれたので大急ぎで医局へ立ちかへった。未だ寒い三月の晩だ。スチームですっかり暖まった部屋で大勢が、此の前代未聞の手術を見んどのと待ちかまへて居る。

五時半すぎ町田講師執刀の下に殆ど全医局員環視の裡に手術は完了した。その間六ちゃんは「あついでいよ〜いいたいよ〜」を繰返してゐた。あの上体と足とが氣持悪いほど差異のある氣の毒な体をすっかり包んで永年の自分の部屋へ帰つたとき父兄に「電車へ運搬車のこと」に乗って行つたらお腹を切られたよ」とこぼして「寒いく〜」とがた〜ぶるへてゐた。

手術診断は急性出血性虫様突起炎、アツペの長さは八糎だった。  
申継簿には次の様に書かれてあつた。

昭和七年三月廿六日

午後一時廿分 戸田氏 体温上昇し元氣消失せるを以て町田、高橋先生に上

申、直ちに高橋先生御來診

全時廿分、高橋先生の御下命によりて戸田氏にアスピリン一包投與

三時廿分、戸田氏不消化物ニ〇〇グラム嘔吐す

全時 戸田氏の容態町田先生に上申

四時廿分、町田先生戸田氏に御來診、直ちに手術のこと

全 廿分、部長先生戸田氏に御來診

全四十分、井手先生戸田氏の採血、白血球プレパレート、血型O型

五時廿分、手術場へ出す

六時廿分、手術場より帰室、即時七、三度一二〇

術後は有熱にして軽度の患痛、嘔気あるも浸出なし鬱眠せらる

でこの日は無事にくれた。

翌廿七日と全様、戸田氏有熱なると患痛を許へず、嘔気となし、比較的元氣なり、と申繼がれた。

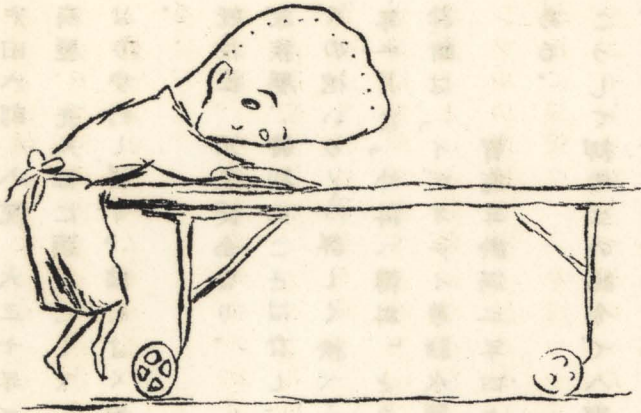
廿八日は尙有熱なると患痛なく一般に元氣なり。脈搏呼吸頻数なると異状なしと傳へられた。だが容態はどうも思はしくない。青ざめた顔して浅く息してゐる。

廿九日、内科尾崎先生の御來診を乞ふた。肺炎と診断されてその処置を取つた。前胸部温湿布、カンフル四時間毎、更に新しく出來たビタカンフルを加へ酸素吸入を行ひ萬全を期した。

卅日は有熱にして引續き呼吸促迫と、脈搏頻數微弱にして、少しも睡眠し得られず。といふ状態になつた。胸部の症狀は益々わるくなる、氣が氣でない。カンフルの回數を増し他の強心劑を加へた。

翌日には更に、一方はロツクロベリン、他方は硝酸ストリキニーネ、ストロファンチンと切りては切つた。しかし効なく、脈搏益々微弱、呼吸更に速迫、更に咳嗽を加へ且つ又喘鳴起り、ためにアドレナリン蒸氣吸入などの必要を余儀なくせしめられた。全く小兒よりも病に對して関心の無い様に見受けられる





六ちゃんのことだから、自分で少くとも全  
快しようといふ努力は更になく、唯氣息え  
んく、実にじれつ度い。顔面は苦悶の状態  
少くないが、眼は相変わらずキョトンとして  
ゐる。半ば無意識に開かれた口のみ浅い呼  
吸に忙しい状態だ。手術創は失禁にぬれて  
汚れてはゐるが、ひどい化膿は見受けられ  
ない。

八方手を盡した。平常から親身にも及ば  
ずよく盡して呉れたは号の連中の日夜の奮  
闘看護も容れられず、四月三日午後十時五  
分、外科の名物、病院の名物として、あの  
狭い生活環境に広く生きて来た六ちゃんは  
遂に死んで行つた。

部厚く束ねられたカルテルの中から入院

當時の状態をさぐつて見ると、

戸田六郎 入院 大正十年二月八日（整形外科へ入院したらしい）

病歴 先天性に頭大にして、お産重く陣痛初発より二晝夜にして生まる。初めより歩行し得ず。函はよく發達せると、考察力ねるく又難聽らしく言語吃逆す。

既往症、元來健全なり。

家族歴、特別のことはなし、唯兄弟五人中三人肺炎で死亡してゐる。

その他いろいろ詳しく検べられてあるが、冗長になるのではぶくが、大正十

四年二月に「外科へ轉科」とあり、當時の精神科の依頼票に依れば、

診断は「イデオテイ兼脳水腫」

智能年齢満二年四ヶ月に相當

とある。

こうして柳先生の紹介で入院以來、この度の病発まで約十一年間のカルテは殆ど恙なく、赤と青のカルフェと名だらかに波打つてゐるのみだ。

今でも思出すのはあの頭、あの眼、あの口だ。

月金の総廻診が終りに近い高潮では号の大部屋に惶しく人の動くとき、二三人の先生達はきつと、六ちやんの窓に立って色々話しかけたとんだ。コツくと窓ガラスをノックするとおとむろに手を伸して窓を開ける薄暗い狭い部屋の中から相應しくない大きな頭、キョトンとした小さな眼、にやりとした口が浮び出る。「六ちやん今日は」と云へばうなづく。「今日は」と答へることである。「この先生何んて云ふ」「ブチョーチェンチエー」又はごく懂かに知つてゐる先生の名前を誰にでも當てはめる。六ちやんは仲々愛嬌者だつた。誰しと思ひ出せば一争二争、吾知らず可笑しくなつたり、又苦笑する種があるだらう。見舞客は何時と引ききらなかつた。が何時と笑ひ乍ら款待してゐた。

お天氣のい、春の日中などは中庭にふとんの上に寝そべつて日光浴をした。帰りはお父さんに手傳はれて不自由な身体を部屋に消した。その单调な低い生活レベルに愉快さうに暮してゐた。全く別室前の隅に籠つて、どんな悲しいことや嬉しいことがあの部屋で起つても更に頓着せず、子供でも大人でも来て呉れ、ば愉快に應待して居た。

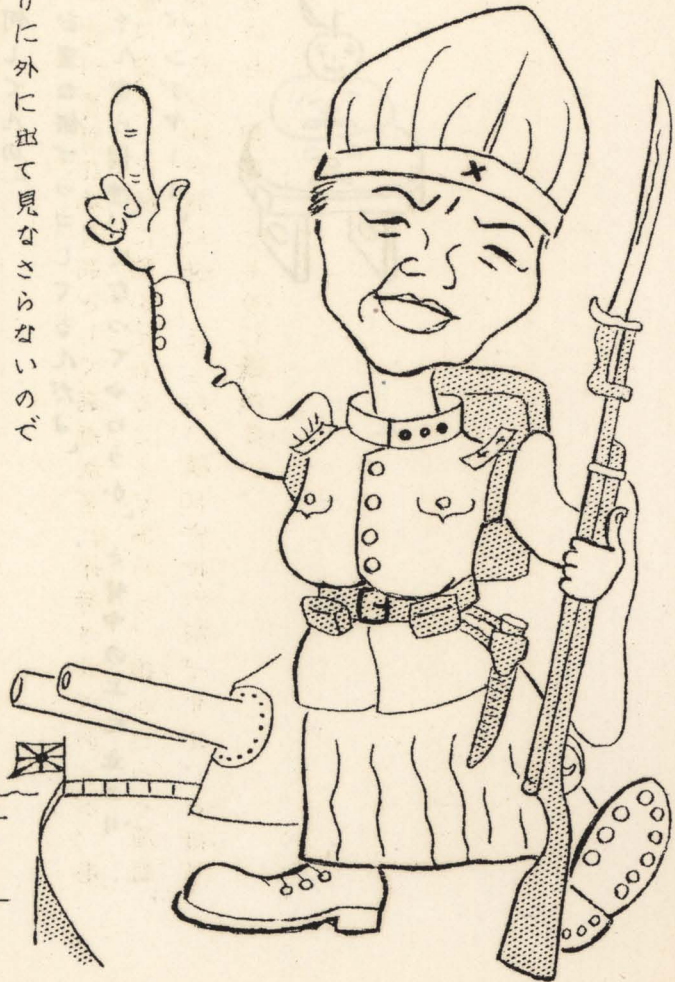
確かに名物だった。又慰安だった。六ちゃんが姿を消して窓はいつも閉ざれ  
あの廊下は何んとなく淋しい。夕廻診のかへりなど順調に足を運んで大廊下に  
出るのに、何んだか不足と物忘れした感がしばく起ることもあった。月号に  
は炭酸ガス吸入用に使われたゴムボールがしょんぼりと下げられてある。そ  
うして又、

今、あの身体の一部は貴重な参考品として病理教室に保存されてあるが、あ  
の正しい無邪氣な筆は静かに天国に憩ふてゐることであらう。誰かきつと眉目  
秀麗の青年が「先年は色々御世話になりました。僕は戸田六郎ですよ」と月号  
を訪れることがあるのを、想像してゐるに違ひない。

# 婦長從軍

## 感想談

わたしやア此春  
從軍して佐世保の  
海軍病院に四ヶ月  
勤務したア。色々  
な経験もしたし、  
人の知らない苦勞  
として来たア。病  
院に歸つて見ると、  
うちの先生方は余りに外に出て見なさらないので  
解らんでせうけれど、他所へ行くと、他所でも中  
々どんく／＼やつてゐるウ。油断せずにしつかり勉  
強して下さらなけりや、今にほんとに、他所に負  
けて了ふウ。わたしやアそれが一番心配だあア。



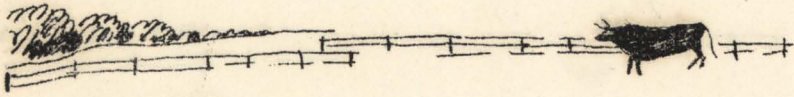
畫中子供の留守中の最中、子供帰りに来る。

子「何してんの」

親「お重ね餅ゴッコしてるんだよ」

子「そんなら僕橙になつてやらうか」と背中の上に立上り  
子「バンヂャーイ」





## 藝文

その後に来るもの

汀 往 生

中庭の水蓮暁の夢から覚めて芭蕉の木蔭に緑の風がさ、やくと、朝の光が静かに窓を訪れる。脈尾とりこに体温みよこ、縷帯まさこがあらはれて、夜明けの歌に丹念掃除がすめば、やがて三色旗のペナントの下で電気時計が八時半を刻む頃、俄然夜來の静寂が破れて一日の営みが將に始まるにふさはしい朝の情景が演出される。

アワタダシイ靴の音と一緒に帽子と外套が宙を飛んで勇躍一番、番



茶の出花にホツと息つく後から二人三人またたく集まる若う人の群は何れを見てと独身會員、朝の威勢がたまらなく、。奈しい吾が家はこゝに生れ、圭刀國手の搖籃となり、者婆扁雀はこゝに育ち朝の務めに宿痾を医し午後の方務は起死回生、夕の奉仕怠りなく、病める人は安らかに憩ふ。

げに拳司一致の精神を体得して共学共働、見る眼とうるはしい情景は、凡そ斯道に冠たる傳統の賜である。メスを収めて一日の仕事をしへ、血潮の溢るゝ獨身會十六士。

短身廣額

長身長頤

薄髮肥滿

(雌外專博)

銳眸雜聲

點額鯨飲

亂髮獸々

大聲振天

叢髮鷲聲

低語耽沈

多髻蝶參

甘柔言注

豐頤羨好

一步三腰

河童麒麟

仰天行乎

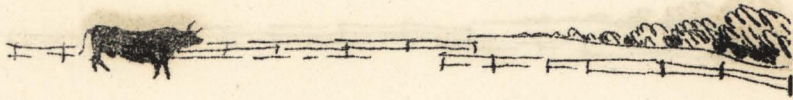
新入MEMBERを合せると將に二十有餘その華かな一團は喧々囂々、去る如くにして去らざるあり、去らざる如くにして去る者あり、脱會隨時勝手であるが、中には終身會員さへ出て來さうな豪勢さである。





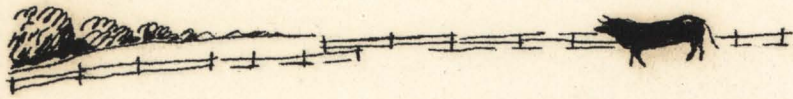
かつて往年の三勇士、相離散して世相の不況と共にその前途、淋れたる感は團十郎歿後の梨園を思はしむるものあつたが、こゝに忽ち今日の隆盛を見るに及んで「何が彼等をさうさせたか」一重に先進の指導鞭撻の宜しきを得たに他ならぬと思ふ。今や押しと押されぬ三巨頭の活躍は、當會全身の肘となり股となり脊となり、或はミクロトームの尖刀を丘の軒燈にかざし、草北肉交の疲れを橋畔に休め、或は坂上の並樹をキモグラフィオンに刻む。後に控へて多士濟々、柯れを勝と白眞弓、若き血の燃ゆる所春を讃へ、希望の丘に橋を渡り川を越え、野辺に遊び谷を下る。遠く出ては山杜鵑を鳴かせ、岸辺のあやめを手折り、入つては花の東京に蜂窩住み、時に聖なる父母の心慮を傷める。一犬虚に吠え、万犬の





傳へる。実は顧みず、毀譽褒貶は人の世の常、筆者の知つちゆるねえだ。が清濁併せ呑む泣き笑ひの人生に、暗夜行路の終点は醉眼忽ち心眼となり、獨立自尊の大廊下は更け行く夜に声もなく礎を捜して明日の早起きを約する所に當會メムバーの面目躍如たるものがある。

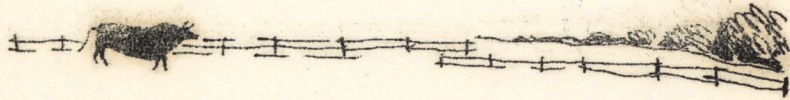
惜むらくは好漢、結婚適齡期が玉にキツ、近頃頻々脱會相次ぎ、祝電乱れ飛ぶ。昨日の紅顔、早、高砂の松の緑を軒端に眺め、「お前百まで」の契りを結び、新生の船出は海上静波にして二人連れ鳴戸の海と何のその「みかんの実る伊豆の山々に愛の葉の垣根は、花嫁花婿花盛り」で、晚秋初冬の寒む空に尚菊花爛漫咲き誇るに及んでは、旧會員諸兄!! 夫君行狀記は遺憾乍らこゝに抹消せざるを得ない。悪く思ふな



柔き  
触  
感

春  
宵

或る春の宵。とある混雑の駅から山手省線電車に微酔ひ気嫌の千鳥  
足で、流行小唄を口籠りながら、白き豊頬の薄紅のはてりと眼鏡を透  
しての目縁の充血も何んとなく人目を惹きつける春高の青年紳士が身  
を投じて来た。注意散漫の裡に席は総て他客に占められてしまった。  
夜の燈は街々に輝いてゐた。彼は瞬間前の車柄は生々しく眼前にあ  
らついで懐想に耽ける必要もなく唯其の連続を味はつてゐるにすぎな  
かった。紅黒のネオンサイン。めぐる光輪。狭苦しき仕切の間に胸に  
私持つ彼女等の瞳の中心に。紅き唇。白き襟元、すべて彼の満足の對



称に相違なかつた。交はさるゝ握手をよそに鬨を蹴つてから物の十分と経たぬ今である。

咄！ ドアー近くの手摺の脊に置いた筈の左手の指先の鋭敏なる知覚。しかも其の電撃的感作による頭尖より手先に至る電波の襲來によつて半麻痺状態の酔気は忽ち冷まされてしまつた。柔き觸感それである。柔き刺戟そのものである。翡翠の玉を織込んだ羽布團の膨みに頬を擦りつけた觸感である。何分七年間の学窓を終へたばかりの自他共に認ずる天晴れ固手である。触診の妙は堂に入つたもの、所もあらうに左手の指端である。云はずと哉全身皮膚觸覚の屈指の所。如何してその儘あつさり過去の些事として葬り去られ得ようか。左の指先から次々へと発信される電波は中樞へ、中樞から足先へとひつきりなしに異様の電流となつて流れる。指端と指端の放電である。

酔氣が打飛んだとて冷静では決してない。高鳴る心悸、壓付けるが如き胸廓筋の痙攣が血管を過巻き流るゝアルコールの力と相俟つて呼吸困難を惹起するのは無理がない。局部の現状を觀るには餘りに生々



しいので彼は天井より懸けられた「ビラ」に注視の眼を向けようと試みた。確かに紙片である。文字が書いてある。しかし、文字の書いてあることは経験でわかるのみである。一枚だった筈の四角の紙は輪廓不鮮明に綿を四方から千切ったやうに四枚八枚となつて縦横無盡に廻轉する。赤文字は電光の如くギザ／＼のカーブを描いて逼つて來ては遠ざかり遠ざかつては又逼る。平氣を獲ふ彼の神経中樞にも「ストラビスムス、ミットニスタグムス」の症候が凄い程發作的に發現して來た。或は吐息にて胡麻化さうとした。然し全身さへ細く震動する様になつてしまつた。彼は今全く自分の心理を汲み知る餘裕はない。唯、茫然として重症患者の輸血後の戰慄に例へん状態であつた。

坐らざる乗客は自分のみと臍氣に堅く信じて居つた彼、天晴れ天下の国手の診断は誤つてゐたのである。彼の側に只一人、電波の發信人が、それと麗人！

極度のストラビスマイベルゲンツに由る怪しげなる視覚支配神経末端の報じた範圍である。和装？ 洋装か？ 洋装らしいが和装には違



ひない。元來、彼は男には珍らしい程物に氣の付く男であるから正氣であれば麗人の着物の模様から布地位までは後で話すことが出来たかも知れぬ。然るに今にいたつては彼とその和装なるか洋装なるかさへ容易に判ずることが出来なくなつた。誰が見たとて麗人の服装は紛はしいものではなかつた。彼の精神の混乱の度は推測に難くはない。彼は此の心の狼狽の中に震へる左手指を変位させる意志は毛頭なかつた。僅か全体表面の幾千分の一の面積の觸覚ではないか。此の際指の位置を譲るべきが當然であらうか。故意としたらどうすべきであらう。故意ならずして偶然なら如何すべきであらう。故意としても戯れであらうか真剣であらうか。此の曲解直解の岐路に立つた彼は生に對する享樂を忘れなかつた。同時に彼には本能的に素早い機智と勇氣を有して居つた。聽て彼は一二種——いや彼にとつては十種位と思はれたかも知れぬ——緻かに動かした。しかるにどうであらう。物の半秒と遊離の状態になかつた。又柔く羽毛の如く擦れ寄つて來た。此の緻密な反應の二三度繰返さるゝ間に再び元の状態にかへつた。



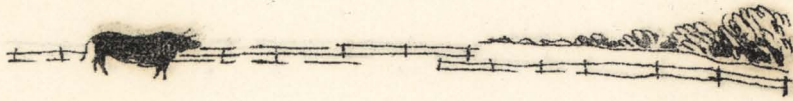
省線は暗を衝いて走った。いくつかの駅は忽ち過ぎた。紅き燈と青き信号燈と遠きは点の如く近きは線を描いて流星の如く飛んだ。稀に見る車内の静けさよ彼の心は心の雷雲で渦巻いて居った。

遂に電車はG駅に着いた。彼は夢中で郊外電車に乗換へてやれくと安堵の胸を撫でおろした。圧迫から解放された彼は己れの乗つて来た電車を振り返った。電車は既に尻を見せて発車の後であつた。

しかるに又！ 電車は確かに姿を消したのに再びこの電車に、同じ位置に同じ麗人が！ 彼は自らを信じ得なくなつた。彼の脳中には苦と嬉との迷の火焰が花火の如く爆発した。彼の顔は既に蒼白になつてゐた。

狂か酔か。半信半疑の現実。うつゝであらうか幻であらうか。此の神の戯に彼の若き血を燃やし盡した。とする間に日頃通勤の駅に着いた。

彼が降りた瞬間彼の麗人も降りた。直ぐ彼の前へ小走りカバーして急いだ。彼は反射的にたゞ情性で麗人の後に跟いた。



夜は更けてと郊外の駅前には電車の着毎に賑つてゐた。然るに彼は一丁と進まぬ中に薄暗を霞に蠢く人群れに遂に麗人を見失つてしまつた。彼は狐に憑まれた如く疲労と落膽とに恐らく倒れてしまつたのであらう。再び覚醒せる時は場末の酒場の卓上に泡立つ水のおほり盡されたる空壇が林の如く立て、あつた。(七一・六)

天狗俳諧傑作集 (七月医局にて)

暁丸が 朝帰りして 白頭

あなかしこ 涼んでゐても ずばはなし

夏やせで 長い顔して 月見かな

二人ねて やつれたりけり かゆき哉

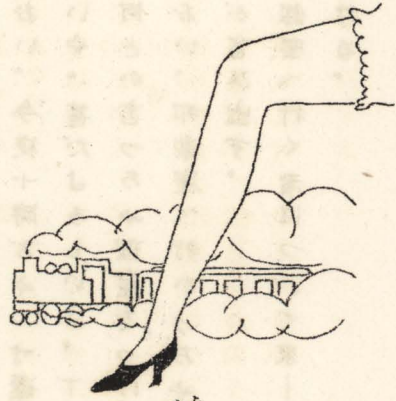
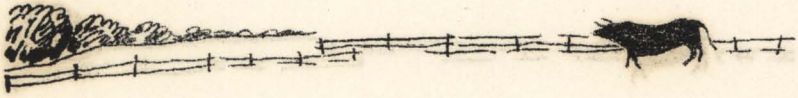
川端で ドアを閉めて 寝小便

世の中は 頭禿げても つかまされ

留置所で 独り寝る夜の 腹下し

晝めしや 女にすかれ つい晝寝





墜ちた仙人

無名氏

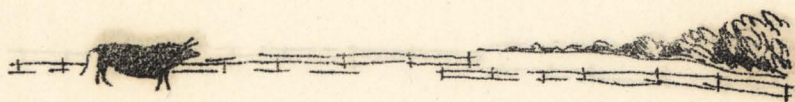
「丁！ 愈々今日でお別れだね。」

——本日午後十時十分東京駅丁先生赴任の途に就かる——と医局のボードに大きな字で掲示が出てゐる。

「うむ、いよく出発が迫つて来るぞ。何だか心細くなつて来たよ。行きたくなつたなア」と丁。

「丁。お前が居なくなると医局が廣くなるよ。」

「丁先生！ 何とかおつしやいませよ——。銘々勝手な事はかり言ふ……。」と婦長が肩を持つ。



「丁・さうしよげるなよ。今夜は大挙して万歳声裡に見送つてやるからな。」

皆の白いシユルツエの中に独りズングリと黒の礼服におさまつて顔歪めてゐる丁。この丁の姿をどう医局に見られなくなるのかと思ふと一寸寂しい氣がする。

医局に電燈が灯る頃になると例の如く一際賑やかになる。殊に今夜は揃つて丁の出發を見送らうといふので皆落着いてゐる。本人の丁は早く宅に歸つてしまつた。

「おい。今夜十時がや一寸遅過ぎるなア」

「いや。甚だよろしいよ。丁の奴氣がきいてゐるぞ。」

「何とか言つちや理窟をつけて飲みたがるにやかなはんぞ。」

「おい。邦楽座へ行かうぢやないか。丁度時間の都合がいゝぞ。」と

一人が言ひ出す。

「銀座へ行く者はないか。」と一人が医局を出懸けに大声を投げ付ける。



三々五々と出て行つて医局は次第に寂しくなる。

病院の門に出て来た四人の一團。

「どうする。」と輪になる。流しの円タクが一台一台ストップして、平手を窓から突き出す。

「銀ブラしようぢやないか。」

「銀座か！ 遠いな。それより新宿で飯でも喰はう。」

信濃町駅に入つた四人の姿は、やがて新宿駅に現はれる。

「メイド」で安上りに暫腹つめ込んで出て来た例の四人。やがて

「モナミ」のピーヤスタンドに納まつてゐる。もう大分メートルも上つた時分。

「どうだそろく、出かけようか。」

「何時だ。八時か。まだ早いな。」

「それぢやあムーランルーヂエと出懸けぢやどうだい。」

「大丈夫かい。そんなところへ寄つても。」

「大丈夫だよ、あすこは九時過ぎには済むんだ。」と自信のあるのが



断言する。

赤い風車がクルリくくと廻つてゐる。土曜日のムーランルーデユはギツシリと詰まつてゐる。ステーヂの裸女は藝術味を通り越して生々しい。太い脚、細い脚、スツキリした脚、大根脚、脚！ 脚！！ 脚!!! 只見る脚の乱舞。微酔の四人はボーツとなる。汗に纏ひ付くズロースをツと指に摘む愛嬌者もある。ウヰンクの交錯！ 腕のリズム！ ムーランルーデユはくるくと廻る。引つ切りなしに廻る。

グワツと吐き出された観衆の中に例の四人がある。フラくと頼りない足取りで新宿の大通に向ふ。大東京の中心新宿は景氣がいゝ、時知らぬ夜の都だ。「市内一円」の赤札がしきりなしに流れる。その中の一台が四人を掻きざらつて走り去る。

ネオンサイン眩ゆき銀座。ハイヒール、エナメルキツト、ラツパズボンに肉色ストツキング、華やかにも目まぐるしい銀座行進曲。そのオンパレードの流れに巻き込まれてハツの靴。

「賑やかだね。時に何時かな。」と一人がウオツチを出す。「九時過



か。まだ一時間あるな」と済ます。

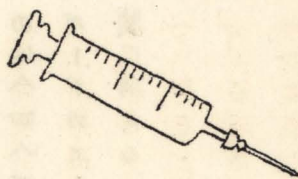
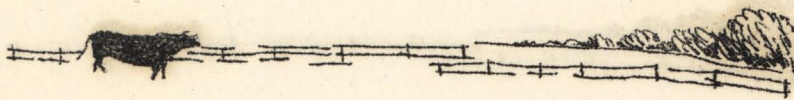
「アツ!」しまった、十時十五分だぞ、どうしてくれるんだい。」と一人が頓驚な声を出す。

「うそ云へ。そんな苦ないぞ」と一人。あはて、商店をのぞき込む。「やっぱり十時十五分だ。とうだめだ。情ない声を出す。」

「済まん事をしたなア丁に。」

「誰だい一時間とちがつた時計を持つてゐるのは。氣のない笑声が同時に爆発する。」

メフィスト「時間」に醜弄されてすっかりしよげ返った。黙々たる条の仙人四人組を眞黒な東京駅のドームが皮肉な微笑で見降してゐる。ガードの上を下りの電気機関車が馬鹿にした様な騒音をたゞきつけて闇に消える……。



# 病院事件

甲 傘 武 郎



取調べ室では今朝選挙違反で連行された男が取調べられて居た。岡  
検事は若手の切れ者で違反事件の為に手傳に來て居たのだが、此男に  
一番目星をつけてゐた。取調べは中々峻烈で外に漏れる声には、ハラ  
ハラするやうな点があつた。晝食になつたので蒼白い男が留置場へ暗  
い廊下を通つて移されて行つた。此男は或病院の副院長で十年近く此  
の土地に居り相當信用されてゐる土地の有力者であつた。岡検事は手  
硬い副院長の取調べに少し疲れ乍ら晝食をとつて煙草を一服喫はうと  
する時に、只ならぬ足音が廊下を傳つて來た。巡查部長が惶しく這入  
つて來て副院長の死を報じた。岡検事はハツとし立上り様保護室へ馳



けつけて見ると、其処には蒼白い顔をした副院長が寝て居た。天井を睨んだ様子が呼吸の通ふ人とは思へなかつた。警察医が来て屍体を調べた。自殺ではないらしく、併し何等の死因を発見することが出来なかつた。岡検事は是が世間に知れ、ば有らぬ噂を生んで果てはお定りの拷問と言はれると思つた。死者の家族を呼び寄せて一應了解を得る必要があつたので電話をかけると、五十歳位の院長が自身でやつて来た。話をすると酷く驚いて何かとどく言つたが案外解りが早く、翌朝は火葬にする様に手筈を定めて死体を引取つて行つた。其の夜岡検事は上席検事に一應取調べを受け、浮かぬ顔で遅く迄自棄酒を呑んだ。併し院長が了解したので世間の評判は兎に角事件は此處で終了した。

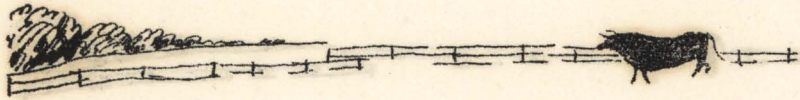
山田君は保険の勧誘員である。秋晴れの田舎道を馴れぬ足取りでトボトボと歩いて、此土地に来て最初の加入者である青山氏の宅を訪れた。妻君と称して一寸した美人が出て来た。主人の年齢から考へると少し若過ぎると思つた。金は快く出して呉れた。判を矢鱈に捺して契約の出来た事を告げ、御礼を述べて帰つた。実は此金を買へるかどう



かが心配であつた。と言ふのは此金は自分が立替へた第一回の掛金を  
貰ひに來天からであつた。安心した緩りした氣持で下宿の門を潜るこ  
とが出来た。晩飯の後で夕刊に目を通して居ると、此土地で起つた選  
挙違反事件とそれに関連した怪死事件が出て居た。死んだ男の名前を  
何氣なく見ると聞いた事がある様に思はれた。氣に為るので暫く考へ  
て居たが、何の事はない、今日訪問した加入者であることに氣が付い  
た。山田君は狼狽せざるを得なかつた。掛長の宅へ電話を掛け指揮を  
仰いだ。其結果翌朝は早く起きて青山即ち副院長の宅へ行つた。若い  
妻君は夫の死んだ事を認めた。併し昨日の金は受取らぬと言つた。契  
約は昨日でなく山田君の立替へた時に成立して居るから掛けた保険金  
を頂きに参りますと言つた。山田君はスゴク歸つて係長に話した。  
更めて書類を調べると若い妻君の言つた通りであつた。

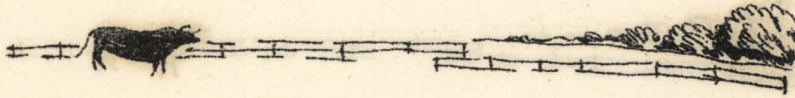
山田君は悄悄げ乍ら保険金の受取人について調査を始め手始めに加入  
者を調べて見た。Y医専卒業とあつた。卒業名簿を見ると青山副院長  
の名前が落ちてゐることに氣が付いた。試みにY医専に照會して見る





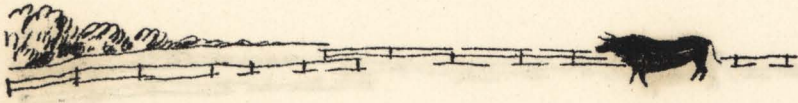
と其塵人は居ないと言つて来た。今度は医師登録番号を當局に照會するとそんな人は居ないと言つて来た。山田君の頭は混乱して来た。定つた目的となしに病院へ駆け込んで見た。院長が出て来て山田君の話聞いてくれた。そして副院長が非医者らしいと言ふと大変驚いて院長は十年間騙されたと悔しがった。山田君は勧誘員としての立場を話すと院長は案外了解が早かった。要するに君の方は怪しい契約をした男の保険金を支拂はなければ用は済むのだらうと言つた。そんなら遺族と話をして院長の貸金もあるから西方を棒引にし、院長の方と非医者を使つたと言つては世間体が悪いのだから此の所穩便に話をつけませうと言つた。山田君は盲目減法の面會が良い結果を生んだので、世の中は融通の利かせ様でうまく行くものだと思つて喜んで係長に報告した。

二三日経つて必要な書類の準備が出来たので、氣持のいい院長に再び面會に行つた。処が院長は今度は声を荒らげて言つた。あの男は三等軍医で分會長をやつて居りお上から或記念章と戴いて居る。非医者でない者だと言つた。自分の照會した結果と確かと思ふし、院長の言

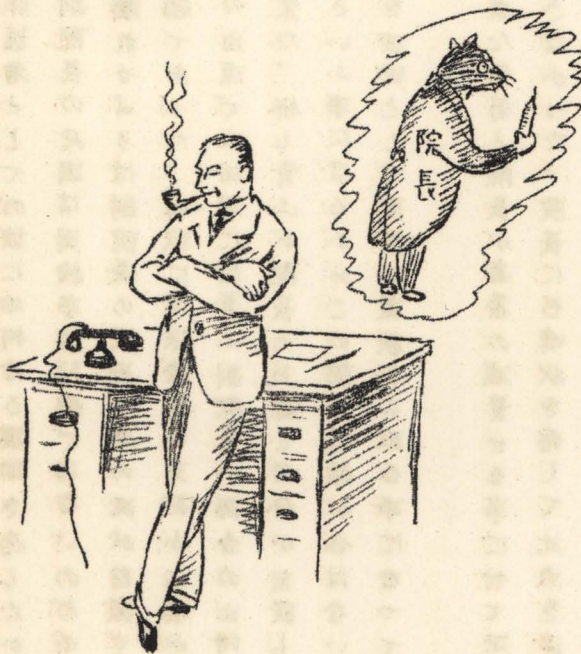


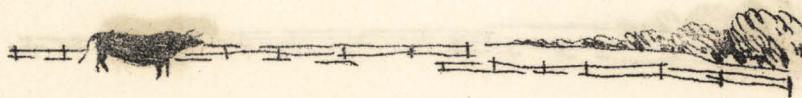
ふ事にも、偽りは無いらしかった。近所で念の為に聞いて見ると、確に軍医です。軍服を着て出る事がありますと言った。山田君は同業に聞いて見ると、青山は最近三四の會社に急いで保険の契約をした事が判った。自分が勧誘に行つた時は立替までして居るのに、他にも契約して居るのは其の目的が少し怪しいと思つた。山田君は考へた。非医者である事が曝れた時には自殺し、その代り保険金を取るといふ目的かと思つた。それにしては、死んだのは自殺で無いとされて居るし、多額の保険を掛ける資金の出所が無い事が此の推定の基礎をぐらつかせた。

岡検事は此地方に轉任して來た。彼には副院長の怪死の思出に不愉快な土地であつた。或日副院長の病院に對する訴狀を受取つた。岡検事は興味を感じ乍ら此訴狀を読んだ。其の中には病院の細い非違が列挙してあつた。中傷と思はれるものもあつた。只面白い事は副院長が非医者であると書いてあつた。彼は叩けば埃が出るなと思つたので、職権を以て色々調べて見た。副院長の医籍抹消届が當局から返却され



た事が判つた。三等軍医は二等卒である事が判つた。卒業證書や医師免許証は或医者 of 寫しである事も判つた。彼が十年前は調剤師である事も判つた。先妻を離縁して今の若い妻君の來た事も判つた。最後に院長が事情を知つて彼を医師に仕上げたらしと思はれ出した。調べると院長の経営振りの宜しからぬ事も判つて來た。併し岡検事の考へは山田君と違つて居た。副院長は違反事件に關連して自分の身分の知れる事を恐れて多分自殺したものであらう。要は院長を法に依





つて摘発すべきには、非医者としての彼に如何なる援助を為したかが問題であつた。此の処副院長の死因は岡検事の問題ではないのだが、山田君のは院長が法に觸れるよりは副院長の死因不明の死が自殺であると宣言される事が問題であつた。自殺には保険金を支拂ふ必要がないからである。岡検事の出現で山田君には青山副院長の掛金の出所が院長である事は了解出来た。併し青山が院長と共謀し自分が自殺して院長に保険金を捧げるといふ事になるからこの話は辻褄が合はないと思つた。保険金は貸金を理由として院長が遺族から取る事になつて居たからだ。

岡検事は蒸局調べに來た當局と院長が毒薬の減量せる事に付て押し問答した事実を聞き逃さなかつた。院長に召喚状を發して此点を追求した。院長は恐るべき事実を自白した。副院長の拘引される朝、副院長は何時との注射を皮下に注して出かけた。その中に問題の毒薬が混つて居たのだ。

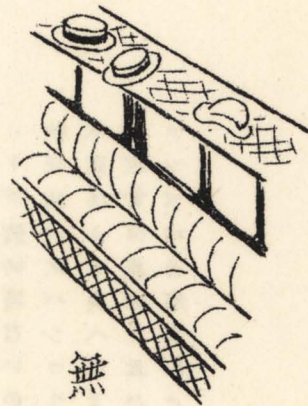
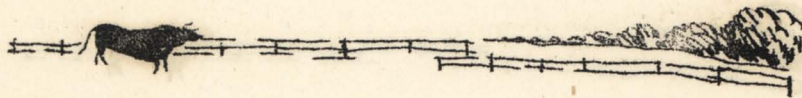
つまり此の事件は巧妙な他殺事件であつた。院長は副院長を犠牲に



して保険金詐欺を行ったに過ぎない。副院長は自己の弱味につけ込まれて言ふなりになつて居た。他殺である事は僅かの点で發覺した。此んな事件が不明に終つて世の中には隠れて居ないだらうか。

腹痛はアツペでないと強くと云ひ  
抄読會眠つてゐたのが喰べるなり  
天氣予報にニコく顔の太公望  
痔の手術シヤンにたかつた御面相  
ヨロシイと和さんハンマで叩くなり  
リーグ戦切符ないのがザル碁打ち  
歓迎旅行スバシコイのが疲れてる  
太腹居士と美人にまける六精會  
二次會は義理と云ひつゝ嬉しさう  
アツペ四百越したと婦長得意なり

(はしとと)



## 無帽主義者の災難

無帽生

時は夏の未頃、所は千駄ヶ谷辺を走る省線電車中の出来事である。  
相當混合つてる乗客を押し分けて、アタフタと頭はれ來たる車掌さ  
ん、物をと言はず無帽主義者の席の眞上の棚に只一つ横たへられた、  
一見茶色、否泥色の所々味噌漬色に手垢に染められ雨に打たれて鶉糞  
様と化し、一度や二度ならず地べたに叩き落されて角は潰れ、底は缺  
け、見るからに臭氣鼻を圧するが如き時代物の「かんく帽」をやを  
ら掴み、無帽主義者の鼻先に突き付けて「これはあなたのですか。あ  
なたのではありませんか。」と周章てふために遠慮なく、而も真剣に



訊ね問ふた。車掌の行動を他人行儀の如く見入つてた主義者は突風の  
に、降りかゝつた追求に衆目を憚りながら、鼻先の現実の汗臭に當惑  
して咄嗟の返事さへ、しばし出せなかつた。ひたすら顔の火照<sup>ホ</sup>りを感  
じつ、吾知らず後頭部を擦つた。その瞬間、乱れたる己れの髪が存在  
を認識し漸く『いや』の一言を發した頃、救助のドアは微かな音と  
共に滑らかにすべり懐しき『信濃町々々々！』の声を耳にした。主義  
者は逃ぐるが如く車外に飛出した。

「プラットホーム」には快い晚夏の涼風が、無帽の髪と發赤せる  
頬を撫でて吹いた。(ヘー・ヘー・ヘー)



夏四題

大も行きまます鏡ヶ浦に

○ 富士を眺めて水浴びに

泳ぐ目當ては鏡ヶ浦に

○ 姿うつした富士の山

沖にやヨツトの戯れ蝶々

○ 浜にやパラソル花盛り

富士を浮べた鏡ヶ浦で

○ 泳ぎ疲れて一休み



此頃三絃を習つて居ます。  
柄にない事ですが氣晴しになります。

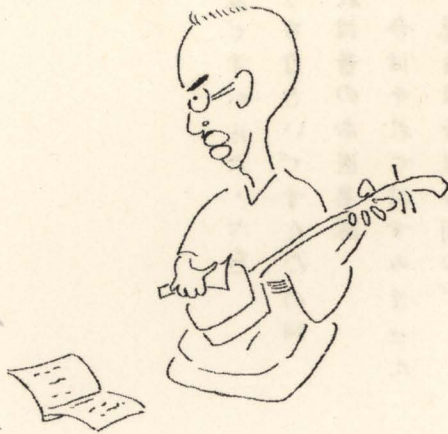
治  
生

田舎に住めるわびしさの

捨て所なき胸の中

せめてかなづる三味の音に

通はす心知るや我が友。



世智辛い事です

治生

(一) 淋病ですから注射して

治しませうですんだのは

それは昔のお医者様

今はそれではすみません

患者は皆様お利口で

私にはトリパは効きません

(三) お抱車の二人曳き

ひげをみわつて暮したは

それは昔のお医者様

今はどうして出来ません

お医者も此頃不景氣で

赤字赤字で困ります。

(二) 梅毒ですから六・六を

おうちなさいですんだのは

それは昔のお医者様

今はそれではすみません

患者は皆様お利口で

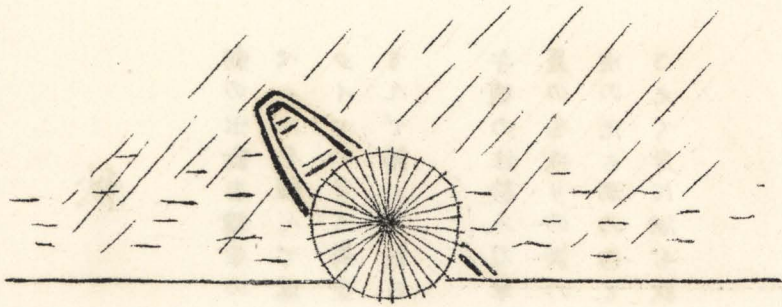
何号ですかとたぐねます

秋

治生

朝の出勤自転車の  
ペダルを踏んで落葉道  
夕イヤの音と青空と  
すんで静かな秋日和  
午後の往診人力車  
夏の名残りの浜の道  
海的光と潮の香と  
さえて身に沁む秋の風





## 雨

はしもと

サンサンサラ、春雨が

しだれ柳に 降つてゐる

船で別れた 港の町の

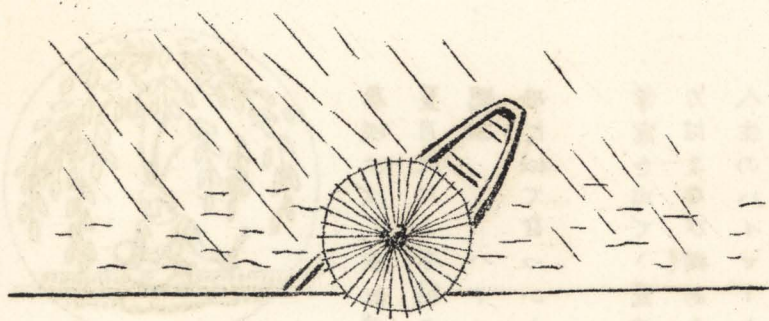
さぎりのように 降つてゐる

サラサラサラ、夏の雨

銀糸のように 降つてゐる

二人で投げた テープの雨を

思ひ出すよに 降つてゐる



ホロホロホロ 秋雨が

絹ずれのよに 降つてゐる

恋知り初めた あの娘の胸の

涙の様に 降つてゐる

チロチロチロ 冬の雨

毛皮シヨールの 頬に降る

シネマ帰りの あの口づけを

思ひ出すよに 降つてゐる



ハイマート

春咲けば 秋紅葉すれば

夏月夜に 冬枯れの野辺に

偲ぶ ハイマート

母に似てなつかし

学窓を出で、荒波の前に

力はまなび術<sup>まなび</sup>あたへらる

人生のハイマート

父に似てしたはし

K

生

賢しき父と優しき母よ  
何時までか続かん  
心のさすらみに  
こゝろ強し明らくも

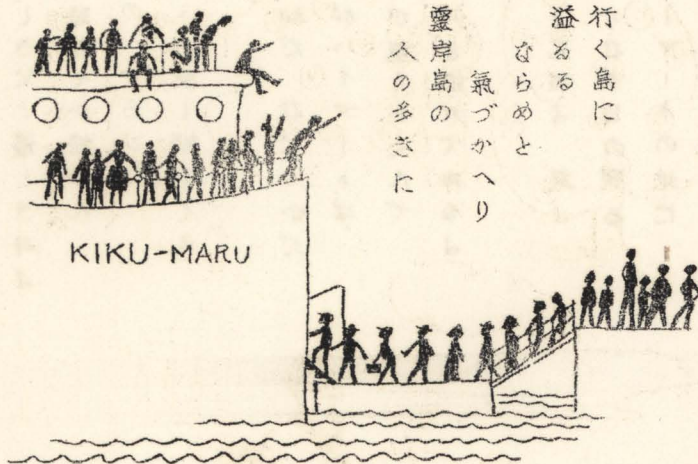
平和だ なごやかだ  
吾がハイマートは  
だが嵐をふくんで  
カロと溢れてゐるよ

おゝ兄方よ 友よ  
終りなき日の照る  
ハイマートの地に  
花一輪と 咲かんかな。



# 大島紀行

①



行く高に  
溢るる  
ならめと  
氣づかへり  
愛岸島の  
人の多きに

②



目と鼻の美しさをば  
繰返し繰り返しつゝ  
かへり  
けるかど



鳥羽王の  
黒髪巻きて  
船迎ふ  
島の乙女の  
清き瞳よ



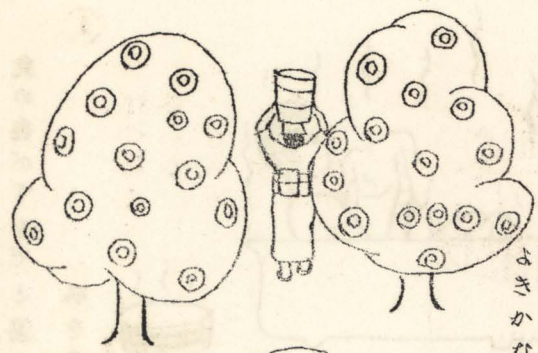
③

手摺のせ椿の葉蔭

しづく〜と行く

島の乙女の姿勢

よきかな



窓開けば竜舌蘭の幹の上に

三原の山の煙かかれり

④

紅唇の女にさそはれ

泊りたる宿は

下宿に似ておかし

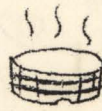
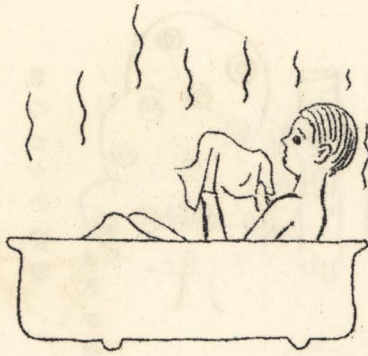
宿の宿竜舌蘭の固き葉に

南の國の情緒深くも



⑤

牛乳風呂



乳の香がするぞと湯上り  
肌をなで

⑥



歌茶屋の

その名とゆかし

アニコ等の

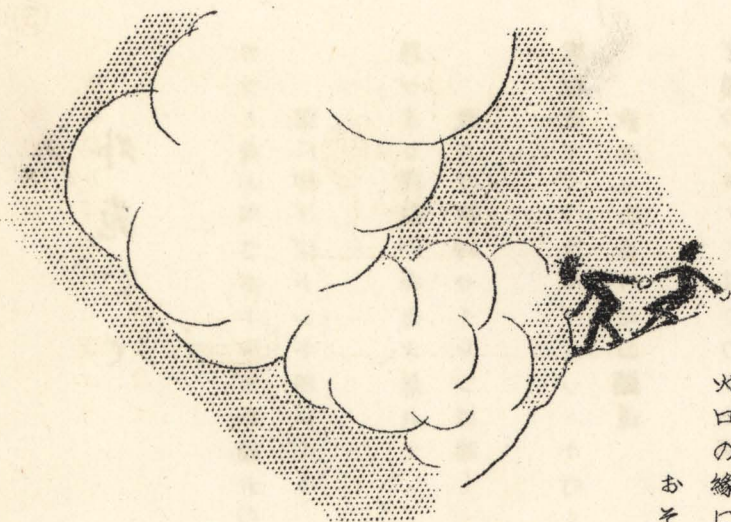
清き腫に

歌情あふるゝ

船路

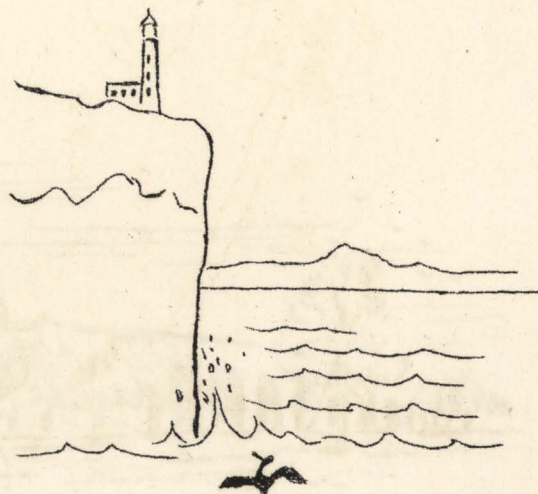
酔はぬうちデツキへ上大ハシヤギ  
風凪いでヤレく腹のへつたこと

⑦



むつとする硫黄の煙にむせびつゝ  
 火口の縁に立ちて  
 おそろし

⑧



風早の燈台近し  
 唄に聞く  
 鶴のとり浮ぶ  
 荒れし波間に

外苑にて

はしもと

カツと飛ぶ白きボールを秋晴れの  
空に仰げばトンボ無ひる

息づまる接戦のあと夕暮れて

数万の歓呼サイレンは悲し

應援歌すでにゆるげりソ、と行く

秋迫りある外苑の鋪道

球場のドヨメタはたのよき鋪道

幼な兎と行く若き母かな



歌句

はしもと

元日の空に競ふや奴風

藤棚の潰えしまゝに雪景色

鈴懸のある家のかげや月の暈

胡麻がらに藪の音ある夜なりけり

重陽の月に冴えぬるラヂオ哉

障子洗ふ波紋とどくあり笹龍膽

鈴懸に月ある夜なり草芝居

禪寺の静寂しじまに散るや柿紅葉



熱燭に

毛虱少々

暴れ出し





## スポートと救護

### 医局スポーツ報告

医局の春はスニスから。歓迎旅行とすむ頃は、ラケット握った先生方が病院の廊下を歩いてゐるのが、見受けられる。

昨年の決勝戦に負けた記憶も新たに本年こそはの意気は高い。しかし、林満洲に行き、吉野帰国し島田入管せる本年の陣容は、新たに明桑、照井、友山、伊藤を迎へたりと云へいさ、か心細げに見えた。

五月二十五日 對小児科

接戦の未勝つたけれど、前途いさ、かあやしいものがあつた。我軍のメンバーは次の如きものであつた。



	野	察	山	藤	本	山	林	井	田
○	吉	明	古	伊	栗	神	若	森	照
○		堀							

六月八日 對婦人科

此の日トツプ栗本神山組大奮闘をしたが及ばず敗れ、古山森組亦、大將飯尾組に名を成さしめ、三番照井富田組惜敗して、若林堀田、明察伊藤不戦にして我軍三A対〇にて敗れた。

斯くて案外あつざりと敗れ去つて、医局の絶大な應援に報ゆること能はざりしは遺憾であつた。

やがて夏となれば医局員プールへプールへと進軍し、日増しに黒い顔が巾を利かし、葉山の水泳部の救護や、山中湖の救護や、さては富士山の救護から帰る毎に、黒光りの面が多くなつて、生つ白い人は九つきり少なくなつて、これでお医者さんかしらと疑ふ様なのが、病院内を歩き廻る。



秋は野球のシーズン、今年の四月入ったフレツシユマンのうち野球をする人が多いので今年こそはの意気は高かった。しかも春の練習試合に去年の優勝チーム小児科に勝つて意気大いにあがった。この試合は、

七月四日 午後、井の頭野球場にて行はれた。布留投手の健闘と全軍一致の好守猛打に流石の小児科を二対一に破った。  
ムムバー左の如し

山 林) 山中 本田 橋) 溪 橋) 留 藤  
神 森 若 古 島 栗 富 門 百 板 布 伊

7. 3. (9. 6. 2. 4. 9. (3. 8. (8. 1. 5.

七月九日

医局のスポーツ熱概然盛んになるまゝに、井の頭の球場にて紅白試合を行ふ。老巧や新進が入り乱れての熱戦は嬉しい限りで、晴れた一日を愉快に遊ぶ事が出来た。

試合は紅組の先攻に始まり、守備に於ける中村次、百溪、攻撃の君塚、伊藤、目諸先生の活躍振り美事に、壯快なる試合を見せた。結局八対五にて白組勝つ。

紅

留橋 藤山 溪澤 村井方

布板 齊古 百前 森田 酒土

1. 7. 2. 6. 5. 7. 3. 4. 9. (9.)

白

藤林 由山 中本 村塚 平島 山田

伊若 伊神 畠 栗中 君小 鍋森 富

5. 4. P.H. 1.6. 2. 6.1. 3. 7. 9. (1. 8. (8.)

そして春を送つて愈々秋とよなれば、

九月二十日

赤十字病院に練習試合を申込み、對青山外科戦の試練とすべく、赤十字のグラウンドに進軍して、十四対六で快勝した。主戦投手布留帰国中なれど、古山畠中交互にバッテリーを務め、又打撃大いに振ひて断然勝つ。安打十五(本塁打一、三塁打一、二塁打四)

藤山橋 山中 藤橋 火林 本村

伊神板 古島 齊門 中若 栗

5. 7. 1.2. 2.1. 7. 9. 3. 4. 6. (7. 7. 1.2. 2.1. 7. 9. 3. 4. 6.)

九月二十五日 对青山外科 三A对二 惜敗  
对青山外科試合記事参照せられたし。

十月二十四日 医局A級リーグ戦、对東校舎 七对三敗る。

青山外科に惜敗せる為、医局の試合には是非勝たんと、大いに張り切つて戦ひたるも、我軍の調子出でざるうちに早くも五点リードされて、追撃せるも及ばず七对三にて敗る。

藤山山中藤橋村葉留本

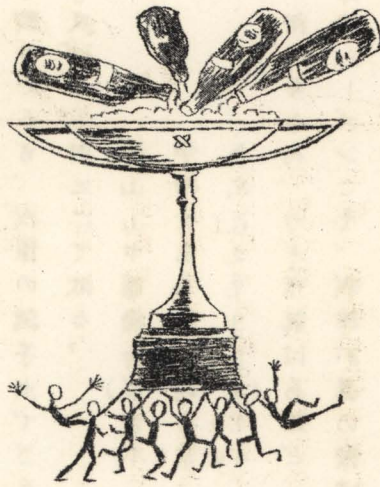
伊神古畠斉門田明布栗

5. 8. 6.1. 2. 7. 3. 9. (4. 1.9. 4.6.

新人多き為、力と元氣はあれど、老巧東校舎に負けた様なわけ、來るべき來年のシーズンこそ、我等が眞の強味を發揮するであらう。否必ず優秀なる戦績を挙げる事を期してゐる。

尚晩秋をかざる年中行争三四會運動會は十一月八日外苑競技場で行はれた。

過去幾年かの間恨みを飲んだ医局リレーに、我が外科の最後の偉力を示さんと  
のと慨然齎り切った。



メンバー次の如し

原中原山留藤中本山溪

藤富岩古布伊田粟神百

スタートより藤原約五米リードし、その後差は増すばかりにて、流石の内科を五十米余引離して百溪満面の笑みと共にゴールインし、大勝する。その夜の幸樂の祝勝會こそ、実に勇ましい限りであった。

運動會を最後に秋のシーズンは閉ぢた。

やがて来るべき來年を待つて筆をおく。



## 青山外科對抗競技

### 野球

九月二十五日茂木青山カップ争奪戦のトップを承る野球戦は午前十時綱町球野にて小島・西尾両君審判のもとに挙行された。

慶應先攻にて三者凡退の後、青外と布留投手の健闘に三者凡退す。第二回一死後斉藤の安打、明菜の二壘打、門橋四球で満塁となり、布留の犠打で一点を先取、尚三回一死後古山の二壘打ありしと残塁。五回一死後伊藤四球に出で栗本二壘打にて走者ニ三塁の時古山犠打で一点を増し、更に六回無死にて斉藤二壘打に出でたれど彼援続かず、返つて六回裏一点を返され、七回我軍無為の後、青外は安打ニ本続いて二点を得、その後両方得点なく、三對二にて惜敗する。



実に惜しい戦みではあつた。前半とつとりリードすべきであつたらう。

我等のメンバー左の如し。

藤本山 中藤 桑又 橋 留 山林

伊 栗 古 昌 齊 明 中村 門 布 神 若

5. 4. 6. 2. 7. 9. 3. 1. 8. (P.H.)

打数 三四

安打 七

水 泳

去年は吾が水泳チームは優秀なるメンバーを有したると、甘米折返しプールに於て青山外科に惨敗せり。其の敗因を考ふるにそれは實力に於て敗れたるに非ず、オーダー作戦に缺けたる点なり。

本夏も亦神宮プールを吾が物顔に泳ぎ廻りて十分なる自信を得たる新人も続出したり。よりに再び昨年の失敗をなさざるべく二回に亘る予選を行ひて十人のメンバーを選び、更に其のタイムによつてオーダーを決定必勝を期して、三田プールに青山外科に目へたり。

次に其のメンバーを順記すれば次の如し。

島田島沢塚藤村原中尾

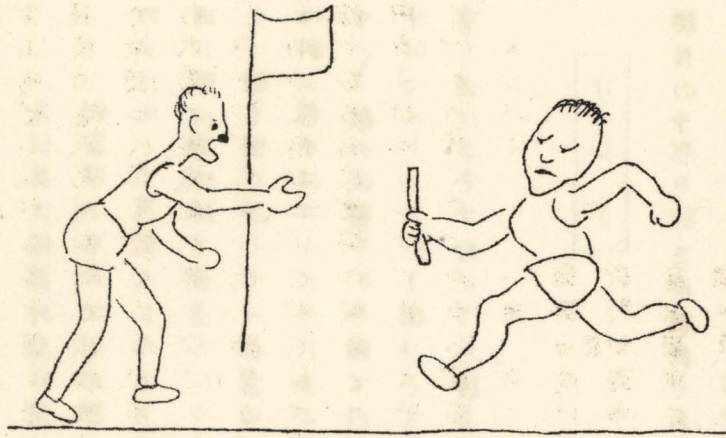
鍋富笹小君斉田岩田瀬

昨年に比して異動大したるものなし。

遂に戦は野球終了後直ちにウォーミングアップ、次で号砲一発スタート、鍋島先づ敵を軽く圧して二番富田に継げば大兵富田の力泳にあをりを食つたる青山外科二番手はコース外にあぶれ出して再び差を増すのみ。続く笹島小沢君塚ますく、敵の追撃を引き離すのみ。新人斉藤亦ピッチを上げて田村につげば、後半はベストメンバー揃ひとて水府流岩原の小拔手、海軍帰りの田中スパート物凄く遂に三分十秒にて大勝をむす。

## リレー

勝負の予想を許さぬ競技である。今年の競技法は新発明のものでオリンピッククにも無い。人数は青山外科來場者総出場で三〇名宛の多人数、七〇米の距離



を置いて半数が東西に対峙し水泳のリレー式に交互に往復するのである。只水泳と異なるのはスタートに旗があつて旗の後で行違ひにパトンを受取る様になつて居る。

メンバーは突嗟の間に定められたのでオーダーと急製であつたが、早いもの、中のもの、遅いものと思はれるA、B、Cの三クラスに分けてC、B、Aと逆に走る事に定められた。両側に分れると一組は五名で一組のオーダーは各自が定められたので混雑を避け得た。

東側の斉藤君のスタートに始つて両軍力走殆んど同時に西側にパトンを渡した。行違ひにパトンを取ることには事故が多くなりはいかと思つたが、何の事故もなく、最初の十名は両軍力走につぐに力走、慶應が稍、リ



ドしてゐたが形勢樂觀を許さない。併し次第に慶應が放して差十米になつた頃青山側で一人パトンを渡し損じて行き過ぎた。その為差が約二〇米に増した。最後の七八名になつた頃彼我の差五〇米で、最後の二人目で慶應側一回パトンを受損つて落したが大した事なく、青山側トラン氏等の力走と空しく六十米の大差で慶應側が勝つた。

パトンが急製で紙に繻帯を巻いたものであつたので青山側の繻帯が十人目頃から少し解け出して終には大分長くなつたのは氣の毒であつた。コースが平行線である為に衝突の懼れとなく、心配したパトンと殆んど落さなかつたので、円をまはるリレーに止して好成績の様に思つた。何しろ三〇人との人の珍リレ一だから傍で見えてゐる人は面白がつてゐた。

メンバー

(東側)

(西側)

C

藤橋田崎川  
藤

島手尾田田

齊門伊野古

笹井瀬塚富

B

高沢橋中平  
鍋小坂島小

留見村林塚  
布相田若君

A  
井原中本山

照藤田兼神

原山国溪  
藤  
森岩小伊百

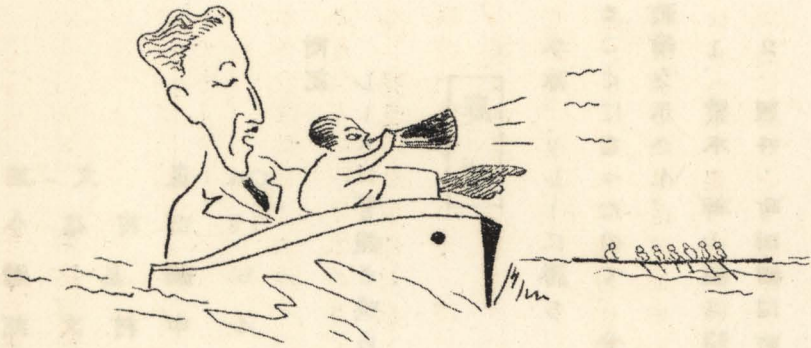
ボートレース

大人の運動會と云ふべき対青山外科戦の一種目として、ボートレースの採用されたのは昨年來の事である。昨年は他の競技より数日先立って行はれた。東大・慶應西医学部対抗レースの日に行はれたのであつたが、今年は丁度其の日取が一致したので、実に都合がよかつた。場所が向島であつてニ手に分れる位の事は向島育ちの連中には何の苦にもならないどころか却つて嬉しい位のものである。

吾クルーは一回練習出艇を試みた。相当なものであつた。

三田から向島迄の途中、敵将守屋君が慶應は何處練習したかと云ふから「一盞切りさ」と軽く片付けて置いた。

向島に着いても敵軍大に自重して「櫻餅」に根城を作つて休養に勉めてゐた。



数日の雨で落ち水は可成りあつたが、潮は上げ止り、大して流れはない。吾クルーは、前田和三郎先生の「落ち着いて、一本一本を丁寧に漕いで」の御声援に送られて出発した。

スタートは昔の竹屋の渡し、一高までの六〇〇米、コースは墨堤寄りのコース、スタートには固定ブイなく、大体の見當。

スタート意の如くならず、以後力漕に力漕を以て迫ると敵と強かとの、なか／＼よく逃げて遂にそのまま、ゴール。

吾クルーは刀折れ矢弾つきた態でゴールに入つた。敗軍のクルー又何ぞオールを語らんや。クルー次の如し。

雄介 勉郎 純雄

文信 次道 敏

村島 村考 原山

森田 鍋中 笹藤 神

Cox. St. B. 5. 4. 3. 2. B.

## 附記

レースは警鐘と鳴らず実に近來の模範レースであつた。

## 庭球

水泳・リレーに勝ち、野球・ボートに負け、愈々最後の決勝はテニスで決することになつたので、全軍大いに張り切つて、必勝を期して戦つた。以下その戦績を示さん。

1. 泉本・神山組は問題なくストレートで勝つ。
2. 照井・町田組は町田医局長平素に似ず大いに當つたけれど、惜しくも三

一ニで負ける。

3. 若林・堀田組は若林例の調子でしきりに粘って行つたが、堀田ミス多く敗れたのは番狂はせで実に惜しい限りであつた。

4. 桑野・古山組は又問題なく祭に勝つ。

5. 田中・森組は愈々最後の決勝となつたわけ、二対二の後のカッブは何れへ行くかはわからなかつたが、健闘奮戦務めた甲斐なく、又応援の必死の声援も甲斐なく三ニで敗れ、千秋に恨を残してしまつた。

### 懇親會 (幸楽)

最後の懇親會は溜池の幸楽に開催せられた。五時半頃お迎への自動車が出来て三三五五會場へ送られてゆく。應接間の安楽椅子で開場を待つ間に會場係が予め龜屋から特に買求めたウイスキーが出た。一杯のウイスキーは空腹にしみ渡つて、運動後の軽い疲労を忘れ、微かな酔を誘ひ出した。

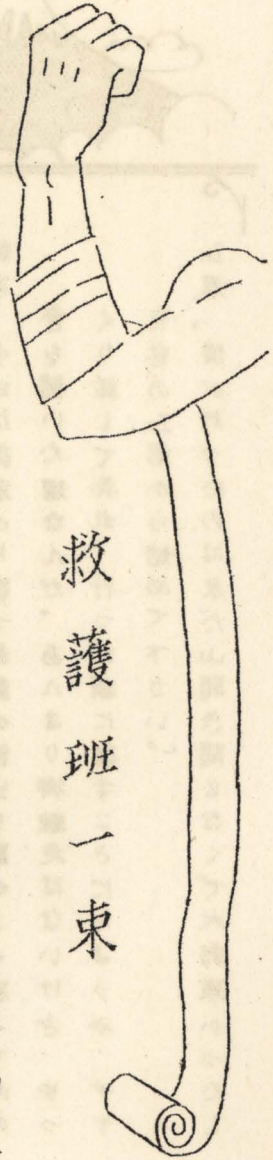
暫し晝間の出来事の敏談に花を咲かすうち用意は出来て新館二階の饗宴は開

かれた。會する者無慮七十名である。

先づ河医局より、それづく歡迎の辞、謝辞宜しくあつて、幸樂自慢の支那料理は山の如く、お酒は洪水の如く運ばれて、腹の虫へと突進し始めた。

應接間のウイスキーは比較的座を柔げるに役立つて、会は初めから甚だ愉快である。初鼻から演説、歌、踊り、ダンスと、日頃御自慢の御家藝が出て、次から次へと盡くる事を知らない。

時の過ぐるにつれ、酒の廻るに従つて、為たい放題、騒ぎたいだけ騒いで、晝間の緊張を思ふ存分緩め、河医局懇親會に相應しい夕を過した。最後に池へ落ちて漕艇の術を會得したと稱し、裸形で乱舞した人もあつた。奇抜な宴會ではある。



救護は我が医局の一つの仕事であり、責任である。別項富士山救護を初め一年中各季節毎に種々と多忙である。主なるものを列挙すれば、

○本塾学生軍争放練野營救護（滝ヶ原・板妻・習志野・下志津・四ッ街道各廠舎）

○本塾陸上・水上運動會

○富士山登山客救護（告田口、五合目、八合目—山梨縣）

○本塾体育會山中山莊・葉山水泳部救護

○外苑 六大学・五大学野球リーグ戦

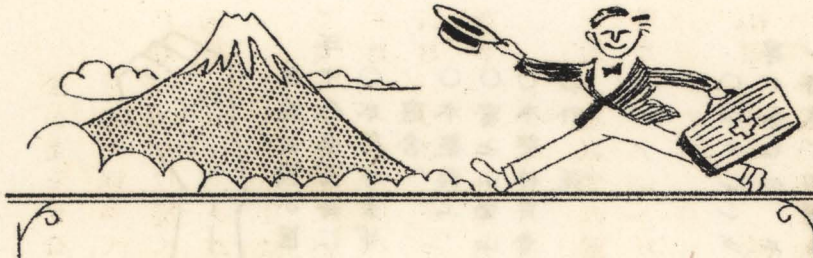
水上競技各種

プール公開中救護

競技場各種救護

○ボクシング

等であるが、その他、モーターボートレース、マラソン等と、常にロートワイ  
ン持参で活躍をしてゐる。（了）



## 富士救護の憶出

I  
生

救護期間 昭和七年七月十日—九月十日まで

救護員 伊藤國男 中村 寛

古山 実 野崎寛三

板橋 剛 小平 正

富中卓助 齊藤修二

井手行乎

幹事 「今日は諸君から富士救護の憶出を聞かうと思つて此の會を開いた理なんだ。あんまり御馳走はないけど、ゆつくり話して呉れ。行つた順に話すことにしようや、チヤ先発のIk君から始めて下さい。」

Ik君 「僕が行つたのは未だ山開き間もなくで大部寒かつたし



登山者も少なかつた。暇なので毎日雲の去來を友とし、霧を吸ひ、四方の景色を眺めて日を送つた、オヂヤを食べて。

下君「話だけ聞くとマルデ仙人の様だナ。

Ik君「アアさうだね、大部浩然の氣が養へたよ。七月十二日に女学生の一團二十三名が登つて來て小舎に泊つた。此の時は里心が起きたよ。」

工君「大部嬉しかつたんだらう。」

下君「久米の仙人て言ふ所だね。」

Ik君「でも、がっちりストツキングをはいて居るんで白いハギは見なかつた。」

幹事「ではIk君の話は此の位にしておかうや。どうも話しが落ちさうでいけね。」

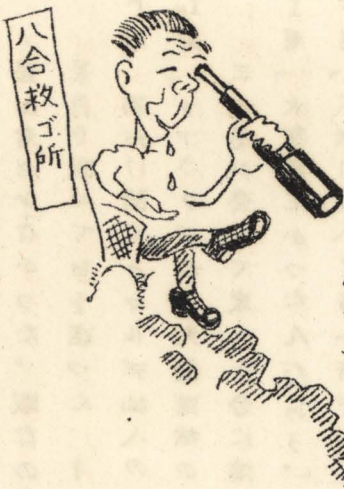
。

一同「座談會の幹事にしちや言葉使ひが悪いぞ。」

幹事「マアい、ぢやねーか、使ひつけない言葉は面倒臭えや、エ、とお次はNa

だな。

Na君「僕ねえ、検約してねえ、吉田から五合目までテクツちやつてねえ、途中蜂蜜一杯飲んだだけさ。とてもへばつちやつてね。」



馬にちりたや

あの馬に

H君「出したんぢやねーの

か。

NA君「出した憶えはないん

だけどねえ、七月せー

日東京女子医専の生徒

三十二名八名餘が嘔吐



下痢を始め、皆がブルス。

エルブレツヘンがどうし

たつてな訳で大変なのさ。

その内先生が来たが之又

アナトミーケルで、喜ん

だのと束の間、手當全部

依頼された。廣應の外科

の先生の腕を見せるは此の時と大い

はり切つたねエ。

IG君「何処がはりきつたんだい。」

NA君「腕だよ。」

K君「腕にも色々あるぢやないか。」

一同「アツハハ……」

幹事「今度はFの番だな。」

F君「をれの時は大部色々の事があつたぞ。」

I 君 「君の日記には女を救護した事しか書いてないね。」

F 君 「そりや女が頼つて来るんだから仕様がねエヤ。男が女から頼まれりやい

やたあ言えまませんからね。」

一同 「何とか言つてやがらア、一体どこがよくて頼みに行つたんだらうナ。」

F 君 「失礼ナ、腕だね、第一普段の心掛けがい、からナ。をれは登山の前、浅間様でお拂ひを受けたぞ。」

I 君 「をれも受けたよ、カワラケとお守りを呉れたつて。帰りにカワラケをオキンチヤンにやつて来た。」

K 君 「オイ、お金<sup>き</sup>がカワラケになる様にか。」

I 君 「そうぢやない、その反対のおまじないに。」

H 君 「汚い奴はお拂ひで受けてから登つて呉れなきや後から行くものはたまらないからな。」

F 君 「だまつて聞け、着くとすぐ女学生三人を診る。凡て幸先よしと言ふとんだね。所がとて彼女等よろこんでね、いづれ帰つてからお礼致したいのでございませうが先生の御名前承りたうございませう、と赤い顔して聞かれ

たときは、どうとボーとしてスツカリてれちやつた。

K君「てれる様な柄ぢやないぢやありませんか。」

F君「ドウシテ、此れで仲々ウブなんでね、それから、此れには胸をときめか

した。あのなー、ハ合目で男女の二人連れを診察したんだ。彼救護所へ宿

ると驚くゞし彼女と共にあの狭いベットに同衾する、如何とも言へんね。」

一同「たまらんく。」

NA君「稍々興奮して」 「それで君はど

うしたい。」

F君「どうしようも、こうしようもね

エぢやねえか、独り淋しく上のべ

ットでねたま。」

S君「ねられたかい。」

F君「勿論眠られる訳はないぢやあり

ませんか。」

No君「罪な事をするね。」



F君「それから廿六日に美しい姉妹の患者が来て色々手當をしてやつたら、その父がお礼をしたがつてゐるが、断然断つたら、美しい姉の方がカルピスを届けて来た。」

I君「姉つて幾つ位だい。」

F君「さうだな廿二三かな。」

K君「カルピスを呉れるなんか意味シンチヨウだね。」

幹事「Fの時はその他角力が自殺に來たり、十字屋の店員の心中があつてナ。」

F君「ウン、好漢ナカ、多忙であつたよ。」

幹事「F君には未だ色々い、事があつたさうだけど此の位にしとかうや。あり

まり興奮してどうかと思ふからな。次はNo君。」

No君「僕は始めハ合へ行つたが、自分が高山病になつて参つちやつてね、お金ちゃんに看護して貰ひたかつたけれどハ合には居ませんしね。」

S君「オイ、それで五合へ行つたらよくなつたさうぢやねーか。」

No君「高山病はハイレンしたけれど、今度は隣室の夫婦者の行者が朝早くからお祈りを上げるのでよく眠れませんでしたよ。お金ちゃんのサービスが頭

にある位のものです。」

幹事「次はI G君だ、一週間と離れて居たんだから、奥さん、淋しかったらうな。」

I K君「君の時は天気が悪かったので、大部腐つたらしいね。」

I G君「ウン腐ったく、別にFの様に面白い事となかつた、新聞で淋しさをまぎらした。」

S君「フラウから手紙は来なかつたかい。」

I G君「来ないね。」

F君「それで淋しかつたんだらう。」

幹事「エ、お次はK君の番だ、何か面白い事があつたかい。」

K君「僕が着いた時はねエ、I G君の奴八合で風雨に吹き聞された事とあらうが、両手を挙げて下山の嬉しさを露骨に現はすのには恐れ入ったよ、外に理由があるんだらうがね。」

幹事「帰ってからの山登りがあるもんナ。」

I G君「嬉しさうにニヤ〜。」

F 君「おい I G、たまに離れるのは悪くないだらう。」

I G 君「うん悪くないね。」

一同「だー。」

K 君「I G を送つての帰りお金ぢやんの裾のさはきを見たが悪くないね。」

I 君「へんな所へ目を着けたナ。」

N O 君「K 君、君の時自秘未遂者があつたさうぢやないか。」

K 君「さうく、金明水の所ぞナイフで以て頸部と腹部を切つたんだが目的を果

さず金明水の小舎へ轉げ込んだのさ、それで僕の居る五合へ電話がかゝつ

て来たんで大急ぎで登つて行つたけど、その時彼未遂者は大宮口へ下され

た後だつた。」

H 君「八合には誰と居なかつたのか。」

K 君「ア、八合には鉄ぢやんが行く筈なんだが、彼五合に居る時一寸下まで

救護に行つて歸つてから、顔がブラスになり、チアノーゼを起したりし

たので先へ歸つたんだ。」

N O 君「それぢや一人で八合と五合の掛持ちなんだね、忙しかつたらう。」

「君、オイ、それでお金がとと君に感心して居たぞ、K先生は一寸見るとトテモ、キヤシヤでスマートでやさしさうだけど、一人で八合と五合を掛ちぢやるなんて、随分しつかりしてるねえ、私とと好きだわ、なんて言つて居たぞ、ドウモ聞かされる身はつかつた。」

一同「オイ君、オゴレ〜。」

K君「マア〜。」

此処で一同コーヒーと菓子注文する。間もなく持ち運ばれる。一同K君に「イヤ御馳走様」と言ひながら食べる。

幹事「唯今はK君より御馳走になりました。誠に有がたうございました。一同を代表して私より厚く御礼申上ます。エヘン、オイ、ロハの菓子は一入美味いな。」

一同「マツタク、イヤ、スマンネ。」

幹事「今度はH、一つ話して呉れ。」

H君「をれの時は吉田の火祭があつた筈なんだけど、雨で見えなかつた。」

IK君「心掛が悪いからだよ。」

H君「いぬ、さうぢやない、多分をれが居ないのでフラウが淋しがつて泣いたんだ、その涙雨だよ。」



一同「イヤどうも暑いね。」

H君「それに登山者は少く廿六日に八合の救護所は閉鎖した。何しろ東京が恋しかった。」 一同「さうでせうな。」

幹事「それでは次のS君一つ。」

S君「僕の時は天氣がよかったので日向ぼっこばかりしてゐたよ、登山者は大変少なかつた。大して何となくなつたよ。」

幹事「最後はI君だね。」

I君「それが行つてからは天候一変毎日々々雨で濟つた。吉田の警察でモウ今頃は登山者は無いから下山してしまひますよと言はれたけど、小舎で何と帝大で此処の救護をやらして呉れとか言つてゐるなんて噂を聞いたからこりやしつかりやらねエといけネーと思つて雨に降られ通して八日迄粘つたが登山者は無かつた。それから先はどうせ天候恢復の見込なしと決めて下山したよ。」

S君「それがや頂上へは行かなかつたのかい。」

I君「いや、丁度帰る日の午前中、ほんの半日晴れたのでその間に頂上へ行つて一氣に下山したんだ。」

F君「お金はどうだい。」

I君「あいつをれが風呂へ入ると、外科の先生脊中を流しませうと言つてきかないので、ことなるのに骨が折れたよ。」

K君「流さしてやればよかつたのに。」

I君「でも君達は誰よ、そんな事は言はれなかつただらう。それに、内科の先生流しませうとは言はないんだから、をれ一人がお金に脊中を流してもらつては悪いと思つてやめたね。」

幹事「それではこれで一週り廻りましたから散會しよう、どうも有がたう。」  
丁度此の時アツペで救護に行かれなかつた監督入り来る。

カントク「いやどうも皆御苦勞く。」

幹事「オイ、カントク、大分与太も入つて居るがこれでい、だらう。」

カントク、そり身になつて速記録を見ながら、

カントク「いや結構く、御苦勞く。」

一同「やつぱしカントクだナ。」

# 医局だより

先輩の同窓會々員諸先生方に在局者の近況をお報せするに最と都合のよいものは、例の「當直日誌」であります。此を復寫するの愚を避けて抜き出して見ました。何卒在局當時の御気分ぞ御一読を願ひます。

又一方においては此の駄文を御覧になつて、在局當時の思ひ出が新にせられますなら一層幸と存じます。



昭和六年十二月から、七年十一月までの一ヶ年の報告であります。

十二月四日 対外苑監理署野球戦、於神宮球場。結果は七対四、勿論、吾  
 外科軍の大勝利。當日、電氣装置の故障の爲(?)ラウドスピーカー、自動スコ  
 アボードの使用出来なかつたのは、本試合のJ.O.A.K.外苑中継放送のなかつ  
 たのと共に大に残念の至りであつた。

十二月九日(大安、戌の日) 君塚先生御結婚、當夜直に嘉津子新夫人と共  
 に箱根へ。医局三羽鳥一羽遂に脱退の形、當日東京発の新婚旅行十四組とのこ  
 と。

十二月十六日 木村守江先生エ々にて御上京、御土産を頂く。

十二月十七日 東京劇場において茂木先生謝恩觀劇會を催す。詳細別項。

十二月十九日 中村廣人先生は先日來歸郷中であつたが、同先生より突然  
 御嚴父御逝去の來電あり、一同哀悼の意を表す。

十二月二十日 小田原戸田先生より蜜柑を、八王子四條先生より御歳暮を  
 頂く。

十二月廿二日 本年最終の抄読會、演者、中村、志田、相見、島田、明  
樂の諸君。医局は修理のため、外來第一診療所へ移轉する。大騒ぎ。當夜六清  
會あり、誰か、余り厚かましいので、銀座のマネキン嬢顔負けしたる由入電あ  
り。

十二月廿三日 昨夜の收護として、六清會一行の漫画と女給募集の看板一  
枚あり。

十二月廿四日 アツペにて豫めて入院中であつた吉野先生、目出度く御退  
院。

十二月廿五日 午前二時、當院入院中の鍋島先生夫人目出度く御出産。新  
父君女兒とて御不満の態。

十二月廿六日 戸澤先生 よりおそば

大曾根先生

板橋先生

桑野

鎌田 両先生

より御歳暮

頂戴

十二月廿八日 医局修理成り、元にとどる。新しいので皆さんいゝ氣持・あまり片付いてゐると他人の所の様だとて、直ちにチラカしてやつと落ちついたと云ふ者もある。

十二月廿一日 石巻上石先生より銘酒一樽頂戴。新年の福引其他の準備に大多忙。斯くして昭和六年は事なく終了した。

一月一日 新年祝賀會、午前十一時より、医局員改まつて大手術場に参集新年を祝し、余興福引に入る。

鏡台の當るプレ、ビールの當る酔つ辨ひ、ズロースの當るプレあれば、丁字帯を引く医者あり、一同抱腹し悲喜交々、中で一段と有卦に入つたのは森田婦長理学科の福引で置時計を當て、此方では小粋な用算筒を引き、大晦日のラデュムと合せて大福々。終つて、茂木先生、前田先生のお宅へワンサクと押しかけること、これと例年の通り。

一月十一日 井手行平君（九回卒業）内科より外科へ入局さる。

一月十六日 佐藤盛二氏より干柿を沢山頂戴す。

一月十八日 夕刻の特診、穿孔性餅炎。六十八才の♀、アナムネーゼ、オ  
ペラチオン左の如し。

六十八のおばあちゃん、おしるこ餅の御馳走を嚙腹食って餅帰る。お腹が餅  
々餅ぶくれ、餅腹愈々痛み出し、とうとうお腹に餅切れず、尻餅ついては見た  
けれど、家人と、医者も餅あまし、「餅々K〇病院」と電話をかけて餅運び、時  
と餅ずに、餅腹開く。此れは不思議だ、お腹から二寸角餘のコチ／＼餅。餅腹  
先生（註に曰く、術者は木村先生）のお手並みに、見ん事餅は餅出されたが、  
出て来た餅は、鼻餅ならず。手術終ればおばあちゃん、ヤレ／＼氣餅が楽にな  
り、心餅よく高いびき、病棟は号に餅込まれる。一日二日は餅ったけど、とう  
／＼あの世へいったとさ。餅木先生これを聞き、それはなか／＼お餅ちい。こ  
の餅、大きな餅故に、餅くづれぬ様だ餅ため、餅田式にて標本にし、三年五年  
は餅論の事、孫餅代まで、た餅あり。

尚曰く、餅ちと、早く来ればよかつたに。

一月廿三日 目黒雅叙園にて、茂木先生御招待、医局新年宴會あり。十有  
余の食卓文々其の藝を競ひ、遂に眞打茂木先生の追分を始めとし、前田先生の

大津繪、木村先生、佐藤先生の妙技の御披露あり。十時前後万才三唱、和氣  
瀟々盛會裡に散會。

子は親に、弟子は師匠に勝りてぞ

わが日の本の國は栄えん

一月廿八日 抄讀會

古川明君、辻岡元君、島田信勝君送別、井手行乎君歡迎會、病院職員食堂及  
二次會は成駒にて。

二月一日 島田信勝君幹部候補生として、近衛歩兵三聯隊へ入營、吉例丁  
字帯旗を自動車窓より靡かせて送る。

村山成一君、茂木先生の月下氷人にて、森山家へ婿入りさる。純日本風にて  
「高砂や」も出た由、目出度しく。

二月二日 吉崎純氏より「蟹」沢山頂く。いやしん坊の二三は蕁麻疹に苦  
しむ。

二月十日 突如午後八時左の至急電報舞ひ込む。

「第十七救護班備員として、召集す。依て、二月十四日午前八時、長崎新橋



町日本赤十字長崎支部に参着す可し。

森田キエ殿

上海の戦雲いよ／＼深きを知る。

二月十二日 医局員其他の多数の見送りを受け午後八時廿五分東京発にて

婦長出征の途に上る。

二月十四日 婦長より「オミオクリヲシヤスブ シチヤクアスゴ ゴサ

セホニムゴウキエ」の電報あり。

二月十八日 整形外科集談會 森豊明君出演

二月二十日 臨時六清會あり 医局ガラ空きとなる。

二月廿五日 抄詠會

牛久先生宇都宮へ招集を受けられ入営さる。

禁足命令 動員令續々降る。イレウス患者 カンフル注射と一緒に動員令を

受け、命令書を握つて涙を流す。

満蒙の風雲いよ／＼險惡にして医局の話題も之で持切り。満蒙小唄なるもの

あり。

一、どんとくどんと、大砲小砲、暗に響けば妖雲暗れる。

さつと浮き出た奉天城の城の彼方に朝日は昇る。

二、東支南線寛城子駅の曉破りて喚声起る。

南嶺の險阻何物ぞ、どーんと、どんとく突き破る。

三、長驅一鞭吉林つけば、広い満洲に敵影となし。

多年の懸案満蒙の禍根、行方知りたや益良夫の胸。

三月一日 新満洲国建国祭。特診三つ、①外傷、②骨折、③食後腹部膨

満症。(但し養老院を出たる男にして、自殺の目的を以て手あたり次第のとの

(註、食物に非ざるのど)を食ひ苦しくなりて命惜しくなり轉げ込みたる者  
警官に内科へ連行される。)

三月四日 牛久昇治先生出征の途上呂川駅通過の報あり。医局員トラック

に乗込み長旗数流を押立て、呂川駅に向ふ。原海軍々医少佐、小野田同大尉軍  
服にて乗込む。駅頭の殺人的雜鬧。

三月五日 松井八郎先生上海出征、東京駅発、一同前日同様トラックにて  
新宿に出て銀座を通り東京駅に至る。

手術告知 3月15日

昭和七年三月十五日手術料千両祝ひとして茂木先生よりビール壽司の御馳走あり。

順番	受持	病室	氏名	年齢	病名
	森笹	ほ	井上氏	19	虫様突起炎
	橋本	西	森田氏	9	膿瘍
6)	川森	に	石橋氏	25	虫様突起炎
4)	鍋島	ほ	金子氏	13	虫様突起炎
	”	西	石井氏	2	頸腺炎
	小方	ほ	大木氏	45	化膿創
1)	森豊	い	渡辺氏	7	ヘルニア
	志田	に	小出氏	4	外傷性表皮膿腫
	”	西	清水氏	1	臍瘻
2)	君浜	い	成宮氏	22	腹壁ヘルニア
	酒井	ほ	鈴木氏	31	肺膿瘍
	小沢	ほ	小山氏	28	ヘルニア
	土方	に	山崎氏	8	ヘルニア
	君浜	ほ	上田氏	57	腋窩腺炎
5)	原若	に	山元氏	59	下顎骨炎
3)	神明	に	杼窪氏	35	虫様突起炎
	原若	ほ	白井氏	48	嵌頓ヘルニア
			輸出	四	人

右は記念のため黒板を撮影しておいたものによる。

三月十日 大安吉日、小野先生御結婚。

三月十五日 久し振りにて「千両祝」行はれ一同大ニコくなると自然一

同大多忙。医局の祝賀宴中と仲間ぶりする暇もなき程なり。茂木先生上機嫌。

三月廿四日 夜五才の腸重積の患者来る。茂木先生オペラチオン。小腸同

志の重積にて珍らしい例なり。

三月廿六日 ほ号名物戸田六郎君、急性虫様突起炎にて町田先生手術せら

る。

三月廿八日 神山地真氣先生郷里大阪にて結婚式を挙げらる。シンセイカ

ツノスタートラシユクス（祝電）

抄読會。

三月廿九日 戸田六郎君急性肺炎を併発す。

三月三十日 戸田先生より大鱈一尾頂く。

三月卅一日 戸田六郎病篤し。

外科同窓會總會、於目黒雅叙園。出席、茂木先生初め、在局者一同、同窓會  
員、大養、柳、大庭、中村復、今井、沢江、林、竹下、四條、佐藤、古川、関

口、吉岡、辻岡の諸先輩。大盛況。

四月一日 外科学會總會（詳細は別項に譲る）

戸田六郎君依然危篤。

四月三日 戸田六郎君死去。

四月四日 戸田六郎君病理解剖。

所見の大畧 廻盲部には手術の爲め出血斑ある外腹部異状なし。心臓に心囊炎あり、両肺臓はカタル性化膿性肺炎、頭蓋骨菲薄ならず、脳実質は紙の如く、第三脳室に大量のリコールを容る。デルビー氏管は不通ならず、畢孔は右側停留せり。骨格は解剖学教室にて組立保存の由。

四月五日 浜松市梅村病院に院長不在中の留守居を勤めた吉野史郎先生帰京せらる。

鐘一つ売れぬ日はなし 江戸の春

アツペ一本切らぬ日はなし おらが外科

四月七日 青森縣へ赴任せられる小方則太郎先生、文部省航海練習船海王丸に乗られる寺田恭三先生、横浜山下病院に赴任せられる森豊明先生の三先生

の送別會あり。

四月八日 新入局員、伊藤国男、板橋剛、畠中卓助、門橋勇、荻野一雄、野崎寛三、古山実、小平正、斉藤修三（中村寛、上村俊一両君は不参）の九先生顔出しせらる。

四月九日

上州伊香保方面新入局員歓迎旅行（詳細別項）

四月十日

四月十一日 當直は古参、中古、新人二人の四人、一同宿ること、なる。

松井八郎先生上海より凱旋せらる。医局へ多大の御寄附あり。

四月十二日 林利治先生、廣島へ出張中の所、本日凱旋せらる。

四月十三日 医局員一同記念撮影。

四月十四日 夜、小方則太郎先生、現任地へ新装上野駅より赴任せらる。

一同御見送り。

四月十七日 牛久昇治先生、午後四時品川駅通過にて無事凱旋せらる。直

に原隊宇都宮へ。

四月十八日 教授會、医局員、照井侃先生論文通過、直に新宿宝亭に祝賀

新入局員一同茂木先生お宅に招待せられ御馳走攻に會ふ。

四月十九日 神山敏雄、原廣治兩先生講師に昇格せらる。

五月五日 抄読會

五月九日 慶應義塾創立七十五年祭、別項の如く畏くも天皇陛下御名代として秩父宮三田山王に行啓あらせらる。催しとの其他は同記事に譲る。

五月十四日 職員食堂において、神山敏雄、原廣治両先生講師昇格祝賀會並に加藤銀治郎先生送別會を開く。二次會は山王下幸樂。

五月十五日（八日） 特に全文を寫す。

午後の医局は至つて閑散にして、静穩なりしに、午後六時医局電話ケタママシク響き、

「俄然帝都は怪魔の如き怪異團に襲はれ、犬養首相官邸に狙撃さる」の報至る。

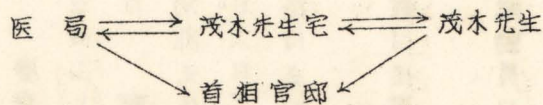
直に医局総動員日曜日にも係らず機関部に命じスチームを通ぜしめ、輸血器具其の他非常準備を整へ木村教授を先頭に出発す。首相官邸電話銀座（二、一一一

一三、一一五）

15日午後六時〇五分

犬養先生より電話にて首相官邸に犬養総理狙撃  
せらるゝの報至る

六時十分



茂木先生佐藤病院より首相官邸へ

六時三十分

木村先生, 川田, 吉野, 中村, 百溪  
輸血, 食注準備成り出発

七時五十分

輸血施行 (150gr O型)

八時三十分

中村, 百溪, 一應帰局

九時三十分

輸血器再消毒, 止血剤, 酸素吸入, 携行して再  
び出発

十時四十五分 (電話)

酸素吸入開始

十一時

ネラトンカテーテル, オリーブ油携行

16日午前一時

諸先生官邸より帰局

八時 防腐蓋携行, 川田, 吉野先生出発



おたっしで

靴の踵に

羽が生え



五月十六日

加藤銀治郎先生大連へ出発。

五月十七日

抄読會（今月より抄読會は原則として二回催す、但し御馳走

は第二回の時に出す。）

五月廿五日

対小児科テニス戦に勝つ。

六月一日

吉野先生帰郷送別會並に林軍医満洲出征送別會を開く、二次會

は新宿宝亭。

六月五日

吉野史朗先生午後一時東京発、開業せらるべく帰郷。

六〇。七〇。 開局記念日、例年の通り、手術場にて祝賀會を開く。次の先輩

諸先生御出席あり。諸先輩方より多大の御寄附あり。

大養、大庭、松井、牛久、豊田、近藤、鎌田、古川、大曾根、横山、竹下、

今井、以上。

六月八日 対婦人科テニス戦。

六月十日 林利治軍医滿洲出征の途に就かる。

六月廿一日 森田婦長四時四〇分東京到着、凱旋す。二月十二日出征以來

実に四ヶ月半、其の勞に對し外科外來に於て、婦長敬迎の宴を開く。

六月廿六日 明榮先生、アツペにて木村先生の手術を受く。

七月一日 龍野一雄先生長女を挙げらる。

七月四日 対小児科野球戦大勝。

七月七日 門橋勇先生アツペにて手術を受く。

七月九日 富士山救護一番乗出發。

医局内懇親紅白野球試合あり。

七月十二日 明榮先生長男を挙げらる。

八月十二日 松井先生朝鮮へ赴任せらる。

九月一日 震災記念日、例年の通り、握り飯に漬物の晝食を摂り一同サ  
イレコと共に黙禱。

九月十二日 布留先生嚴父御逝去せらる。

九月十四日 茂木部長御招待、千葉縣浦安舟遊び。(詳細別項)

九月二十日 対赤十字野球戦大勝。

笹川正男教授 御逝去

謹んで哀悼の意を表す

九月廿五日 対青山外科対抗競技會(詳細別項)

九月廿七日 犬養先生より梨沢山頂く。

十月一日 大東京市・新市民医局に廿七名。

十月五日 アツペ患者八名入院。

十月十日 中村廣人先生御結婚式を挙げらる。

十月十一日 抄読者、水村先生御寄贈のハムで医局賑ふ。高巢先生より粟

沢山頂く。

十月十二日婦人科手術室に小火あり、野崎寛三先生大に活躍火傷を負ふ。

十月十九日 本日迄アツペ総数三五九名、本年中に四五〇名に達するやと

知れず。

十月廿四日 原廣治先生論文通過祝賀兼送別會、并に中村廣人、富田勝郎

両先生送別會、田中周吉先生歓迎會を開く、二次會は幸樂。

十月廿六日 午久昇治先生東京駅發大連に赴任せらる。

十月廿八日 外科集談會

浦安は

古い帽子で

出かけ

けり



十月廿九日 富田勝郎先生伊勢の津市に赴任せらる。  
 十一月二日 川田正雄先生講師に昇任せらる。即夜幸祭に於て祝賀會を催す。

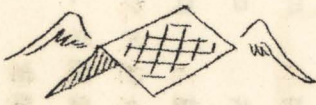
北海道の山本順先生より林檎沢山御送付あり。

十一月五日 若林研爾先生御結婚せらる。

十一月八日 三四會運動會、リレー大戦、トロフィーを得る。即夜幸祭にて祝勝會。

十一月十日 中村広人先生静岡縣土肥へ赴任せらる。

慶應医学会總會。



バラックは

屋根が飛んで

商賣し



十月十四日 相見三郎先生送別會、二次會富士見町魚久。

大颶風來る。西病棟のバラツクの屋根吹きはがされ、雨大に漏り、入院患者  
ほ号へ夜半ベッドごと避難す。

十一月十五日 相見先生、新宿發信州伊那郡へ赴任せらる。

十一月廿一日 北海道、柳莊一先生御上京、金一封下さる。

十一月廿二日 抄誦會

君塚先生長男を挙げらる。

同窓會會員名簿

(入局順)

○印は在局者

四谷區東信濃町二八(四谷四五六八)

○茂木藏之助

四谷區三光町五四(四谷六一一六)

犬養六郎

福岡市住吉花園町一六六三

成松清敏

北海道札幌市北四條西十五丁目一

柳壯一

神奈川縣鎌倉材木座

大庭國紀

中野區沼袋南二丁目一六〇

○中村復一郎

静岡縣浜松市八幡町七二九(圖八六五)

梅村六郎

麻布區箕町八〇(青山六五二五)

○木村博

新潟縣柏崎本町六丁目

高桑武夫

水戸常磐病院内

柴沼薰

神奈川縣小田原萬年町四丁目五七三

戸田四郎平

神奈川縣都築郡田奈村長津田一四二四

川崎市貝塚一二

深川區西平井町九三

茨城縣結城郡結城町一四一六

蒲田區御園町一三八

芝區白金三光町二六九

桐生市西久方町二丁目七八六

南滿洲四平街病院

長野縣富士見高原療養所

芝區濟生會病院舍宅

岐阜縣武儀郡西武藝村

北海道小樽市小樽病院

京都市宇治郡醍醐村

杉並區和泉町三四一

中野區住吉町四二

森 信彦

阿部 貞治

片柳 常作

稻葉 俊雄

大槻 正路

○町田 謙二

赤松 常信

高木 宗吉

中村 武重

鎌田 竹次郎

山田 晟

山本 順

本郷 光美

関 市衛

今井 金治



深川區木場三丁目八

宮城縣壯麗郡石巻町新田町三九

赤坂區青山南町六ノ五六野崎病院

杉並區阿佐ヶ谷町三丁目四八四

大連市聖愛病院

芝區白金今里町八九（高輪五三五二）

杉並區馬橋五二九、出張先滿洲國敦化

杉並區阿佐ヶ谷町二丁目五五四

杉並區阿佐ヶ谷町二丁目五五九

榊太廳眞岡病院官舎

渋谷區代々木深町一六六七

榊太大泊三橋外科病院

福井縣蘆賀郡遠敷村

市外武藏野町吉祥寺二八三五

千葉縣館山町館山病院

新田 龜三

上石 英造

澤江 六太郎

篠原 静夫

牛久 昇治

○佐藤 太平、

林 利治、

大曾根 幾次郎

○神山 敏雄、

中村 勝之助

近藤 宗彦

三橋 弘

浜野 碩太郎

豊田 秀穂、

渡辺 治生、

大分縣北海郡小佐井村

富山縣高岡市液籠町

市外尾久町上尾久一九二五

岩手縣和賀郡黑沢尻和賀病院

呂川區五反田一丁目一二五

八王子市八日町三一

北海道十勝國帶廣町

福島縣石城郡四倉町（四倉三五）

目黒區駒場町七九七

橫濱市鶴見區生麥町三八（鶴見三四六）

渋谷區代々木山谷町三一四

杉並區清水町二一〇（荻窪一三五四）

牛込區喜久井町二〇

山口縣大津郡人丸

杉並區阿佐ヶ谷二丁目五八六

神野澄晴

吉崎純

竹下貫一

高巢三四一

駒井忠雄

四條龍作

小内昇

木村守江

原廣治

佐藤盛二

生田幸喜

○橫山虎雄

○川田正雄

吉野史朗

○中村次郎

四谷區右京町二二

足利市伊勢町

赤坂區青山北町一ノ八

牛込區納戸町一七

朝鮮京城府漢江通二ノ一(二四号官舎)

四谷區左門町二八

浅草區七軒町四 東京痔病院

赤坂區青山北町三ノ六七

麻布區新網町一ノ五五

豊橋市

杉並區成宗一丁目九六

中野區沼袋町南二丁目二一四

麻布區本村町二二五(高輪九二五)

世田ヶ谷北沢三丁目九九〇

前橋市北曲輪町

桑野鉄四郎

槍田 榮

○岩原 實猪

○森 文雄

松井 八郎

河内野 弘徳

○高橋 福三郎

○藤原 道純

古川 明

松橋 一

○君塚 正

○鍋島 勉

○前田 和三郎

村上 晋

関口 林五郎

北海道小樽市小樽病院

長野縣小諸町赤坂町

静岡縣田方郡土肥村土肥 尾形別荘

ブラデル、リオデヂヤネイロ

麴町區麴町ハの七麴町アバト廿七号

荏原區中延町一〇八七（荏原三一四〇）

四谷區大番町一〇三 古川方

横浜市真金町病院

宮崎縣宮崎市上野町三ノ六

本所區若宮町一〇九 本島方

大連市黒石礁清風寮

本郷區千駄木町五八 莊司方

静岡縣浜松市 森下病院

埼玉縣川越市小仙波一、一一一埼玉病院（川越三七六）

杉並區東田町二丁目一五〇

一九〇

井上 太郎

吉 岡 勝 衛

中 村 廣 人

八 木 勝 郎

〇 土 方 久 顯

〇 百 溪 定 七 郎

〇 瀨 尾 省 三

小 口 宇 一

弓 削 中

〇 小 野 田 肇

加 藤 銀 治 郎

〇 志 田 元 秀

森 下 貫 一

〇 橋 本 文 吾

〇 伊 藤 由 比

世田ヶ谷區代田一丁目六五二ノ五

浅草區八幡町四

三重縣津市西町、老松旅館

青森縣西津輕郡森田村増田分院

淀橋區東大久保二丁目一八六

神田區豊島町ニ〇尾崎アパート四六

淀橋區戸塚町三丁目八九一（牛込五六五取柄本）

浅草區田中町八〇

中野區住吉四八 山静莊内

中野區上高田一丁目十五山本方

文部省航海練習船海王丸乗組

長野縣下伊那郡富草村中島天龍分院

京橋區横町二丁目七（京橋ニ三〇ニ）

横浜市山下町 山下病院

在ブラジル

蓮江英男

○堀田善二郎

富田勝郎

小方則太郎

○小澤武雄

○田村信介

○田中周吉

辻岡元

○武藤藤太郎

○布留文夫

寺田泰三

相見三郎

○酒井欣郎

森豊明

細江静男

芝區三田綱町一 小島方(三田一五一七)

中野區上高田一丁目四七

大森區新井宿四丁目九八四(大森一〇二八出呼)

澁谷區豐沢町六七慶應寄宿舎内(高輪五七四六)

横浜市中區西戸部町七二二(長者町六〇八)

四谷區東信濃町九 川添方

日本橋區橋町一ノ九(浪花二六四六)

市外杉並區阿佐ヶ谷五〇四

中野區朝日ヶ丘二

中野區打越町二四

赤坂區新町四丁目十八(青山七二六四)

豊島區駒込五丁目九八〇

澁谷區渋谷町神泉三二(青山七八四〇)  
鴨飛田取次

中野區沼袋町南二丁目七四

荒川區三河島町四丁目三四六二

○洪名元中

○若林研爾

○神山地真氣

○成内穎三郎

○森山成一

○泉本勝之進

○笹島彦次郎

○島田信勝

○明樂治部輔

○照井侃

○井手行乎

○伊藤國男

○板橋剛

○島中卓助

○門橋勇

本郷區弓町一ノ二六 <small>(小石川五八八一諸橋取次)</small>	○龍野一雄
城東區龜戸町六丁目一〇 <small>(有川方(岡田四九六)大藤呼出)</small>	○中村寛
目黒區洗足一四七二番地ノ四 <small>(荏原三六二〇)</small>	○野崎寛三
豊島區池袋四丁目四三六 <small>(大塚二二五三)</small>	○古山實
淀橋西大久保二丁目二八三	○小平正
渋谷區永住町一五 <small>(青山五五〇八)</small>	○齋藤修二
板橋區小竹町二四六一	○宮尾啓

## 編輯後記

一九四

○毎度御目通りを致しまして、変り栄えの致しません処を御目にかけます。新しい種も盡きまして、無い智慧を絞って、どうやらこうやら一冊の本に仕上げました。

○御蔭様で原稿の方は各方面から多大の御同情を戴き、沢山集まりました幸は編輯局員一同感謝致して居ります。

○挿画・漫画の類で少しでも面白いと御目に止りますものがありましたならば是は大概新進作家K君の腕に依るものであります。

○別館銅版画の漫画三枚は七十五週年記念の記を御参照下さい。

○別館全景は病院で飛行機から寫したものを借りて來ました。

○猶名簿は大東京に成りました彼の調査、不行届の為或は誤りがあるかと知れません。御序の節正しい住所を御一報願ひます。

○猶最後に來年と亦振つて御投稿下さらん争を今からお願ひ致します。



昭和七年十二月十五日印刷  
昭和七年十二月十七日發行

(非賣品)

發行者

東京市四谷區西信濃町廿二番地  
慶應義塾大學醫學部  
外科整形外科教室同窓會

編輯者

百 溪 定 七 郎  
田 村 信 介  
伊 藤 島 彦 次 郎  
藤 國 男

印刷所

東京市牛込區神樂町一ノ十二  
田 中 膳 寫 堂  
電話牛込一五二一

發行所

東京市四谷區西信濃町廿二番地  
慶應義塾大學醫學部  
外科整形外科教室

不許  
複製

慶應義塾大學醫學部教授  
醫學博士 茂木藏之助著

外科類症鑑別診斷學 (全)

最も嶄新なる編輯法と充實せる内容を有せる本書は果然斯界に絶大なる好評を博しつゝ、あり!!

本書納むる所の内容は外科百般並にその境域疾患に況り第一編は外科診斷法要項第二編は外科診斷学総論第三編は外科診斷学各論に分たれ、全卷内容を表示し、重要事項は餘す所なく細字を以て密載すると共に、各所に優美精巧なる圖版を挿入したれば、使用者の需用に従ひ、簡ならんことを欲すれば簡に、詳細ならん事を欲すれば詳細に、意の儘に検索し得べし。初心者も用ふべく大衆と亦伴侶となすを得べく、外科に關すると否とに拘らず一本を座右に備へて診療の友とするに便なり。

猶又書籍の体裁は三三版七四九頁の大冊黄褐色クロース金文字入り美本にして寔に近來の快者と信じ敢て江湖に獎むる所以なり。

東京市本郷區龍岡町三十一番地

發行所 南山堂書店

電小石川四二三・振東六三三八

